独立行政法人福祉医療機構　平成19年度子育て支援基金助成事業

乳幼児の育児と生活に関する実態調査

報告書

平成20年3月

社団法人　全国私立保育園連盟

はじめに

社団法人全国私立保育園連盟
子育て・保育総合研究機構
代表　　遠山洋一

０～３歳の時期を子どもがどのような環境の下で過ごすか、養育者がどのような子育て観を持ちどのような関わりを持ちながら子育てを行うかが、その子の人間形成に大きな影響があるということは、保育関係者にとってはほとんど自明のことですが、一般にはさほど強く意識されているとはいえないでしょう。

政治的にも、これまでは、出生数の回復や待機児童の解消といった差し迫った課題が前面に押し出されて来ました。それはまだ続くでしょうが、それと並んで前記の課題がもっと認識されなければならず、また「次世代育成支援」の視点からも、また「幼児期の教育」の視点からも、次第に認識されるようになって行くことと思われます。

３歳未満児のうち保育所で保育されている子どもは全体の２割で、８割は保育所以外の場、ほとんどは家庭で養育されている子どもたちです。その子どもたちがどのような生活実態にあり、その子どもたちにどのような養育環境が用意される必要があるのかということは、もっともっと追究されなければならない問題です。

今回の調査研究では０歳は対象から除き１～３歳を対象にしましたが、特にこの時期は、子どもの探索活動や見立て遊び、ごっこ遊びが盛んになり、人への関心ももつようになると同時に幼い形での自己主張が始まり、養育者はそれに手を焼く半面「しつけ」を意識せざるをえない、ある意味でとても難しい時期です。

もしもこの時期の子どもたちに、保育に欠ける欠けないを問わず、保育所のような場（子どもの集団があり、専門家がいる場）が用意されるのが望ましいのであれば、それが現実のものとなるような政策が具体的に検討されるべきでしょうし､必ずしもそうは言えないというのであれば､では家庭を補うどのような場が必要なのか、それは子育て広場のような場なのかそれとも一時保育のような場なのか、またどんな支援のネットワークがあったらよいのかが、もっと真剣に検討されるべきだと思います。それは保育所が担うべき「地域への子育て支援」の役割とも重なるものです。

以上のような問題意識から今回の調査研究は企画され、第一生命経済研究所主任研究員である松田茂樹氏をリーダーとする研究チームにお願いして計画・実施されました。また、この調査研究は、独立行政法人福祉医療機構の平成19年度子育て支援基金の助成を受けて実施されたものです。

研究チームのメンバーの皆さんをはじめ、関係各位に対し、心から感謝申し上げます。それとともに、各方面の多くの方々によって、この調査研究の結果をもとにさらに問題が掘り下げられ論議されて行きますようお願い申し上げます。

保育生活環境研究会

委員長	松田　茂樹	第一生命経済研究所主任研究員
委　員	汐見　和恵	東京文化短期大学准教授
	品田　知美	立教大学講師
	末盛　　慶	日本福祉大学准教授
	下開　千春	第一生命経済研究所副主任研究員

● 目 次 ●

はじめに ……1

第１章　調査の目的と概要 ……7

第２章　親子の日常生活と子どもの発達 ……11

第３章　育児を支えるネットワークと育児の悩み ……25

第４章　子育て支援の利用と育児意識、夫婦関係 ……45

第５章　父親の職業生活と家族生活 ……63

第６章　父母と子どもの健康・救急外来の利用状況 ……81

第７章　総括 ……97

調査票 ……101

第１章　調査の目的と概要

１．調査目的

本調査は、１～３歳の幼い子どもをもつ親の子育ての現状をアンケート調査によって明らかにするものである。現在わが国は未曾有の少子化であるが、子育てをめぐるさまざまな困難が子どもを産み育てることを難しくしていることがその背景にある。中でも子どもが小さい時期の子育ては、身の回りの世話等についての親の負担が大きく、育児の悩みも多い。本調査はこの時期の親がどのように子育てをし、どのような子育ての困難を抱えているかを明らかにして、次世代育成のために彼らに対して求められる支援策を示すものである。

社団法人全国私立保育園連盟では、これまで乳幼児をもつ親等を対象に子育ての現状の調査を実施してきた。全国私立保育園連盟（2004）では、関東１都６県の私立・公立保育園を利用する親と担任の保育士等に対して調査を行い、子どもが他者と関わる力と保育環境、家庭環境の関連を調べた。この調査から、保育士による子どもへの働きかけが子どもが他者と関わる力をはぐくむことに寄与していることなどが見出された。全国私立保育園連盟（2006）では、首都圏の私立・公立保育園、幼稚園、子育て広場を利用する父母を対象に、家庭における子育ての様子や保育園・幼稚園からのサポートなどについて調査を行った。その結果、母親の育児不安が高いことが追加出産意欲を低下させること、保育園・幼稚園から保護者に対するサポートが多いほど母親の育児不安や悩みは低下することなどが見出された。これらの調査から現代の子育ての現状について数多くの知見が得られたが、調査対象の中心が保育園・幼稚園を利用する親子であったため、在宅で子育てをする家庭の多い３歳以下についてはこれまでの調査では不明であった。

本調査は、前記の調査で十分把握されていない１～３歳の子育ての現状を把握するものである。具体的な調査項目としては、子どもの生活リズム、育児を支える親族や非親族の関係、父親の育児への関わり、親の子育て支援に対する要望、親の働き方、子どもの健康と医療等、多岐にわたる。子育てについての調査は数多くなされているが、低年齢児の子育てについてさまざまな角度からその実態を探ったところに本調査の特徴がある。

調査概要の詳細は次節で述べるが、調査地域は愛知県である。愛知県を調査地域に選定した目的は、第一に、先述の２調査は関東地方と首都圏が対象であるが、これらの地域以外の子育ての現状を把握することがあげられる。第二に、愛知県は好調な工業を背景に他地域よりも雇用が安定しており、合計特殊出生率も全国平均以上で首都圏や京阪神圏よりも高く、親族の支えも強いことから、比較的次世代育成の環境が整った地域であることがあげられる。逆にいえば、この地域において子育ての困難があれば、それは他地域においても共通する問題である可能性が高いとみられる。

本書の構成は次のとおりである。２章では親子の日常生活や子どもの発達の様子を、３章では育児を支えるネットワークと子育ての悩みの関係を分析する。４章では夫婦関係や子育て支援に対する要望を、５章では労働環境とストレスの関係等を述べる。６章では父母と子どもの健康と医療の問題を分析し、最終章では以上の調査結果を総括する。

2．調査概要

本調査の調査対象は、愛知県在住の１歳～３歳児の父母800世帯である。

調査対象者の抽出方法は、層化２段無作為抽出法を用いた。調査方法は、留置法とした。調査時期は、2007年６月30日（土）～７月16日（月）である。

調査の結果、有効回収数は562世帯、有効回答率は70.3%となった。うち、母親は559人、父親は513人である。このうち、母親と父親が同居している者は500世帯となり、父母の調査結果が揃った500世帯を分析対象者とした。

分析対象者の主な属性は図表１－１に示すとおりである。

末子年齢は、１歳児（31.6%）、２歳児（35.2%）、３歳児（33.2%）となっている。父母の平均年齢は、母親33.1歳、父親34.8歳である。就労形態は、母親で無職・家事（62.2%）が、父親でフルタイムの勤め人（85.6%）が最も多い。居住地域は、名古屋以外の市（47.6%）、名古屋市以外の町（27.2%）、名古屋市（26.3%）の順となっている。

図表1－1　分析対象者の属性

末子年齢

	1歳児	2歳児	3歳児
n	158	176	166
（%）	31.6	35.2	33.2

年代　（%）

	20代前半	20代後半	30代前半	30代後半	40代以上
母親	2.4	16.4	45.8	29.2	6.2
父親	1.6	10.8	38.6	34.2	14.8

平均年齢　（歳）

	平均年齢
母親	33.1
父親	34.8

就労形態　（%）

	フルタイムの勤め人（産休・育休中含む）	パート・アルバイト（産休・育休中含む）	派遣・嘱託	自営業・家族従業者	自由業・フリーランス	無職・家事	その他	無回答
母親	9.4	16.0	1.0	6.2	1.2	62.2	3.8	0.2
父親	85.6	0.4	0.8	11.4	1.0	0.4	0.2	0.2

最終学歴　（%）

	中学校・高校	各種専門学校（高卒後）	短大・高専	大学（４年制）	大学院	その他	無回答
母親	32.0	18.6	29.2	19.0	0.6	0.2	0.4
父親	35.6	12.4	3.6	41.4	5.8	0.8	0.4

居住地域

	名古屋市	名古屋市以外の市	名古屋市以外の町
n	134	238	128
（%）	26.8	47.6	25.6

文献

全国私立保育園連盟、2004、『独立行政法人福祉医療機構平成15年度子育て支援基金助成事業保育園がはぐくむ関係性に関する調査研究―子どもが他者と関わる力をはぐくむ保育環境と家庭環境　報告書』。

全国私立保育園連盟、2006、『独立行政法人福祉医療機構平成17年度子育て支援基金助成事業乳幼児をかかえる保護者の子育ての現状―不安・悩み、出産意欲に関する調査　報告書』。

第２章　親子の日常生活と子どもの発達

１．子どもの食生活

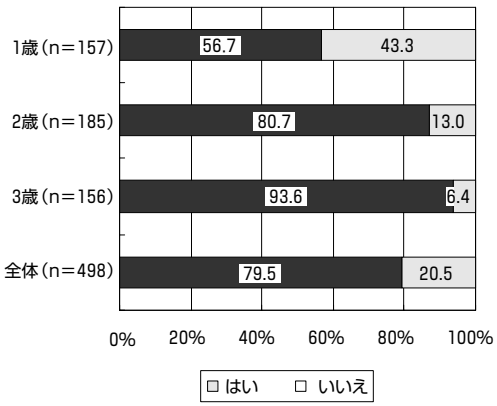
子どもは乳幼児期に母乳やミルクから離乳食を経て、大人とさほど変わらない食生活ができるよう、急速な変化をとげる。そのため食生活は、親たちが日常生活の中でとりわけ気を使う領域となっており、子どもへの悩みの中でも食にかかわる項目は上位を占めている（３章参照)。近年、食生活の変化が問題化されることが増えているが、幼い子どもたちの食生活はどんな実態となっているだろうか。卒乳の時期と母親が観察した現状からみておこう。

(1) 卒乳の時期

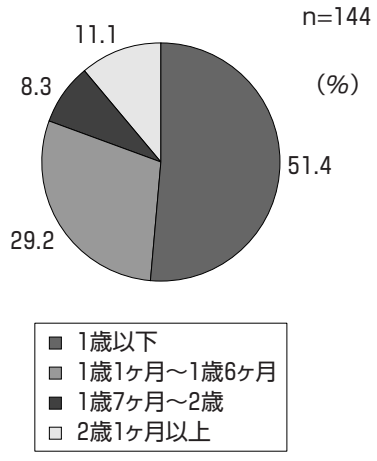
１歳児の卒乳割合は56.7%にとどまっている。２歳児でも13%は卒乳しておらず、かなり長期間にわたって母乳やミルクを飲む子どもたちがいることがわかる。母乳が出なくなることによって自然に止めるのでない場合に、１歳ごろの断乳は無理にしない傾向が浸透していると考えられる。

３歳児のうちで卒乳が済んでいる子どもについて、その時期をたずねたところ１歳以下と答えた人は約半数にとどまり、１歳半でようやく８割になる。１歳で断乳をすすめる育児アドバイスがなされる機会が減った昨今では、実際に半数以上がこの時期を過ぎても母乳（哺乳瓶によるミルクの場合もある）を飲んでいる子どもが多いということがわかる。３歳で卒乳していない子が6.4%いることから、合わせると２歳までに卒乳しない子はおそよ６人に１人となっている。

図表2−1　卒乳の有無と子どもの年齢



図表2−2　卒乳の時期（3歳児）



(2) 食生活の現状

子どもの食生活について問題と意識されやすい内容の項目をとりあげ、あてはまるかどうかをたずねた。「あてはまる」と答えた割合が高かった項目は、「食べる量にむらがある」と「遊びな

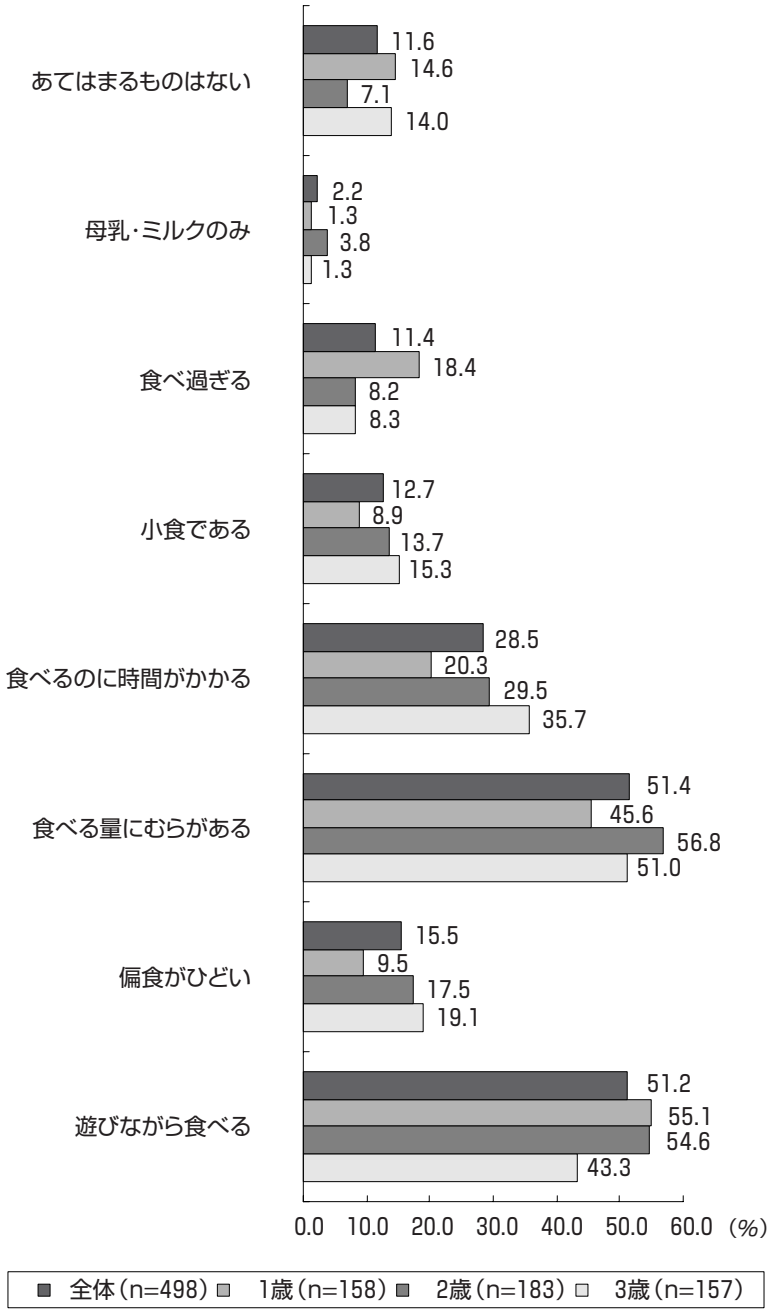
がら食べる」であり、約半数に達している。３章で子どもへの悩みを聞いている項目では、「食が細い・偏食・過食である」という内容に限定して聞いているにもかかわらず、20%以上の人が悩んでいると答えている。つまり、ここで「あてはまる」と答えた人の多くが、現状を食生活の悩みとして意識していると想定できる。具体的な項目をみると、小食・過食・偏食といった食べる量と質の問題よりも、時間がかかったり、むらがあったり、遊びながらといった食のしつけにかかわる側面の方がより問題と感じられている。母親たちは日々食事の場面で相当に頭を悩ませながら、健康を守れる人間らしい食事のマナーを身につけようと苦労している様子がうかがえる。

また、子どもの年齢でみると、特に２歳児を持つ母親は、１歳児や３歳児よりもなんらかの食生活上の問題があると意識している人の割合が高くなっている。年齢の上昇に伴って単純に悩みが減るということはなく、むしろ項目によっては悩みが増している場合がある。例えば、「小食である」とか「食べるのに時間がかかる」とか「偏食がひどい」といった項目は、親としては子どもの成長に伴って、より多く／速く／好き嫌いなく食べられるはずだ、という期待水準が上昇するのに、子どもはあまり変化していない、といった場合に現れやすい悩みとなっているのだろう。それに対して、「遊びながら食べる」といった項目は、３歳になると10ポイント近く減るので、ここで食習慣に関して成長が感じとれる子どもが増えるのだろう。

２歳児で「母乳・ミルクのみ」と答えた人は3.8%おり、この年齢では問題として意識されやすくなったのだろう。また、２歳児で卒乳していない子どもだけを取り出して悩みの傾向をみると、「小食である」という悩みをかかえる母親の割合が21%で、全体が13.7%であったのに対してかなり高めとなった。ただし、卒乳していない場合には他の悩みを抱える母親はむしろ少ない。「遊びながら食べる」とか、「食べるのに時間がかかる」といった項目に限ると、10ポイント以上悩む割合が少ない。つまり、食生活のしつけ上で問題が発生するのを避けて母乳やミルクを飲ませつづけている、というケースも少なからずあると考えられる。

一般的に、母乳やミルクを多く摂取していれば食欲は落ちるといわれる。２歳で卒乳していない子どもは数としてはそれほど多いとはいえないが、栄養バランスという視点からみると、母乳やミルクに偏った状態にある子どもがいるのではないか。

図表2−3　母親の食生活上の問題意識と子どもの年齢



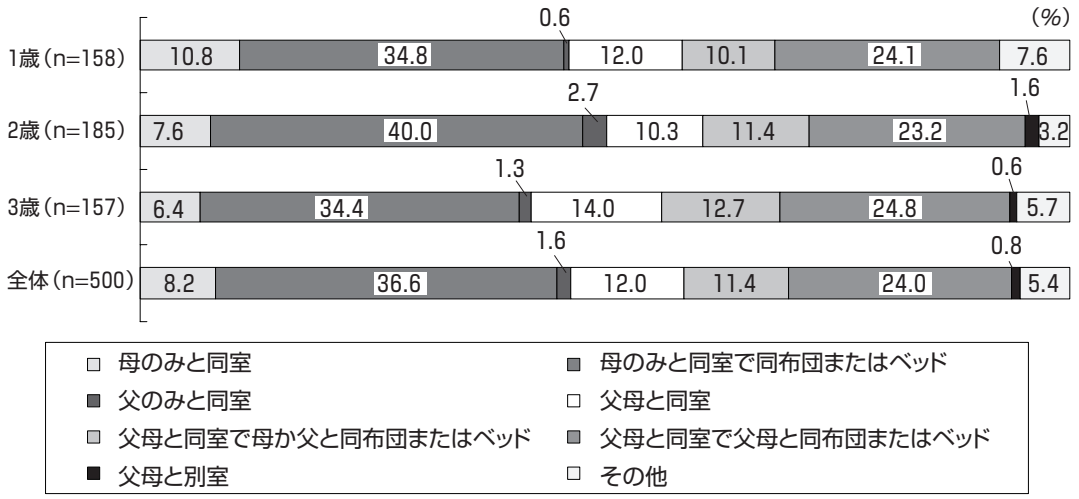
2．親子の就寝のしかた

古くから親子の就寝形態の多様性については知られてきたが、現代の親子も様々な就寝形態をとっている。調査結果によると、父母と別室で寝る子どもの割合は全体で１％未満となっており、日本人の子育ての特徴とされる親子同室就寝の現状がよく現れている。ただし、約半数は母親とのみ同室で、父母と同室が残りの半数を占め、父のみと同室はわずかである。また、同室というだけでなく布団やベッドなど寝具などを共有している親子が70%にのぼることからも、親子の就寝時において身体的な接触度合いはかなり高いといえる。

親子の就寝のしかたからみると、母親・子どもと父親に生活空間が分離されている傾向がうかがえる。母親のみとの同室就寝が父親の働きかたの影響によるものかどうかをみるために、クロス集計表を作成して確認したところ、土日出勤の頻度、夜間出勤の有無、残業時間の有無といずれも関連がみられなかった。さらに、住居形態として、相対的に余裕のある空間を所持していると考えられる一戸建て持ち家に住んでいるかどうかで比較してみても、関連はみられなかった。弱いながらも関連がみられたのは母親の年齢で、高齢であるほど割合が高まり、全体では50%のところ40代だけをみると68%が母子のみ同室であった。晩婚化に伴って、この年代での出産が今後増えると、さらに母子のみの同室就寝率が高まるかもしれない。

子どもの年齢によって親子の就寝のしかたはあまり変化しない。母子のみで寝ている場合に、同じ布団やベッドだった割合は１歳児の34.8%から、２歳児の40%へとむしろ増えている。これは、幼い頃は窒息の危険などをさけるためもあって、ベビーベッドを使用する人も多いからかもしれない。

図表2−4　就寝形態と子どもの年齢



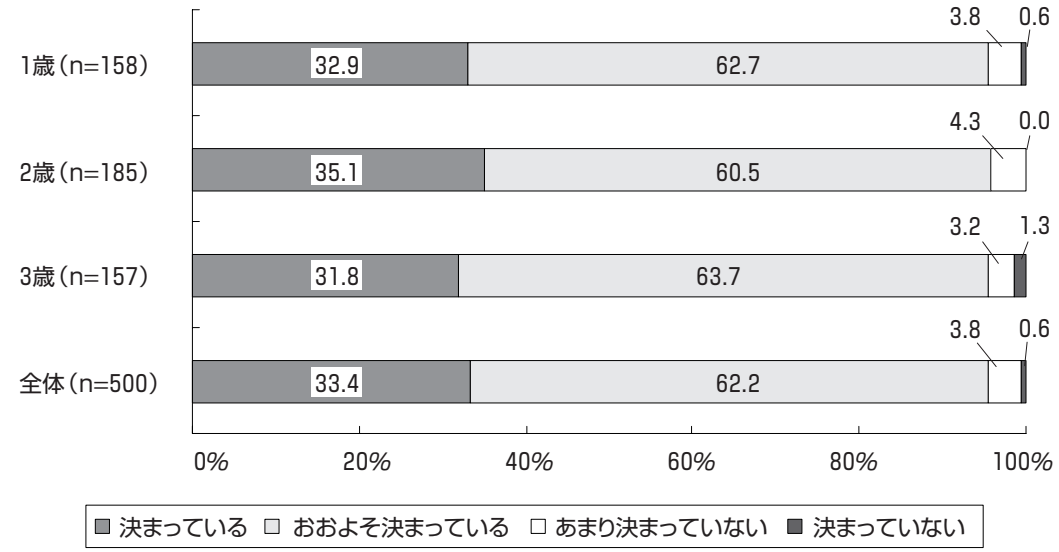
3．子どもの生活リズム

(1) 生活リズムは決まっているか

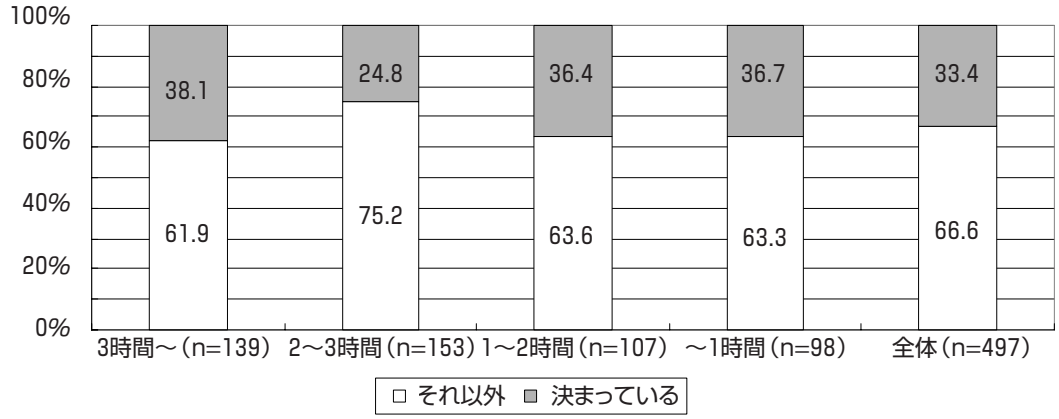
平日の子どもたちの生活が「決まっている」または「おおよそ決まっている」と答えた人をあわせると96%にもなり、かなりの割合でリズムが決まっている子どもが多い。ただし、０歳児を別として、年齢とともに生活リズムが決まっていくという傾向が強まるとは限らず、１歳から３歳までにかけても一定数のあまり決まっていない子どもがいる。

生活リズムが「決まっている」と答える割合が、父親の働き方に影響されているかどうかをみたところ、夜間勤務の有無とは関連がなかったが、残業時間とは関連があった（有意確率６％）。父親の残業が２時間から３時間であると、「決まっている」と答える割合が最も減り、それより短くても長くても決まっている割合が増える。おそらく、恒常的に３時間以上の残業があるような世帯では、母子と父親が全く別のリズムで暮らすからであろう。ただし、人数でみると２～３時間くらいの残業をする父親が最も多い。あらかじめ予定が決まっている夜間勤務とちがって残業は不定期であるし、子どもが寝る前に顔をみようと帰ってくる父親が、意外と子どもの生活リズムに影響を与えているのかもしれない。

図表2−5　子どもの生活リズムと年齢



図表2−6　子どもの生活リズム父親の残業時間



（2）子どもの生活時刻

平均時間でみると、子どもたちの生活はかなり健全なものにみえる。朝は7時過ぎごろに起き、30分ほどして朝食を食べて、9時半ごろには外出する。12時になったら昼食をとり、1時半ごろに昼寝をする。1時間半ほど寝て3時ごろに起き、夕食を6時半ごろにとって9時半よりも前には就寝する。

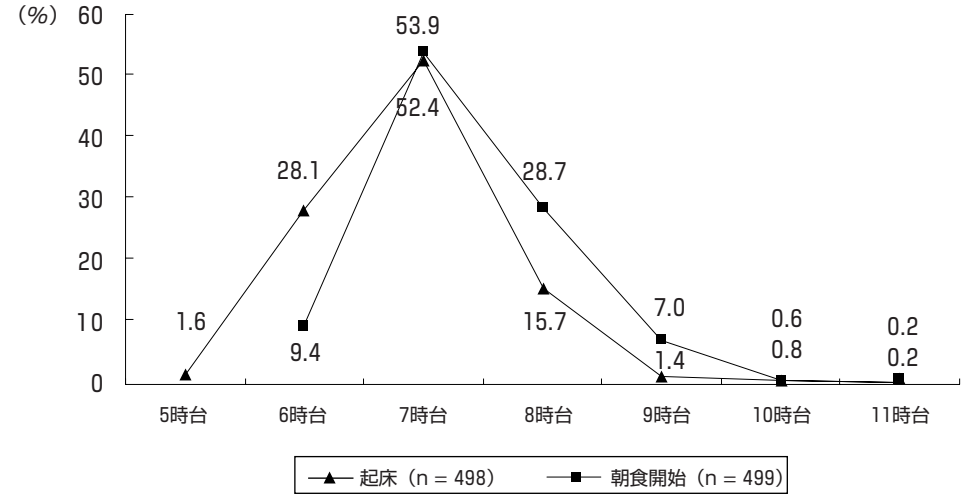
年齢による生活リズムの変化は、就寝起床や朝食夕食開始では小さくなっている。昼間については、3歳になって通園が始まる子が増えると、外出時間が1時間早まり、成長とともに昼寝の時間が変わる。2歳までの子どもはほぼ100%昼寝をしている。3歳児の3人に1人は昼寝をしていないので、その分早く眠くなる子どもが多いと見られ、平均でみると就寝時間はやや早まっている。また、昼寝をする子どもも入眠が遅くなる。

図表2−7　平均時刻からみた子どもの生活リズムと年齢

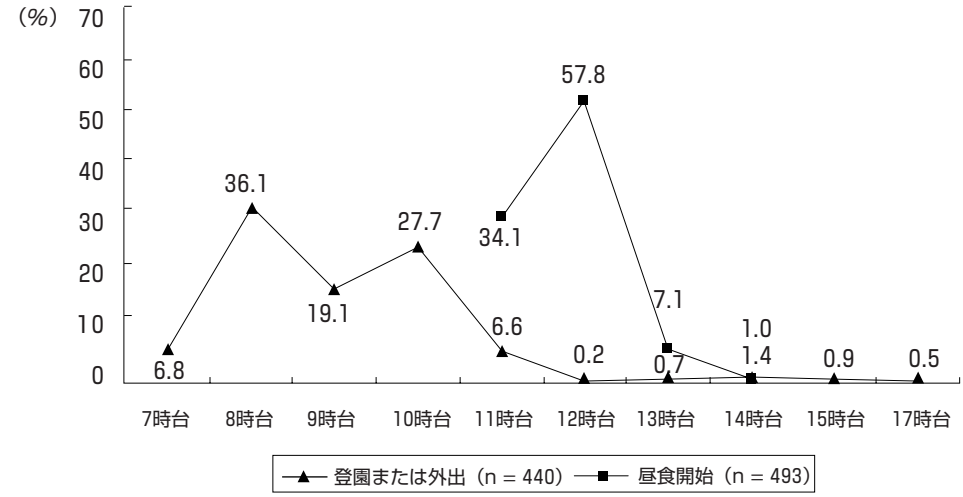
	起床		朝食開始		登園または外出		昼食開始		昼寝入眠		昼寝起床		夕食開始		就寝	
	時	分	時	分	時	分	時	分	時	分	時	分	時	分	時	分
1歳	7	6	7	46	9	54	12	7	13	17	14	60	18	28	21	15
2歳	7	11	7	43	9	33	11	60	13	22	15	8	18	32	21	21
3歳	7	9	7	36	8	53	11	52	13	44	15	12	18	28	21	7
全体（n=500）	7	9	7	42	9	25	11	59	13	25	15	6	18	30	21	15

つぎに、1時間ごとに区切ってみたときに、各時間帯で何%の子どもがそれぞれの生活行動を行っているのかをグラフにした（図表2-8から図表2-11)。グラフがとがっているほど一定の時間に同じ行動をしている傾向があり、平らなほど時間帯がバラバラである傾向があるといえる。朝の起床は平均時間の前後で2時間くらいの幅で散らばっている。昼食時間にはあまり差がなく、昼寝の入眠、夕食開始、就寝時刻には同じように平均時間から前後2時間くらいのずれが生じている。つまり、生活時間が「決まっている」「だいたい決まっている」子どもが多いとはいえ、時間帯で見ると4人に1人は毎日10時以降に寝ていることがわかる。

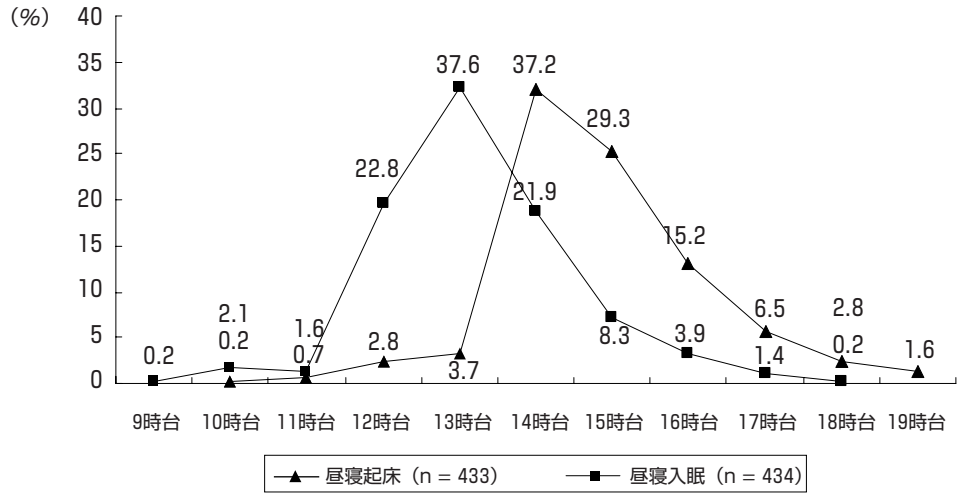
図表2−8　子どもの起床と朝食開始の行動者率



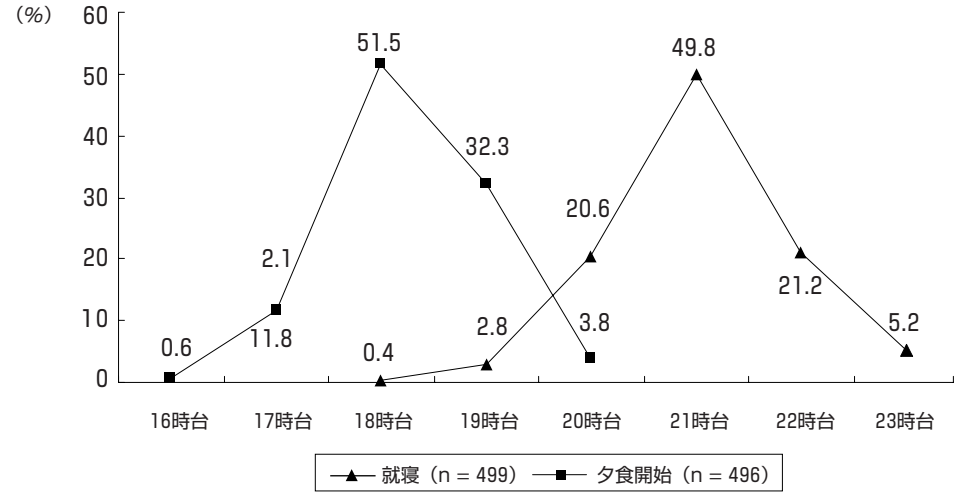
図表2−9　子どもの登園または外出と昼食開始の行動者率



図表2−10　子どもの昼寝入眠と起床の行動者率



図表2−11　子どもの夕食と就寝開始の行動者率



また、１、２歳児のみのデータに限って、保育園通園の有無が、朝の起床と就寝の時刻にどのような影響を与えているのかをみると、７時前に起きる子どもは全体よりも通園組の方が14%程度多かった（有意確率１%）。ところが、10時以降に寝る子どもの割合は、通園の有無による差がみられない。保育園に通うことが就寝を遅くすることはないようだ。逆にいえば、保育園児は、昼寝の時間を余分に確保できない場合、睡眠時間は少なめになっている子どもがいるとも考えられる。さらに、母親や父親の仕事時間と子どもの生活時刻との関連をみたところ、影響がみられなかった。（注：父親の場合、相関係数のとりかたによっては、仕事時間がゼロの人が夕食、就寝時間を早めている事例がみられたもののそのサンプルを除けば関連がない）。これはかなり意外な結果であるように思われる。父親だけではなく母親が10時間以上仕事に出ているケースも相

当数あるにもかかわらず、子どもは母親が無職の場合と変わらずに6時に夕食をとってリズムが守られているという事実からは、母親と父親以外の日常的な支え手の存在がいると推察される。親たちは子どもの生活リズムを維持できる見通しが立った場合にのみ働いているようである。

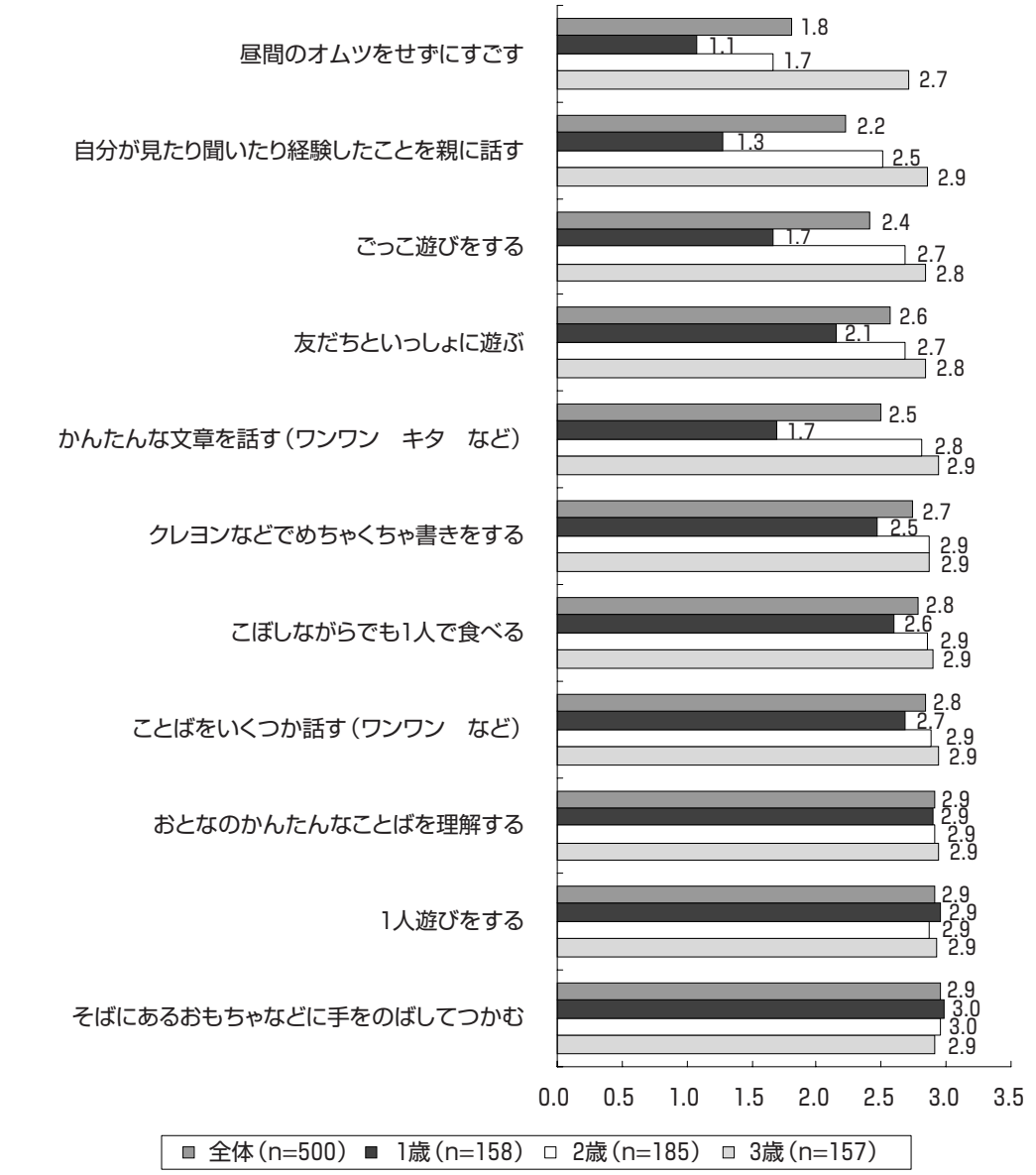
ただし、本調査では回収率が非常に高いとはいっても、3割の世帯からは未回収であることを忘れてはならないだろう。子どもの生活リズムを守るなどといった点を考慮する親たちが、調査票へ回答をよせる割合が高まるであろうという点を考慮すると、生活リズムを整えきれない親子が現実に相当数いることは十分に否定しきれない。

4．子どもの発達からみた様子

子どもの様子についてそれぞれの項目を「する」と答えた場合に3点、「ときどきする」と答えた場合に2点、しないと答えた場合に1点を与えて、項目ごとに年齢の平均点を算出した結果が図表2－12である。3歳になるとほぼ全ての項目が3点満点に近くなっている。1歳から、2歳にかけては、言葉の発達やごっこ遊びなどの得点が急速に伸びる時期であることがわかる。また、この時期は友達と遊ぶなど、親子関係から仲間関係へと広がり始める頃でもある。

では、子どもの発達によい影響を与える因子として何が重要であろうか。最近では幼い頃から発達をうながそうと、親たちは様々な早期教育をさせている。1歳児でなんらかの習い事をさせている割合は16.5%、2歳児では25.4%、3歳児では36.9%にも上っている。図表2－13では、保育園への入所と習い事の有無別に発達得点の平均値を示した。発達得点の平均値に統計的な差異が検出されるかどうかを一元配置分散分析によって確認したところ、1歳児に限れば習い事には正の影響がみられたものの、2歳児以上では有意確率が高く、影響ははっきりしない。一方、保育園に入所中かどうかは、全ての年齢層で影響が統計的に有意な水準にあった（確率はすべて3％以下）。地域の子育てサービスの利用の有無はどの年齢層でも関連がみられない。また、「友達といっしょに遊ぶ」という項目は保育園に入所していると、肯定的な回答がされやすい側面があると考えられるので、この項目を除外して発達との関連をみても結果は変わらなかった。ただし、保育園に入所している子どもには、年度の前半生まれが多くなりやすく、平均の月齢がやや高いという傾向がみられる。その影響を除去するために、偏相関分析で月齢を制御変数として投入しても保育園入所の有無は発達得点と相関している。

図表2−12　子どもの発達からみた様子と年齢

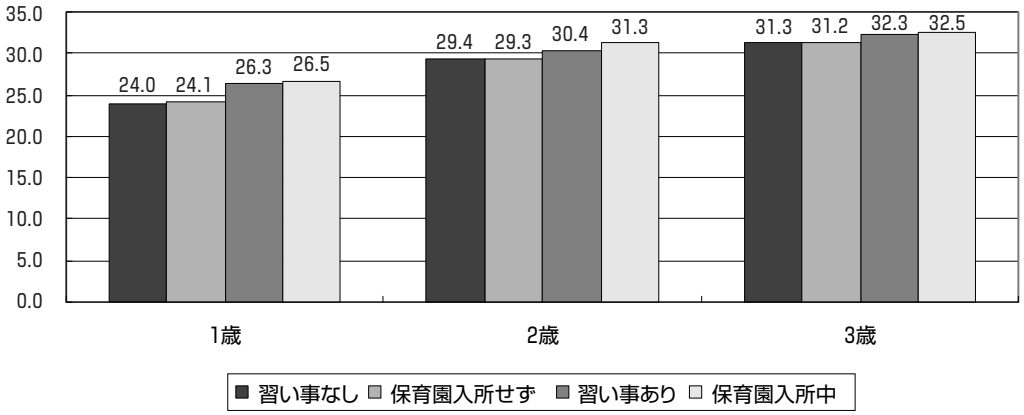


一方、発達に望ましくない影響を与えている因子は何であろうか。テレビやビデオ、DVDなどを視聴している時間の長さは、2歳児でみると子どもの発達に負の影響を与えている。けれども、これらの視聴時間と発達の関係は、保育園入所の有無を制御変数として偏相関をみると関連が消える。逆に、テレビ等の視聴時間を制御変数として投入しても、保育園入所の有無と発達得点は相関している。これらの結果から解釈すると、テレビ等の視聴時間が発達に与える負の影響は、保育園に通園している子がTVを見ていないという間接的効果であるように思われる。

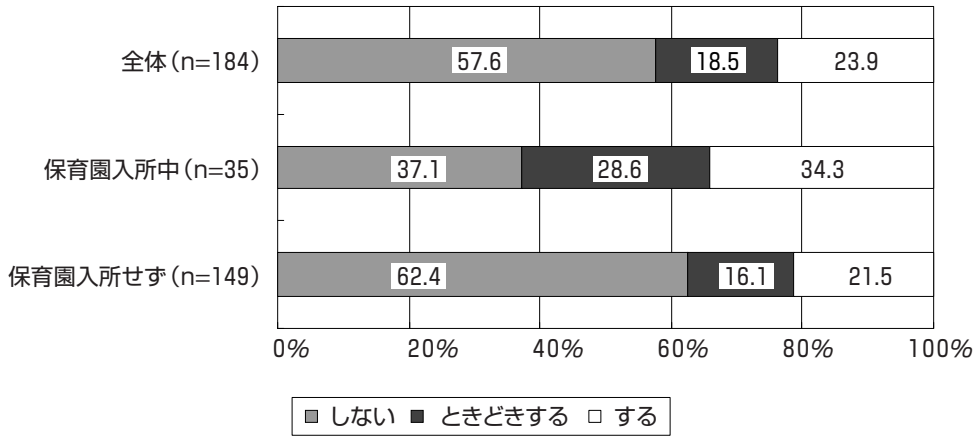
もっとも、ここで発達を測定するために用いた指標は、ごく限定的な内容に限られている。したがって、暫定的な結論にとどまるとはいえ、保育園への入所は子どもの発達をうながす側面があるようだ。

さらに、特にどのような項目で違いがみられたのかを確認しておこう。2歳から3歳にかけて「する」と答える割合が急速に増えるのが、「昼間のオムツをせずにすごす」という項目である。この項目には2歳時点での状況が保育園に入所しているかどうかによってかなり明確な差がある（有意確率2％）。図表2－14でわかるとおり、保育園に入所していない場合には、まだ62.4%が「昼間のオムツをせずにすごす」という経験をさせていないが、保育園に入所している場合は、させていない割合は37%にとどまっている。家庭の住宅環境では失敗がある段階でオムツをはずすという決断をしにくいといった面も関係する可能性がある。もちろん、オムツはずしが早ければよいというものではない。だが、親と保育士で子どもへの対応のしかたには相違があるし、園には恒常的に複数の大人や子どもと接する環境が整っている。その結果が子どもの発達によい影響を与えている可能性が示唆される。

図表2−13　子どもの発達と保育園の入所および習い事の有無



図表2−14　昼間のオムツをせずにすごす」と保育園入所の有無（2歳児）



5．親の生活時間

母親たちは、全体平均でみると家事・育児が中心の生活をしており、父親たちは仕事中心の生活をしている。また、少しでも仕事に時間を使っている人の割合は母親が38.4%で、父親が99.6%であった。母親については、仕事を持っているかどうかによって生活時間に大きな違いがあるので、仕事の有無ごとに平均時間を算出した。

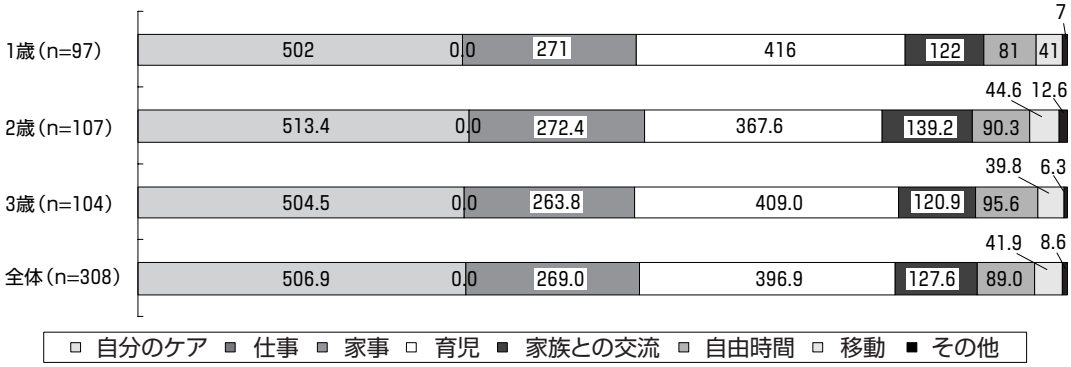
まず、仕事をしていない母親の生活は、家事・育児を合わせると一日あたり11時間程度を割いている（図表２－15)。仕事をしていない母親は、自分のケアや自由時間などをみる限りでは、仕事をしている母親や父親よりは相対的にめぐまれた水準にある。育児時間は２歳のときにやや少なくなる傾向があるが、これは３歳になると、２人目の子どもを持つ人の割合が増える影響もあると考えられる。育児は、家事よりも長時間にわたっており一日平均で６時間程度をかけられている。他の生活時間調査と比べると育児が非常に長くなっているのは、より詳細な行動分類を記述する方法によると、他の行動に育児が振り分けられる、といった違いが生じたものだろう。けれども、何をやっていても子どもを気にかけているという点で、乳幼児をかかえる母親の主観的な時間量としては、むしろ現実はこちらに近いのではないだろうか。

次に、仕事をしている母親は、仕事と家事・育児を合わせた総労働で12時間半程度に達し、多忙な生活の様子がうかがえる（図表２－16)。そのうち仕事は６時間程度で、ちょうど家事・育児と半分ずつという働き方が平均的であるようだ。仕事をしていない母親と比べると、通勤にかかる移動時間も増えるため、自分のケアや自由時間が切り詰められている。睡眠や入浴、食事など全てを合わせて８時間を下回るという生活である。継続するにはかなり過酷なものと感じられているのではないだろうか。

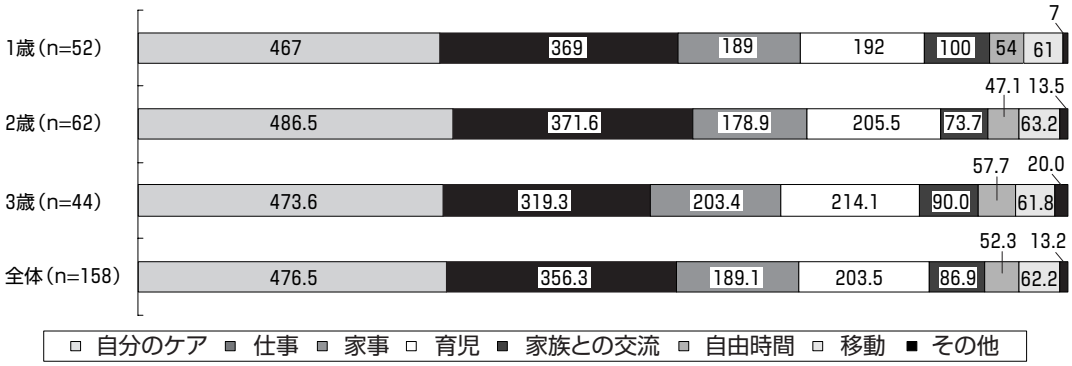
しかし、父親もゆとりある生活を送っている様子はみえず、仕事だけで一日平均で11時間の長時間にわたっている。その生活のなかで、子どもと接する育児時間や家族との交流を１時間程度は確保している。現代の父親たちは家事にはあまり参加しないが、育児にはかなり積極的にかかわろうとしているのであろう。今回の調査地は首都圏でないため、通勤に伴う移動が往復で約一時間程度ですんでおり、この分が育児にあてるゆとりを生んでいるともいえよう。また、仕事に出ている時間の全てが純粋の労働時間とは定義上はみなせず、ここには休憩や昼食などの時間が含まれている。職場に出ている時間という見方からは、仕事をしている母親の仕事時間も同様であり、乳幼児と離れて昼食時に休憩を取れるという点を考慮すると、仕事に出ている母親の方が厳しい生活をしているとも一概にはいえない。要するに、仕事をしている／していない、母親／父親を問わずに、幼い子どもを持つ親たちはみな忙しく立ち働いて暮らしている様子がうかがえる。

家事・育児の時間が子どもの年齢によってあまり変わらないという点は、子育てを支援するにあたって重要である。つまり、生後１年くらいを乗りきれば子育てが単純に楽になっていく、という様子はないし、仕事に復帰する母親が大きく増えるわけでもない。少なくとも、３歳まではずっと「子育て戦争中」といってよい時期が続いているのだと考えておく必要があろう。まして、そろそろ手が離れた頃に子どもをもう１人生んだとすればここからしばらく同じような生活が続く。子育ては長期的に支えられなくてはならないのである。

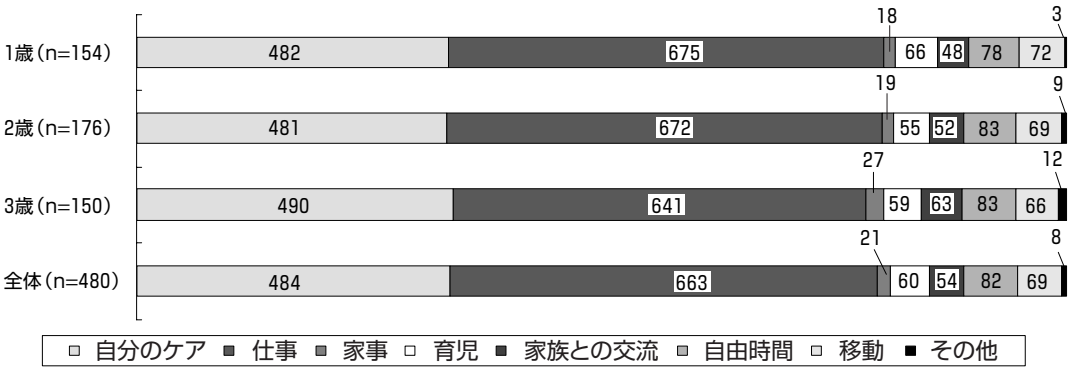
図表2−15　仕事をしていない母親の生活時間と子どもの年齢（一日あたり平均・分）



図表2−16　仕事をしている母親の生活時間と子どもの年齢（一日あたり平均・分）



図表2−17　父親の生活時間と子どもの年齢（一日あたり平均・分）



ところで、父親の仕事時間と母親の仕事時間には、まったく関連がみられない。つまり、母親がフルタイムの仕事を持っているからといって父が仕事時間を減らしているという実態はない。もちろん、父親も母親もそれぞれ自分の仕事時間が長ければ家事や育児の時間が短くなるという関係は当然ある。だが、相手の仕事時間は無関係なのだ。夫婦が２人で子育てを支えあうといった共働き像はこの調査ではうかがえない。仕事と家事・育児時間の関連の強さで比較すると、母親よりも父親の方が大きく、子育ての支え手を増やそうとするなら父親の仕事時間を減らす方が効果があるともいえる。

この現状のもとで、祖父母などの支え手が見つからなかった家族では、生活リズムを整えながら母親がフルタイム就業することは難しい。結局、母親が仕事をするならば、現実問題として生活を可能にする範囲の時間量にコントロールしつつ就業するほかはない。まずは何よりも、平均で毎日11時間以上を仕事に出ている父親の労働環境を変えることができなければ、乳幼児を持つ親たちが家族生活に時間的なゆとりを持つことは不可能であろう。

６．まとめ

食の面から親子の日常生活をみると、１歳時点での卒乳は半数程度にとどまり、２歳までに卒乳しない子どもはおそよ６人に１人となっている。また、親たちは食事の量や質といった内容よりも、食のしつけの面で日々悩まされている。就寝のしかたをみると親子同室が99%と圧倒的である。ただし、約半数は母親とのみ同室なので、幼い頃から父親と母子の生活空間が分離されている傾向がうかがえる。子どもたちの生活リズムは、この調査に回答があった家庭では乱れている様子がみられなかった。母親と父親が長時間仕事に出ている家族でも子どものリズムに変化はなかった。保育園への通園は起床をやや早めるが、夕食や就寝を遅くすることはない。

発達からみた様子では、どの年齢の子どもでも保育園の通園がよい効果を与えている可能性が示唆された。０歳から習い事をしている子どもは少なくなかったが、こちらの効果はみられず、現状では保育園通園という環境の方が、子どもの発達にとってよい影響を与えているようだ。

乳幼児を持つ親たちの生活時間をみると、仕事をしていない母親／仕事をしている母親／父親の誰もが忙しく、ゆとりがみられない。母親の仕事が長時間にわたる場合でも父親が仕事時間を減らしている実態はない。父親が平日の平均にして11時間も仕事に出ている現状の中で、祖父母などの支え手がいない母親たちは、子どものリズムを乱さない範囲で短時間の就労にとどめていると考えられる。賃金が上昇せず、子育てにはますますお金や時間をかけざるをえない現代にあって、子育てにかかわる人手を確保していくためには、政策による労働環境の改善が望まれる。

（品田知美）

第３章　育児を支えるネットワークと育児の悩み

１．育児を支えるネットワーク

(1) 育児を支えるネットワークがある割合

本章では、育児を支えるネットワーク、育児の悩み、育児の社会意識の分析結果を示す。第一に、育児ネットワークの現状を分析する。第二に、父母が育児で悩むことがらを分析する。第三に、育児を支えるネットワークがあることが、父母の育児の悩みを軽減することに寄与しているか否かを分析する。第四に、父母の育児についての社会意識の現状を分析する。

まず、育児を支えるネットワークの現状を分析した結果を示す。本調査では、母親に対して、「外出中に子どもの世話をしてくれる人」と「育児の相談にのってくれる人」を尋ねている（図表３－１）。母親は、それぞれについて、「母方の親」「父方の親」「兄弟姉妹」「その他の親戚」「近所の人」「友人」の中で、それらに該当する人の有無を回答した。

外出中に子どもの世話をしてくれるのは、「母方の親」が60.4%で最も多く、以下「父方の親」(52.0%)、「兄弟姉妹」(30.0%)、「友人」(27.4%) などとなっている。外出中の世話をする人としては、親族、中でも母親方と父方の親が多い。「その他の親戚」や「近所の人」があげられた割合は低い。

一方、育児の相談にのるのは、「母方の親」(90.0%) と「友人」(87.6%) が多い。しかし、「父方の親」(66.6%)、「兄弟姉妹」(55.4%)、「近所の人」(48.0%) も相談にのる人としてあげられる割合は比較的高いことから、幅広い人が育児の相談にのっている。

図表3−1　育児を支える人がいる割合

(%)

	母方の親	父方の親	兄弟姉妹	その他の親戚	近隣の人	友人
a．外出中に、子どもの世話をしてくれる人	60.4	52.0	30.0	12.0	13.8	27.4
b．育児の相談にのってくれる人	90.0	66.6	55.4	31.4	48.0	87.6

注）数字は、各セルに該当する人が「いる」と回答した人の割合。無回答は含めて集計。

(2) 世帯構成別にみた育児ネットワーク

母方の親や父方の親に子どもの世話をしてもらうことは、世帯構成（三世代世帯／核家族世帯）によって異なることが想定される。そこで、世帯構成別に育児を支える人がいる割合の集計を行った（図表３－２）。なお、三世代世帯といっても、母方の親が同居している場合と父方の親が同居している場合では、育児ネットワークは大きく異なるとみられる。しかし、本調査の場合、サンプル数が多くはないため、三世代世帯を母親方と父親方に分けた集計は実施していない。三

世代世帯の多くを占めるのは父方の親と同居しているものであるため、三世代世帯の集計結果にはその特徴が多くあらわれている。

外出中に子どもの世話をしてくれる人についてみると、核家族世帯の場合、「母方の親」が62.8%、「父方の親」が47.7%である。核家族世帯は、「母方の親」に外出中の世話を頼ることが最も多いが、約半数は父方の親にも頼っている。三世代世帯の場合、「父方の親」が77.8%と最も多いが、これは父方の親と同居している者が多いことが関係しているとみられる。しかし、三世代世帯では、「母方の親」をあげた割合も61.1%と高い。

育児の相談にのる人についてみると、核家族世帯は、「母方の親」が92.4%と高いのに対して、「父方の親」は65.7%である。三世代世帯は、「母方の親」が83.3%、「父方の親」が77.8%であり、「母方の親」の方が多い。

世帯構成によって、外出中の世話をする人または育児の相談にのる人として「友人」をあげる割合はほとんど変わらない。

続いて、父方の親による育児支援の有無と母方の親による育児支援の有無の関係が図表３－３である。核家族世帯についてみると、外出中の子どもの世話をする父方の親がいないものよりもいるものの方が、外出中の子どもの世話をする母方の親がいる割合が高い。また、核家族世帯では、育児の相談にのる父方の親の有無にかかわらず、母方の親に相談にのってもらうことは多い。

三世代世帯についてみても、外出中の子どもの世話をする父方の親がいないものよりもいるものの方が、外出中の子どもの世話をする母方の親がいる割合が高くなっている。また、育児の相談にのる父方の親がいる方が、育児の相談にのる母方の親のいる割合が高い。

以上の結果は、外出中の世話や育児の相談が必要なものは、父方の親からも母方の親からも支援を受けることが多くなっていることを示す。

図表3−2　育児を支える人がいる割合（世帯構成別）

（%）

	世帯構成	母方の親	父方の親	兄弟姉妹	その他の親戚	近隣の人	友人
a. 外出中に、子どもの世話をしてくれる人	核家族世帯	62.8	47.7	31.4	11.6	16.3	24.4
	三世代世帯	61.1	77.8	31.5	7.4	3.7	24.1
b. 育児の相談にのってくれる人	核家族世帯	92.4	65.7	58.1	29.7	51.7	88.4
	三世代世帯	83.3	77.8	61.1	37.0	35.2	85.2

注）数字は、各セルに該当する人が「いる」と回答した人の割合。無回答は含めて集計。

図表3−3　父方の親による育児支援と母方の親による育児支援の関係（世帯構成別）　(%)

＜核家族世帯＞

a．外出中に、子どもの世話をしてくれる人	a．外出中に、子どもの世話をしてくれる人 母方の親 いる	a．外出中に、子どもの世話をしてくれる人 母方の親 いない	b．育児の相談にのってくれる人	b．育児の相談にのってくれる人 母方の親 いる	b．育児の相談にのってくれる人 母方の親 いない
父方の親　いる	73.2	26.8	父方の親　いる	96.5	3.5
父方の親　いない	51.2	48.8	父方の親　いない	87.5	12.5

＜三世代世帯＞

a．外出中に、子どもの世話をしてくれる人	a．外出中に、子どもの世話をしてくれる人 母方の親 いる	a．外出中に、子どもの世話をしてくれる人 母方の親 いない	b．育児の相談にのってくれる人	b．育児の相談にのってくれる人 母方の親 いる	b．育児の相談にのってくれる人 母方の親 いない
父方の親　いる	61.9	33.3	父方の親　いる	88.1	9.5
父方の親　いない	58.3	41.7	父方の親　いない	63.6	36.4

注）数字は、各セルに該当する人が「いる」と回答した人の割合。無回答は含めて集計。

(3) 子どもの年齢別にみた育児ネットワーク

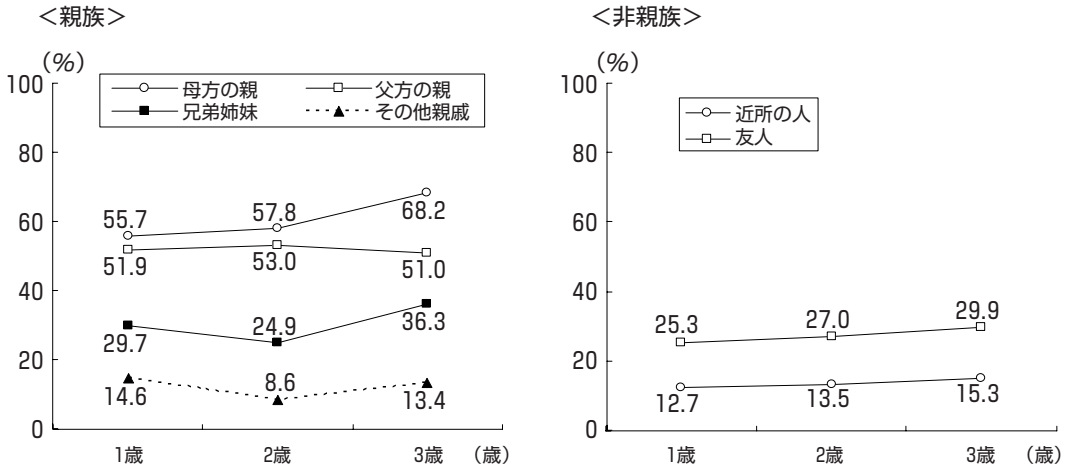
子どもの年齢別にみた外出中に子どもの世話をしてくれる人および育児の相談にのる人がいる割合が図表３－４である。

外出中に子どもの世話をしてくれる人についてみると、「父方の親」「その他の親戚」は子どもの年齢によってあげられた割合は変わらないが、「母方の親」「近所の人」「友人」は年齢があがるほどあげられた割合が高くなっている。「兄弟姉妹」は、１歳や２歳よりも３歳であげられた割合が高い。以上から、外出中に子どもの世話をしてくれる人は、３歳児で最も多いといえる。

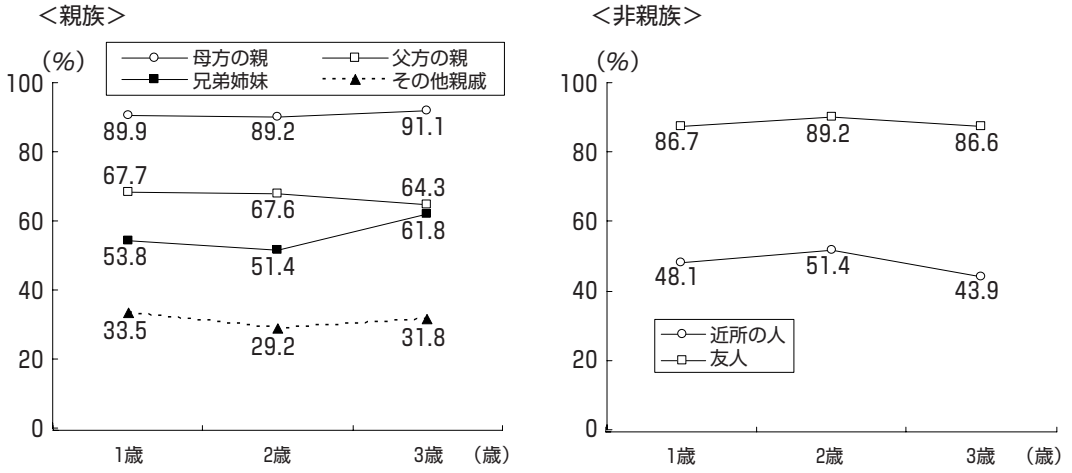
育児の相談にのる人は、子どもの年齢による違いはほとんどみられない。しかし、「兄弟姉妹」は、１歳や２歳よりも３歳であげられた割合が高い。

図表3−4　子どもの年齢別にみた育児を支えるネットワーク

a．外出中に、子どもの世話をしてくれる人



b．育児の相談にのってくれる人

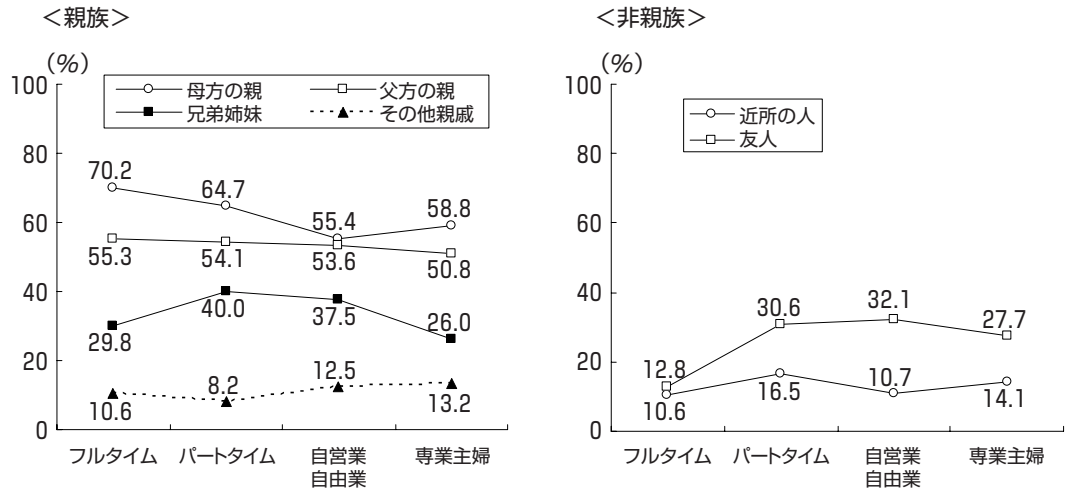


(4) 母親の就労形態別にみた育児ネットワーク

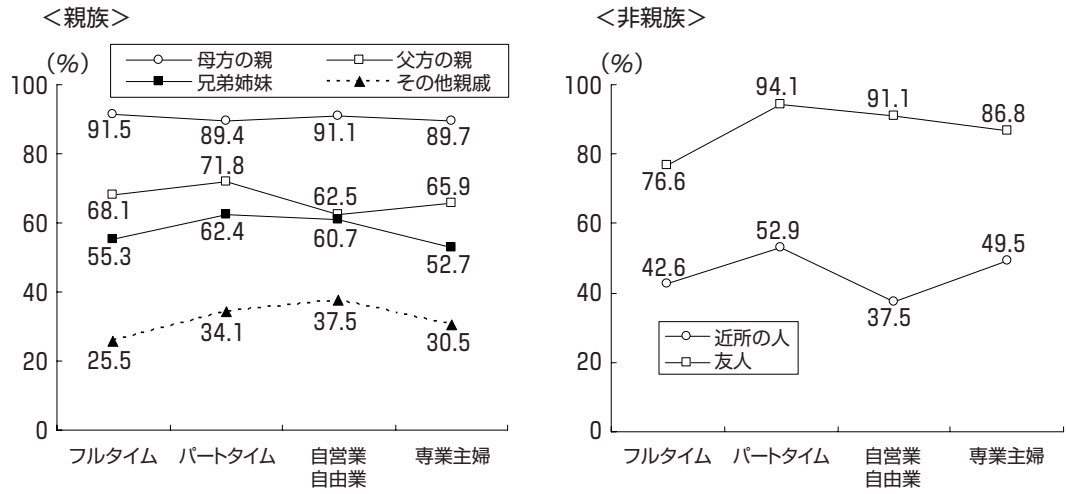
次に、母親の就労形態別にみた育児ネットワークが図表３－５である。外出中に子どもの世話をしてくれる人についてみると、「母方の親」があげられた割合は、フルタイムで70.2%、パートタイムで64.7%、自営業・自由業で55.4%、専業主婦で58.8%であり、フルタイムまたはパートタイムで働いているもので高い。「父方の親」「その他の親戚」「近所の人」があげれた割合については、就労形態による違いはほとんどみられない。「兄弟姉妹」があげられた割合は、パートタイムや自営業・自由業で高い。「友人」があげれた割合は、フルタイムが低く、それ以外で高い。以上の特徴を就労形態別にまとめると、フルタイムは「母方の親」と「父方の親」からの支援が中心であり、パートタイムや自営業・自由業はそれに加えて「兄弟姉妹」や「友人」からなど支援を受ける先が多い。専業主婦は、これら就労者よりも、外出中に子どもの世話をしてくれる親族がいる割合が低い傾向がある。

図表3−5　母親の就労形態別にみた育児を支えるネットワーク

a．外出中に、子どもの世話をしてくれる人



b．育児の相談にのってくれる人



育児の相談にのる人についてみると、就労形態によって「母方の親」があげられた割合にはほとんど差はみれれない。「父方の親」は、フルタイムやパートタイムであげられた割合が高い。非親族についてみると、フルタイムは、それ以外のものよりも、「友人」をあげた割合が低い。「近所の人」をあげた割合は、パートタイムと専業主婦で高い。以上から、フルタイムは他と比較した場合には、相談相手は親中心である様子がうかがえる。

(5) 居住地域別にみた育児ネットワーク

居住地域別にみた育児ネットワークが図表３－６である。外出中に子どもの世話をしてくれる人についてみると、「母方の親」は名古屋市以外の市が他よりも多く、「父方の親」は名古屋市、それ以外の市、町の順に多くなっているが、その差は７～８ポイント程度であり、いずれの地域でも、親に中心的に頼る傾向は変わらない。「兄弟姉妹」「その他の親戚」については、居住地域による差はほとんどみられない。非親族についてみると、名古屋市、それ以外の市、町の順に、

「近所の人」「友人」をあげた割合が低くなっている。

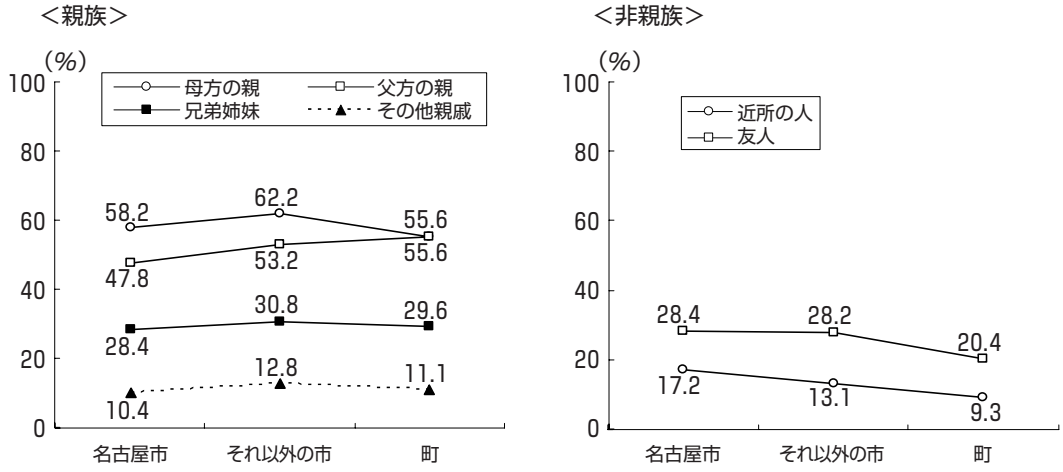
次に、育児の相談にのる人についてみると、「母方の親」は居住地域による違いはみられないが、「父方の親」「その他の親戚」「近所の人」「友人」は、名古屋市、それ以外の市、町の順にあげられた割合が低くなっている。

以上から、地域別にみた特徴として、名古屋市に居住するものは、外出中に子どもの世話をしてくれる「父方の親」が他よりも若干少ないものの、総じて育児を支えるネットワークが多いといえる。一方、町に居住するものは、その逆で、外出中に子どもの世話をしてくれる「父方の親」が他よりも若干多いものの、総じて育児を支えるネットワークが少ない。

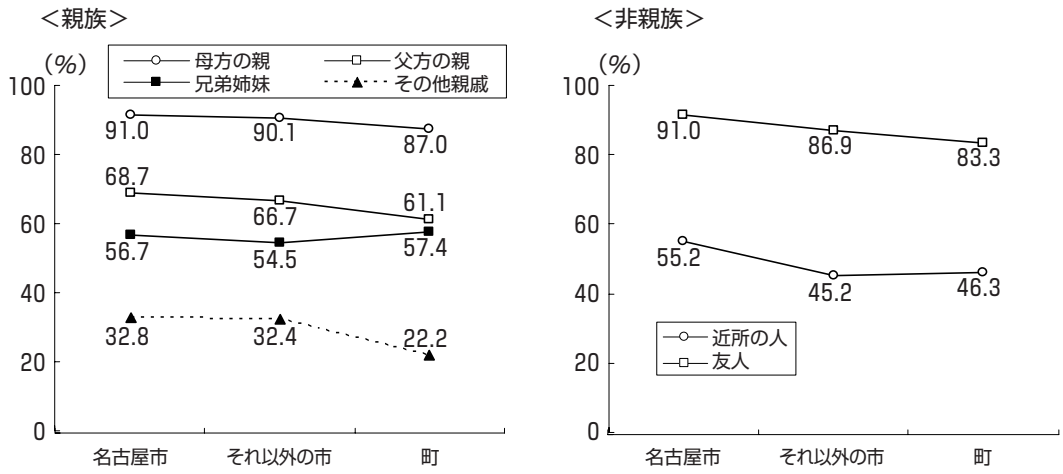
なお、市よりも町に居住するものの方が近所の人や地域の人の支援者が少ない理由として、本調査において町に住むものには生まれ育った地域が別であるものが多く含まれているために、近所の人や地域の人との交流が少ないという可能性も考えられたが、生まれ育った地域と現在の居住地との間にはそのような関係はみられなかった。

図表3−6　居住地域別にみた育児を支えるネットワーク

a．外出中に、子どもの世話をしてくれる人



b．育児の相談にのってくれる人



2．子育ての悩み

(1) 父母の子育ての悩み

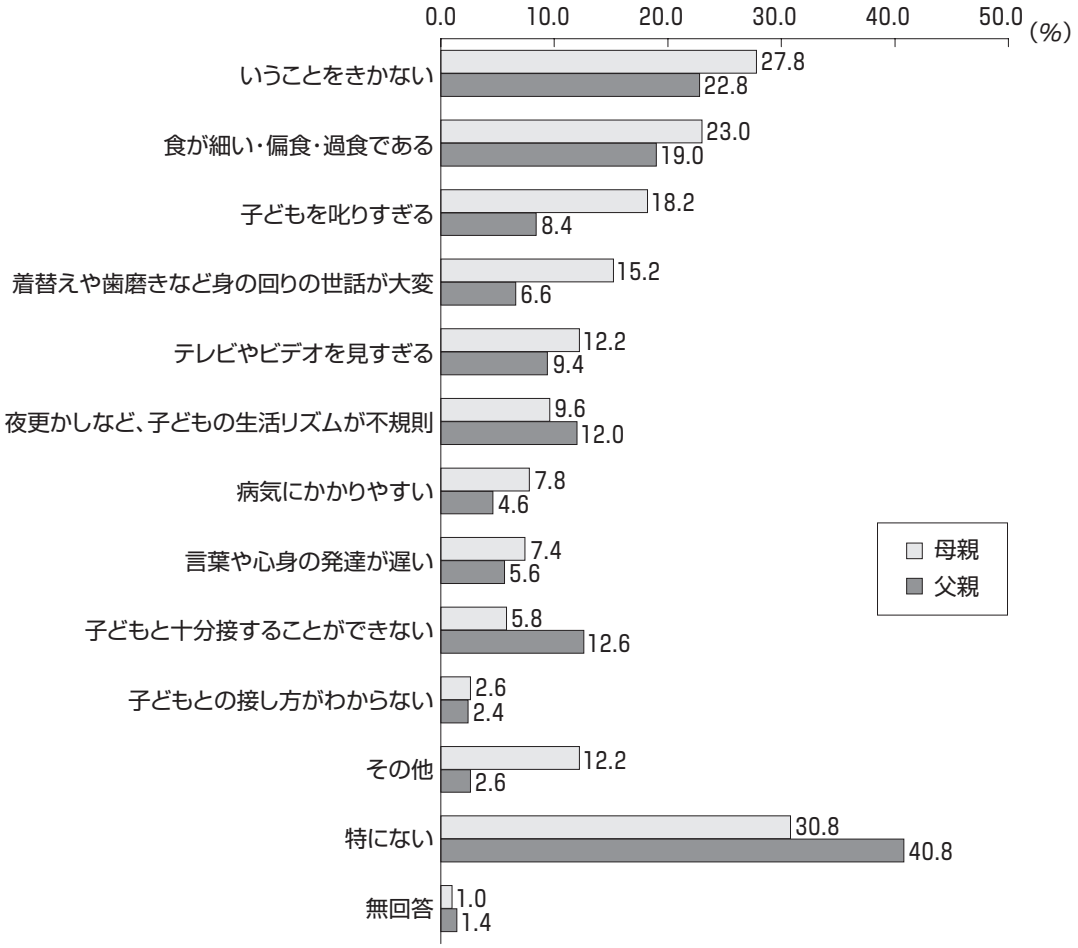
次に、父母の子育ての悩みを尋ねた結果が図表３－７である。母親についてみると、悩みが「特にない」と回答した割合は約３割で、残りの７割は何らかの悩みを抱えている。母親に多い悩みとしては、「いうことをきかない」が27.8%で最も多く、次いで「食が細い・偏食・過食である」(23.0%)、「子どもを叱りすぎる」(18.2%) などとなっている。

父親についてみると、悩みが「特にない」と回答した割合は約４割で、残りの６割は何らかの悩みを抱えている。父親に多い悩みとしては、「いうことをきかない」が22.8%で最も多く、次いで「食が細い・偏食・過食である」(19.0%) などとなっている。

「いうことをきかない」「食が細い・偏食・過食である」という悩みは、父母の悩みの１位、２位である。回答結果をみると、子育てで悩んでいるのは母親のみというわけではなく、父親も同様の悩みを、同程度抱えている。

父親よりも母親の方が多い悩みは、「子どもを叱りすぎる」「着替えや歯磨きなど身の回りの世話が大変」などである。これらの悩みが母親で多い背景には、母親が子どもの世話を多くしていることがあるとみられる。逆に、父親は長時間労働のため、母親よりも「子どもと十分接することができない」と回答した割合が高い。

図表3−7　父母の子育ての悩み



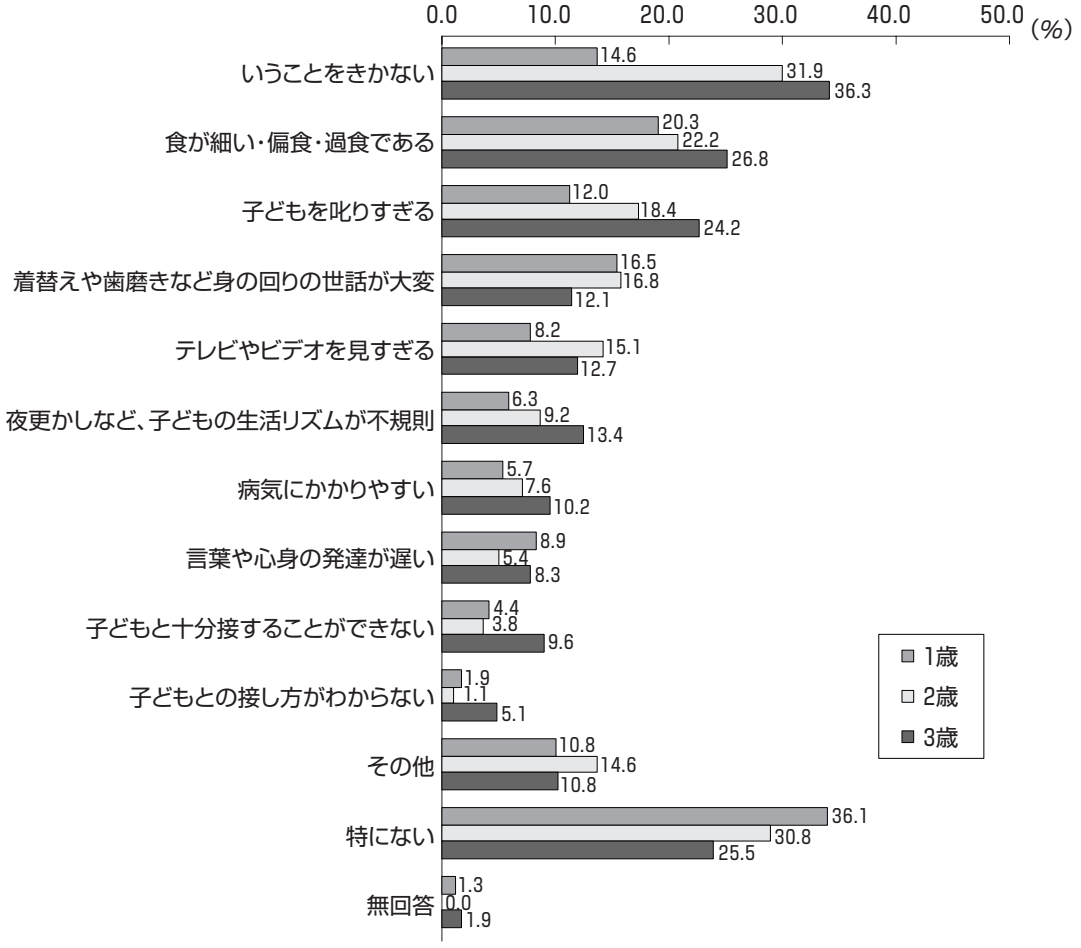
(2) 子どもの年齢別にみた悩み

子どもの年齢別に母親の悩みをみた結果が図表３－８である。年齢があがるほど、「特にない」という回答は減少している。すなわち、１歳よりも２歳、２歳よりも３歳を育てている方が、母親が何らかの悩みをもつことが多い。

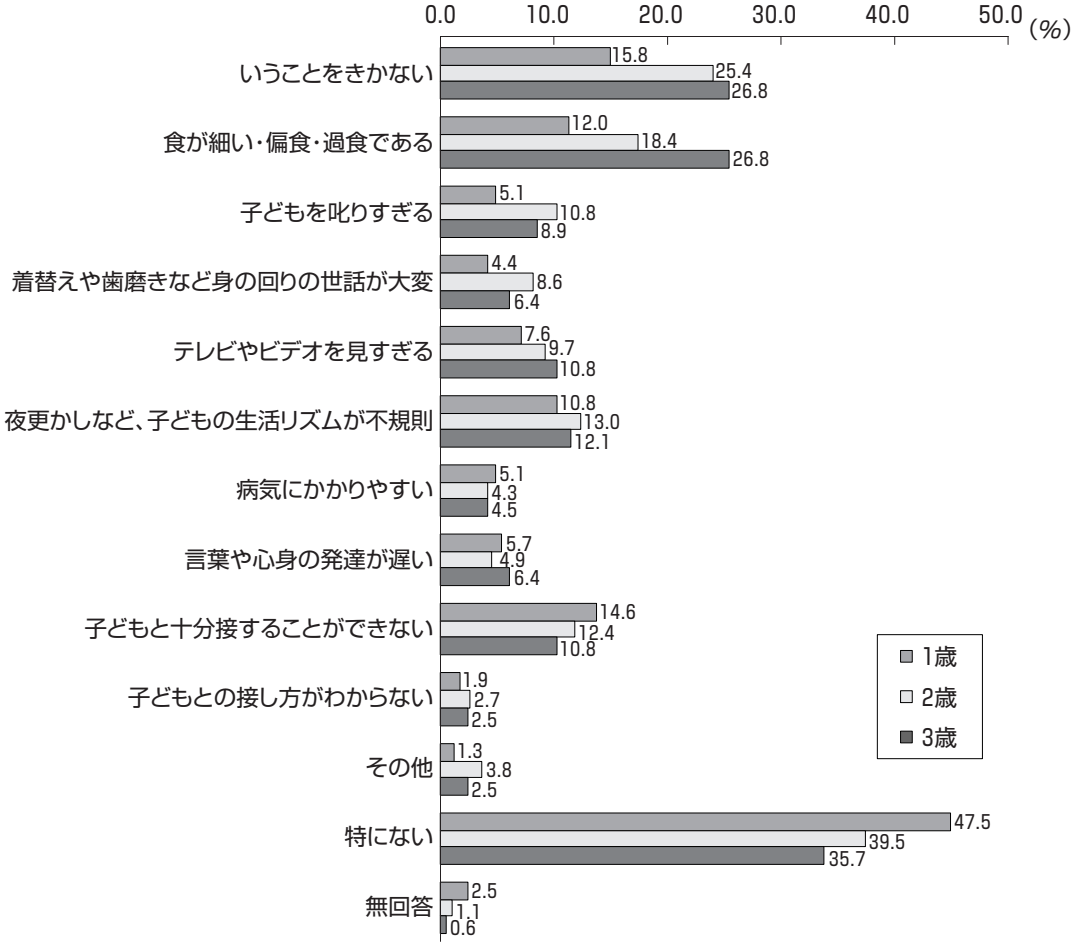
子どもの年齢があがるほど増える悩みとしては、「いうことをきかない」「食が細い・偏食・過食である」「子どもをしかりすぎる」「夜更かしなど、子どもの生活リズムが不規則」「病気にかかりやすい」があげられる。加齢にともなう悩みの変化をみると、「いうことをきかない」は１歳のうちは14.6％であるが、２歳になると31.9％へと17.3ポイント増加している。同項目の２歳から３歳にかけての増加は4.4ポイントであることをふまえると、子どもが親のいうことをきかなくなることの悩みは１歳から２歳にかけて急増するものであることがわかる。

同様に子どもの年齢別に父親の悩みをみた結果が図表３－９である。母親と同様、父親についても、子どもの加齢とともに悩みが「特にない」ものは減少する。子どもの年齢があがるほど「いうことをきかない」「食が細い・偏食・過食である」という悩みは増加している。母親と同様に子どもが１歳から２歳にかけて「いうことをきかない」という悩みは大幅に増加している。

図表3−8　母親の子育ての悩み（子どもの年齢別）



図表3−9　父親の子育ての悩み（子どもの年齢別）

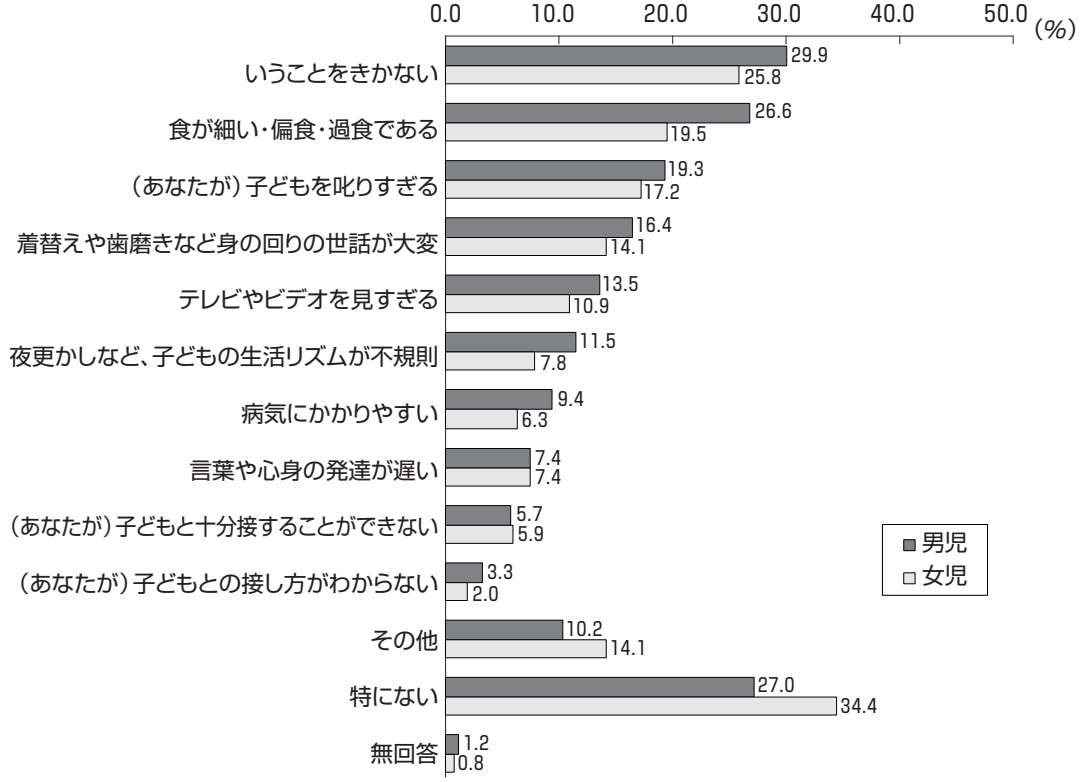


(3) 子どもの性別にみた悩み

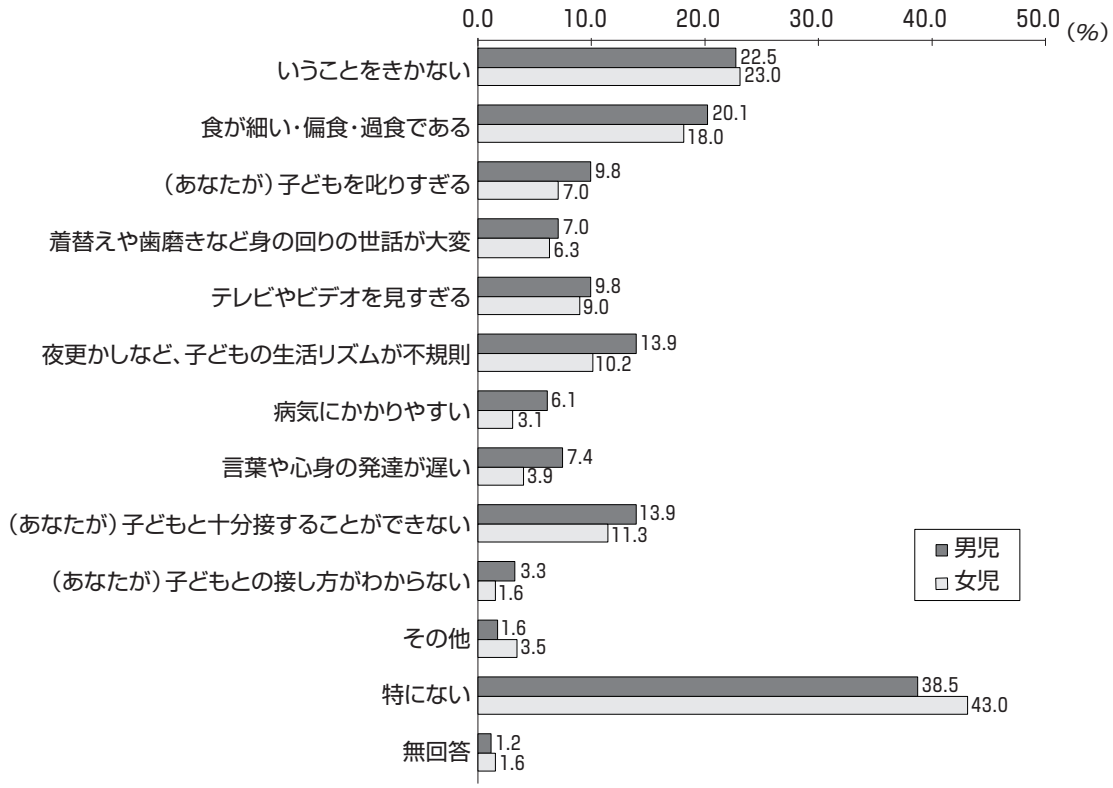
子どもの性別に母親の悩みをみた結果が図表３－10である。女児よりも男児の親の方が、悩みが「特にない」と回答した割合が低い。「いうことをきかない」など悩みの具体的な項目についてみると、多くの項目で女児よりも男児の親の方が、悩みをもつものの割合が高くなっている。

子どもの性別に父親の悩みをみた結果が図表３－11である。父親についても、女児よりも男児の方が悩みが多いという傾向はみられる。しかし、母親と比較すると、父親の子どもの性別による悩みの程度の差は小さい。

図表3−10　母親の子育ての悩み（子どもの性別）



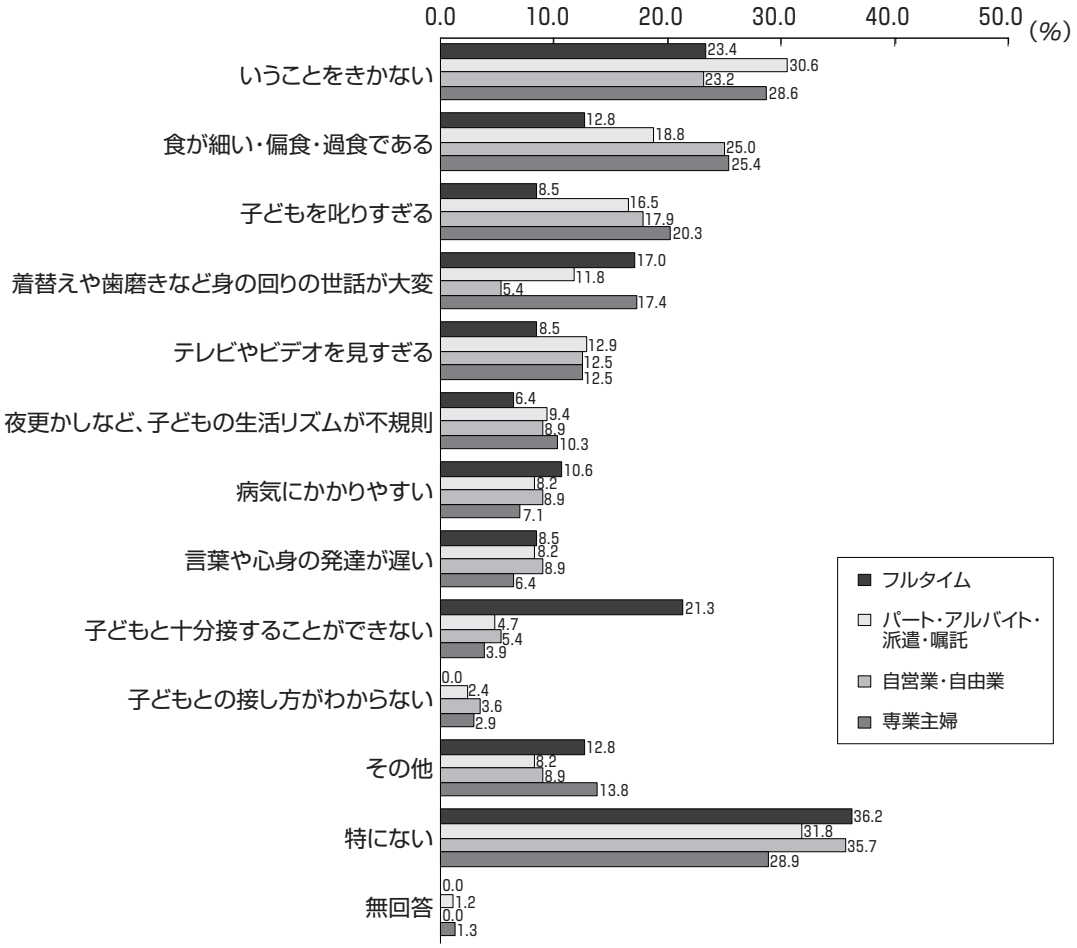
図表3−11　父親の子育ての悩み（子どもの性別）



(4) 母親の就労形態別にみた悩み

母親の就労形態別にみた母親の悩みが図表３－12である。他に比べた場合、フルタイムは「子どもと十分接することができない」「着替えや歯磨きなど身の回りの世話が大変」という悩みが多い。同様に、パートタイムは、「いうことをきかない」「食が細い・偏食・過食である」という悩みが比較的多い。自営業・自由業は、「食が細い・偏食・過食である」という悩みが比較的多い。専業主婦は、「いうことをきかない」「食が細い・偏食・過食である」という悩みが比較的多い。

図表3−12　母親の子育ての悩み（就労形態別）



3．育児を支えるネットワークと子育ての悩みの関係

(1) 育児を支えるネットワークの数別にみた悩みの程度

ここまで育児を支えるネットワークと子育ての悩みのそれぞれの現状をみてきたが、続いて、育児を支えるネットワークと子育ての悩みの関係を分析する。母親が外出する際に子どもの世話をする人や育児で困ったときに相談にのる人がいれば、そうしたネットワークからの支援によって親は問題を容易に解決することができるため、彼らの子育ての悩みも少なくなる可能がある。すなわち、育児を支えるネットワークを豊富にもつ親ほど、子育ての悩みは少なくなるとみられる。本節では、その関係を分析する。

はじめに、分析に用いる尺度を作成する。育児を支えるネットワークは、母親が、外出中に子どもの世話をする人と育児の相談にのる人のそれぞれについて、「母方の親」「父方の親」「兄弟姉妹」「その他の親戚」「近所の人」「友人」の中で、それらに該当する人の有無を回答している。この回答結果をもとに、①子どもの世話をしてくれる親族ネットワークの数、②子どもの世話をしてくれる非親族ネットワークの数、③育児の相談にのる親族ネットワークの数、④育児の相談にのる非親族ネットワークの数の４つの尺度を作成した。①子どもの世話をしてくれる親族ネットワークの数は、外出中に子どもの世話をする人としてあげられた「母方の親」「父方の親」「兄弟姉妹」「その他の親戚」の種類の数である。②子どもの世話をしてくれる非親族ネットワークの数は、同「近所の人」「友人」の数である。同様にして、育児の相談にのる人の数をもとに、③と④の尺度も作成した。いずれの尺度も、数が多いほど、その項目について育児を支えるネットワークが充実していることをあらわすものである。

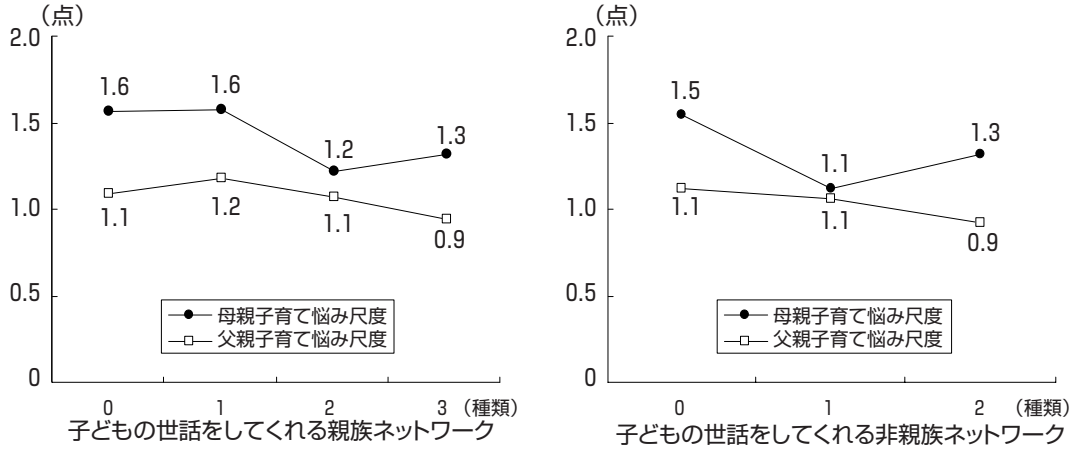
父母それぞれの子育ての悩みは、各個人が図表３－７の悩みの質問に対して悩みがあるものとしてあげた項目の数である。ただし、「特にない」「無回答」は悩みの数に含めていない。この尺度は、数が多いほど、子育てで悩むことが多いことをあらわす。

以上の尺度を用いて、育児を支えるネットワークと父母の子育ての悩みの関係を分析した結果が図表３－13、３－14である。まず、図表３－13で子どもの世話ネットワークと父母の子育ての悩みの関係をみると、父母とも子どもの世話をしてくれる親族ネットワークの数が多いと子育ての悩みは少ない傾向がみられる。また、父母とも子どもの世話をしてくれる非親族ネットワークの数が「０」のものよりも、「１」または「２」のものの方が、子育ての悩みは少ない。

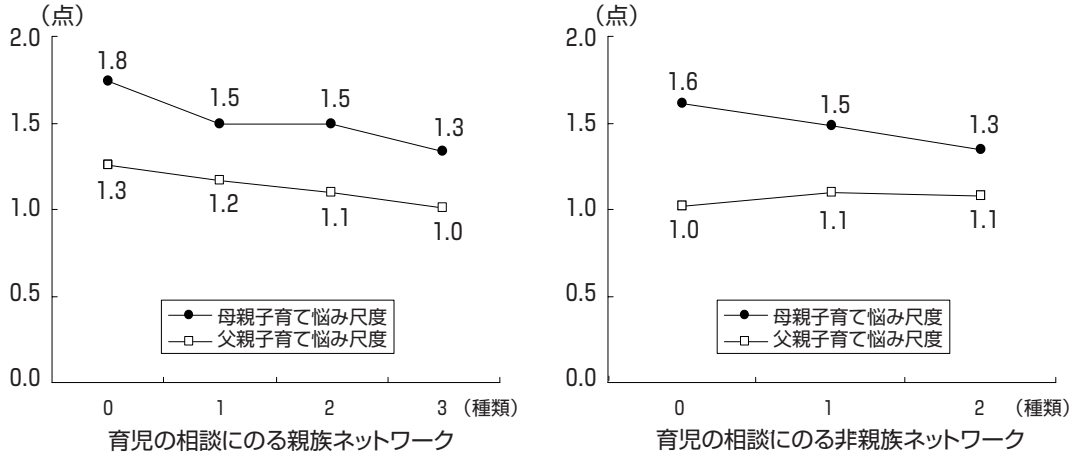
次に、図表３－14で育児の相談にのる親族ネットワークの数と父母の子育ての悩みの関係をみると、父母とも相談にのる親族ネットワークの数が多いと子育ての悩みは少なくなっている。育児の相談にのる非親族ネットワークについてみると、相談にのる非親族ネットワークの数が多いと、母親の子育ての悩みは少なくなっている。

以上の結果から、子どもの世話と育児の相談のいずれについても、親族や非親族のネットワークの数が多いほど、総じて父母の悩みは少なくなっている。特に育児の相談にのる親族および非親族のネットワークが多いことは、母親の悩みを軽減する。

図表3−13　子どもの世話ネットワークと父母の子育ての悩みの関係



図表3−14　育児の相談ネットワークと父母の子育ての悩みの関係



(2) 世帯構成別の分析

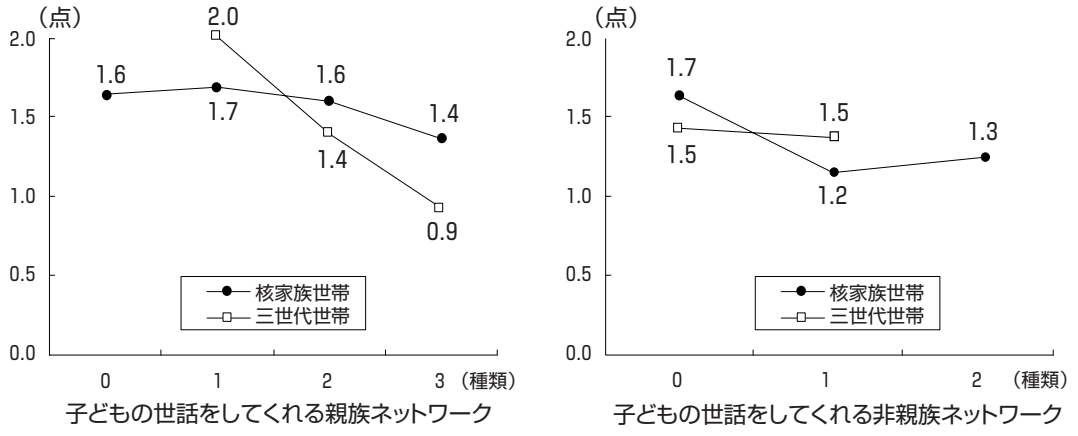
前項では、育児を支えるネットワークの数と悩みの程度の関係を分析したが、育児を支えるネットワークは世帯構成によって異なるほか、世帯構成によって育児を支えるネットワークと悩みの程度の関係の仕方も異なる可能性がある。この点を分析するために、世帯構成別に育児を支えるネットワークの数と悩みの程度の関係を分析する。

母親について、世帯構成別に子どもの世話ネットワークと母親の子育ての悩みの関係をみたものが図表３－15である。核家族世帯についてみると、子どもの世話をする親族ネットワークが０～２種類の間は子育ての悩みの程度は変わらないが、３種類であると悩みが少なくなる傾向がみられる。三世代世帯は、子どもの世話ネットワークが０種類というものは少ないため、１～３種類のものについて図示した。その結果、親族ネットワークが多いほど、子育ての悩みが少なくなることが見出された。また、核家族世帯では、非親族ネットワークがないものよりもあるものの方が、子育ての悩みが少なくなっていた。

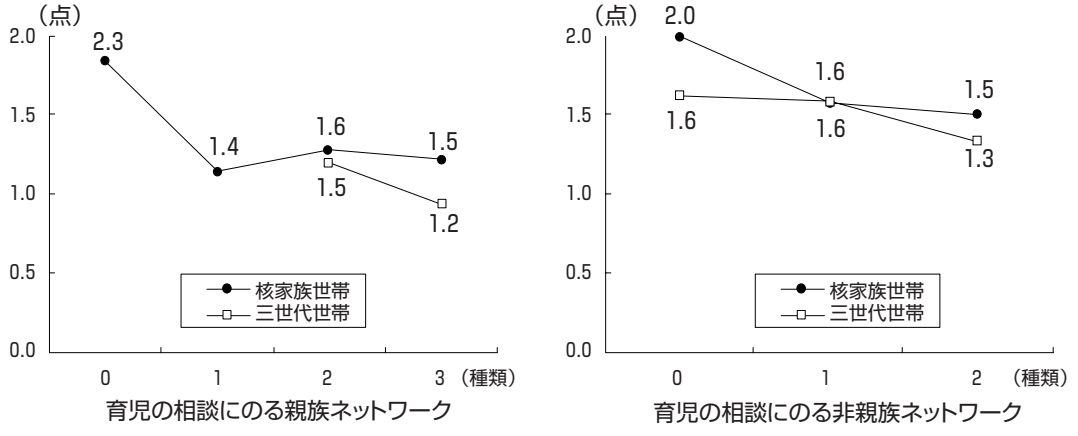
母親について、世帯構成別に育児の相談ネットワークと母親の子育ての悩みの関係をみたものが図表３－16である。核家族世帯についてみると、育児の相談にのる親族ネットワークがないと子育ての悩みは多い。三世代世帯では、育児の相談にのる親族ネットワークが０～１種類のものは少ないため、２～３種類のものについて図示した。その結果、親族ネットワークが多いと、子育ての悩みが少なくなることが見出された。また、核家族世帯と三世代世帯のいずれにおいても、非親族ネットワークが多いほど、子育ての悩みは少なくなっていた。

次に、父親について、世帯構成別に子どもの世話ネットワークと子育ての悩みの関係をみたものが図表３－17である。父親の場合、核家族世帯と三世代世帯のいずれにおいても、子どもの世話をする親族ネットワークが多くても、子育ての悩みが少なくなることはない。しかし、非親族ネットワークについてみると、核家族世帯では、ネットワークが多いほど、子育ての悩みは少なくなっていた。ただし、三世代世帯では、非親族ネットワークが多いほど子育ての悩みは多くなっていた。

図表3－15　子どもの世話ネットワークと母親の子育ての悩みの関係（世帯構成別）



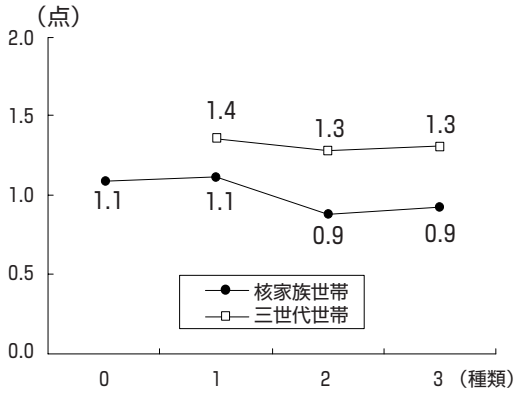
図表3－16　育児の相談ネットワークと母親の子育ての悩みの関係（世帯構成別）



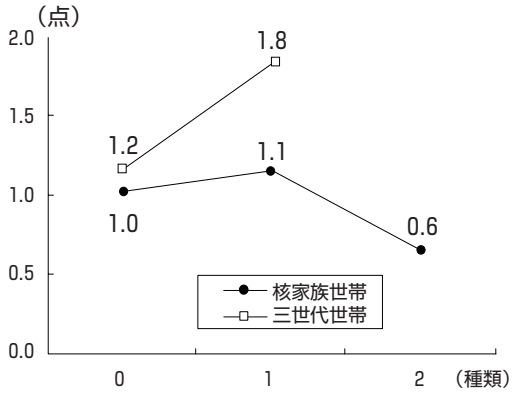
父親について、世帯構成別に育児の相談ネットワークと子育ての悩みの関係を分析した結果が図表３－18である。核家族世帯では、育児の相談にのる親族ネットワークが１種類のものよりも、２、３種類のものの方が、子育ての悩みは少なくなっていた。しかし、三世代世帯では、親族ネットワークが多い方が、むしろ子育ての悩みは多くなっていた。非親族ネットワークについてみると、核家族世帯では、育児の相談にのるネットワークがないものよりもあるものの方が、子育ての悩みは少なくなっていた。しかし、三世代世帯では、育児の相談にのる非親族ネットワークと子育ての悩みの関係は不明瞭であった。

以上の結果から、母親については、世帯構成の違いにかかわらず、総じて育児を支えるネットワークが多いことが子育ての悩みが少なくなる傾向がみられた。父親については、育児を支えるネットワークと子育ての悩みについては、母親ほど明瞭な関係はみられなかった。

図表3−17　子どもの世話ネットワークと父親の子育ての悩みの関係（世帯構成別）

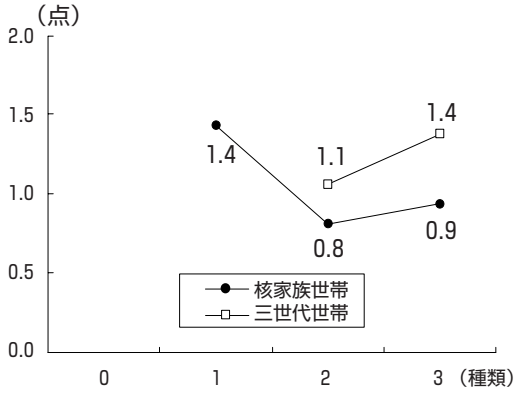


子どもの世話をしてくれる親族ネットワーク

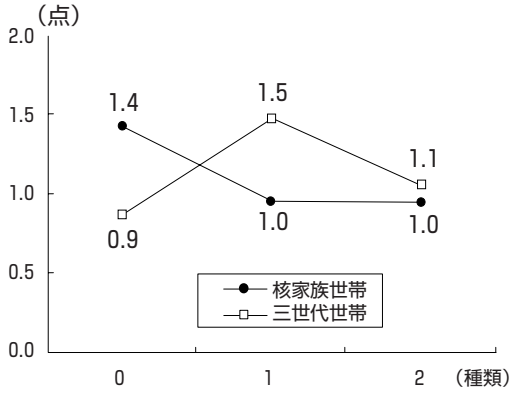


子どもの世話をしてくれる非親族ネットワーク

図表3−18　育児の相談ネットワークと父親の子育ての悩みの関係（世帯構成別）



育児の相談にのる親族ネットワーク



育児の相談にのる非親族ネットワーク

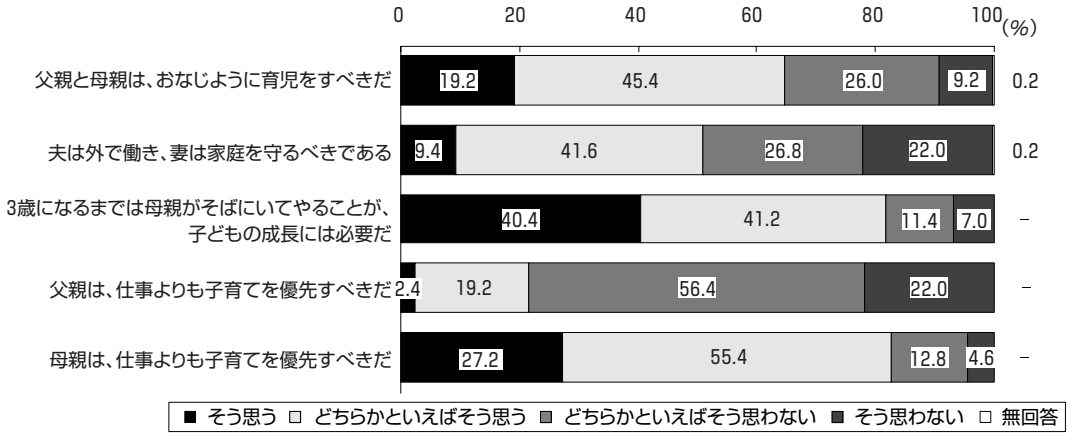
4．家族と子育ての社会意識

(1) 父母の社会意識

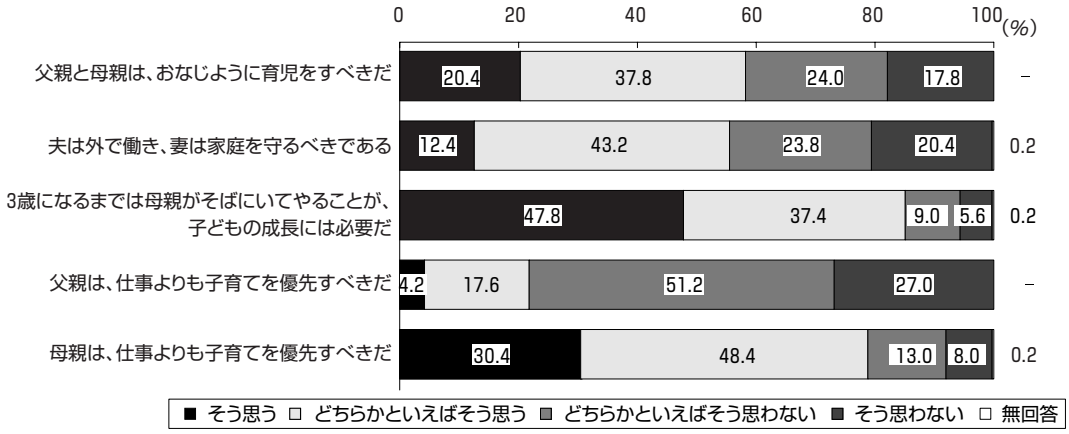
続いて、父母の家族と子育ての社会意識が図表３－19である。はじめに母親の意識をみると、「父親と母親は、おなじように育児をすべきだ」という意見に対して、約６割のものがそう思う（「そう思う」＋「どちらかといえばそう思う」）と回答している。しかし、一方で、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という意見に対して約半数がそう思うと回答しており、「３歳になるまでは母親がそばにいてやることが、子どもの成長には必要だ」という意見に対して約８割のものがそう思うと回答している。父母がともに育児にかかわることを良しとしつつも、そのかかわり方は母親中心であると考えられている。また、仕事と子育ての優先度については、「父親は、仕事よりも子育てを優先すべきだ」という意見に対してそう思うと回答したものは約２割であるのに対して、「母親は、仕事よりも子育てを優先すべきだ」という意見に対してそう思うと回答したものは約８割にのぼる。父親は仕事優先だが子育てにもかかわり、母親は仕事よりも

図表3−19　家族と子育ての社会意識

母親の意識



父親の意識



子育て優先するほうがよいと考えているものが多い。

父親の回答結果は、母親の回答結果と類似している。母親と同様に、「3歳になるまでは母親がそばにいてやることが、子どもの成長には必要だ」「父親は、仕事よりも子育てを優先すべきだ」という意見に対してそう思うと回答したものが8割前後と多い。「父親と母親は、おなじように育児をすべきだ」という意見に対しても、約6割のものがそう思うと答えている。父親についても、母親同様、父母がともに子育てにかかわるものの、父親は仕事優先、母親は子育て優先がよいと考えているものが多い。

(2) 母親の就労形態別にみた社会意識

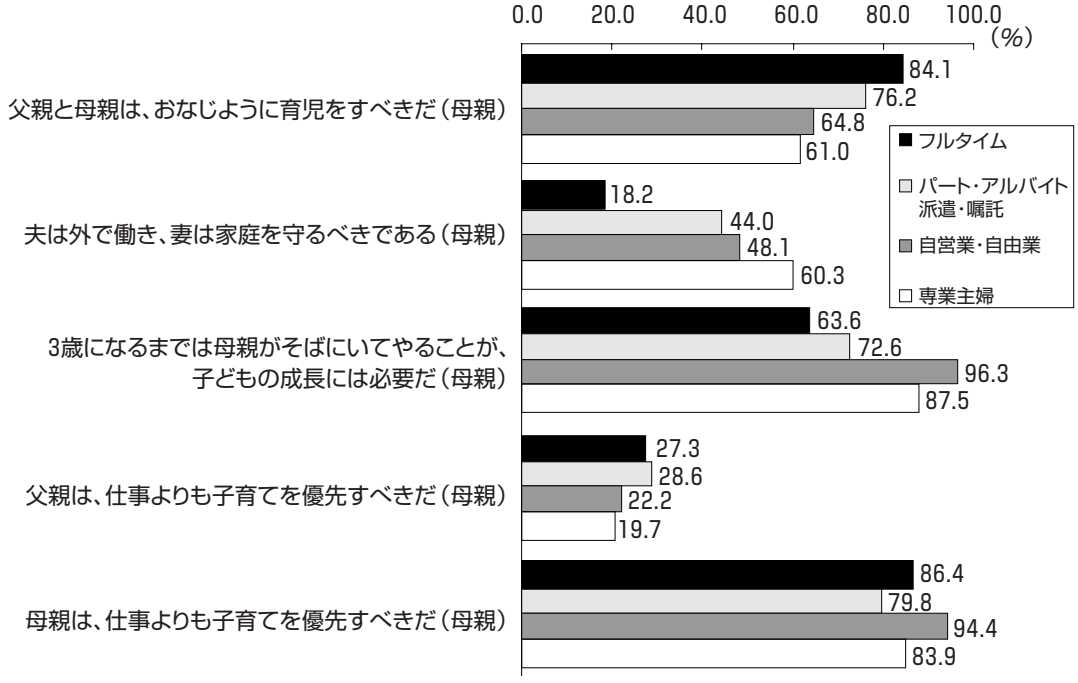
次に、母親の就労形態別に社会意識を集計した結果が図表3－20である。図表から、就労するものの方がそう思うと回答した割合が高いものと、その逆に就労するものの方がそう思うと回答した割合が低いもの、就労形態によって回答傾向に大きな違いのないものがあることがわかる。

就労するものの方がそう思うと回答した割合が高いものとしては、「父親と母親は、おなじように育児をすべきだ」「父親は、仕事よりも子育てを優先すべきだ」があげられる。

就労するものの方がそう思うと回答した割合が低いものとしては、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」「3歳になるまでは母親がそばにいてやることが、子どもの成長には必要だ」があげられる。

就労形態によって回答傾向に大きな違いのないものとしては、「母親は、仕事よりも子育てを優先すべきだ」があげられる。

図表3−20　家族と子育ての社会意識の肯定割合（母親の就労形態別）



以上から、就労する母親、特にフルタイムの母親は、母親のみならず父親も子育てにかかわることを肯定する人が多い。ただし、「母親は、仕事よりも子育てを優先すべきだ」という意見に対しては、フルタイムの母親でも86.4%がそう思うと回答していることから、就労する母親においても、子育ては母親が中心に行うことを肯定する考えのものが多いといえる。

5．まとめ

本章では、育児を支えるネットワーク、育児の悩み、育児の社会意識について分析を行った。以下では、分析で得られた主要な知見を整理して示す。

第一に、育児を支えるネットワークの現状を分析した結果、親族、非親族の幅広い人が育児を支えていることが見出された。母親の外出中に子どもの世話をする人は、「母親の親」が60.4%で最も多く、以下、「父親の親」（52.0%）、「兄弟姉妹」（30.0%）、「友人」（27.4%）である。母親の育児の相談にのる人は、「母親の親」が90.0%で最も多く、以下、「友人」（87.6%）、「父親の親」（66.6%）、「兄弟姉妹」（55.4%）、「近隣の人」（48.0%）である。外出中の世話をする人はどちらかといえば親族中心であり、育児の相談は親族と非親族の両方とも多い。

育児を支える親族ネットワークについてみると、核家族世帯であるか三世代世帯であるかにより違いはあるものの、総じて母親方の親と父親方の親の双方から支援を受けているものが多い。親族全体で育児が支えられている。

母親の就労形態別にみると、フルタイムは親族、中でも「母方の親」と「父方の親」からの支援が中心である。パートタイムや自営業・自由業はそれに加えて「兄弟姉妹」や「友人」からなど支援を受けている。しかし、専業主婦では、外出中に子どもの世話をしてくれる親族がいるものが少ない。居住地域別にみると、名古屋市に住むものは総じて親族、非親族とも育児を支えるネットワークが多く、町に住むものはそれが少ない。

第二に、子育ての悩みを尋ねたところ、父母とも、「いうことをきかない」「食が細い・偏食・過食である」という悩みが多くあげられた。これらに次いで、母親では「子どもを叱りすぎる」「着替えや歯磨きなど身の回りの世話が大変」など、父親では「子どもと十分接することができない」「夜更かしなど、子どもの生活リズムが不規則」という悩みがあげれれた。

父母とも子どもの年齢があがるほど、「いうことをきかない」「食が細い・偏食・過食である」という悩みをあげた割合は高くなっていた。仔細にみると、母親では、子どもが１歳から２歳にかけて「いうことをきかない」という悩みをあげる割合は大幅に高まる。このため、この時期の育児の負担は親に重くのしかかっていることが示唆される。

第三に、育児を支えるネットワークと子育ての悩みの程度の関係を分析した。その結果、父母とも、子どもの世話をしてくれる親族または非親族のネットワークの種類が多いと子育ての悩みは少ない傾向がみられた。また、育児の相談にのる親族ネットワークについても、その種類が多いほど、父母の子育ての悩みの程度は低くなっていた（ただし、育児の相談にのる非親族ネットワークと父親の子育ての悩みの関係についてはこうした傾向はみられなかった）。以上のように、育児を支えるネットワークの種類が多いことが悩みを軽減する効果は、父親よりも母親において強くみられた。以上から、育児を支えるネットワークが多いことは、そうしたネットワークのメンバーが子どもの世話をしたり、育児の相談にのることによって、父母の子育ての悩みを軽減す

るものであることが見出された。

第四に、父母の家族と子育ての社会意識を分析した。その結果、父母の意識は総じて類似しており、ともに過半数のものが「父親と母親は、おなじように育児をすべきだ」という意見に対して賛成していた。ただし、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という意見に対しては父母の約半数が、「3歳になるまでは母親がそばにいてやることが、子どもの成長には必要だ」という意見に対しては父母の8割以上が肯定している。仕事と子育てのどちらを優先すべきかを尋ねると、父母とも「父親は、仕事よりも子育てを優先すべきだ」という意見に対してそう思うと回答したものは2割前後であるのに対して、「母親は、仕事よりも子育てを優先すべきだ」という意見に対してそう思うと回答したものは8割前後にのぼる。以上から、子育ては父母両方で行うものであると考えるものは多いが、父親は仕事優先で、母親は子育て優先するという分担をよしとするものが多いことが見出された。

（松田茂樹）

第４章　子育て支援の利用と育児意識、夫婦関係

本章では、乳幼児をもつ父親と母親のマッチングデータを使用し、地域の子育て支援サービスの利用実態と母親の利用意識を分析する。次に保育園入所家庭と在宅家庭における子育て支援サービスの利用状況の比較と子育てにおける悩みや子どもの生活の比較を行う。さらに、夫婦間のコミュニケーション、配偶者の子育てへの関わり方、期待などを分析する。最後に、これらの分析結果をもとに、子育て支援サービスの効果と課題を明らかにし、家族支援としての地域の子育て支援の方向性を考察する。

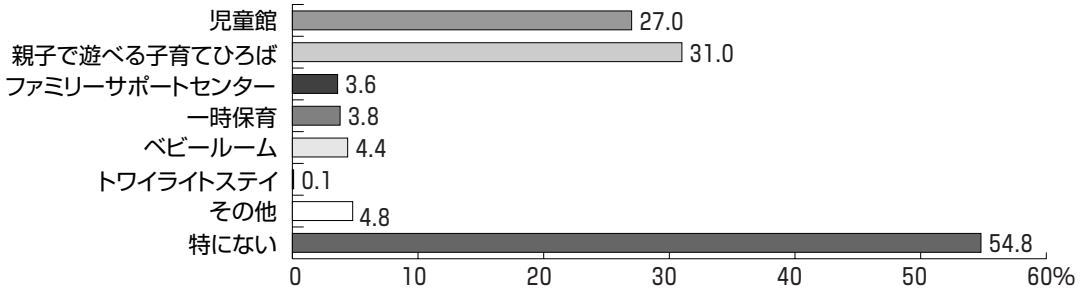
１．地域の子育て支援サービスの利用実態と母親の利用意識

(1) 利用している子育て支援サービス

地域で利用している子育て支援サービスで最も多かったのは、「親子で遊べる子育て広場」が31%、「児童館」が27%であった。その両者が利用の大半を占めている。それ以外では「ファミリーサポートセンター[1]」3.6%、「一時保育」3.8%、「その他」4.8%などがあった。「ベビールーム」や「トワイライトステイ」[2]を利用している人は若干名であった。

地域の子育て支援サービスをどれも利用していない人が、回答者の半数以上（54.8%）であった。（図表４－１）

図表4−1　地域で利用している子育て支援のサービス



1　区市町村で行っている子育て支援事業のひとつで、「育児の援助を行う人（提供会員）」と「育児の援助を受ける人（依頼会員）」が会員になり、地域の中で助け合いながら子育てをする活動。低額で利用できる一時保育で、主に次のような利用方法がある。(1) 保育所の開始前や終了後に子どもを預ける。(2) 保育所まで子どもの送迎をお願いする。(3) 冠婚葬祭や行事の際、子どもを預ける。(4) 買い物等の外出の際、子どもを預けるなど。

2　区市町村で行っている子育て支援事業のひとつで、２歳から小学校６年生までの子どもをもつ保護者が、次の（1）から（5）に該当する場合に低額で利用できる。(1) 就業のため、帰宅が夜間となる場合。(2) 冠婚葬祭、公的行事等に参加する場合。(3) 病気、出産、けが等のために通院する場合。(4) 親族の疾病等によりその看護又は介護に当たる場合。(5) 上記のほか、区が必要と認めた場合。利用時間は自治体によって異なるが、おおよそ午後５時から午後10時くらいまで。

(2) 最もよく利用するサービス

地域の子育て支援サービスを利用していると回答した母親に、最もよく利用しているサービスをたずねたところ、最も多かったものが「児童館」46.5%、次に「親子で遊べるひろば」34.5%、「その他」9.7%、「一時保育」4.4%などであった。(図表４－２)

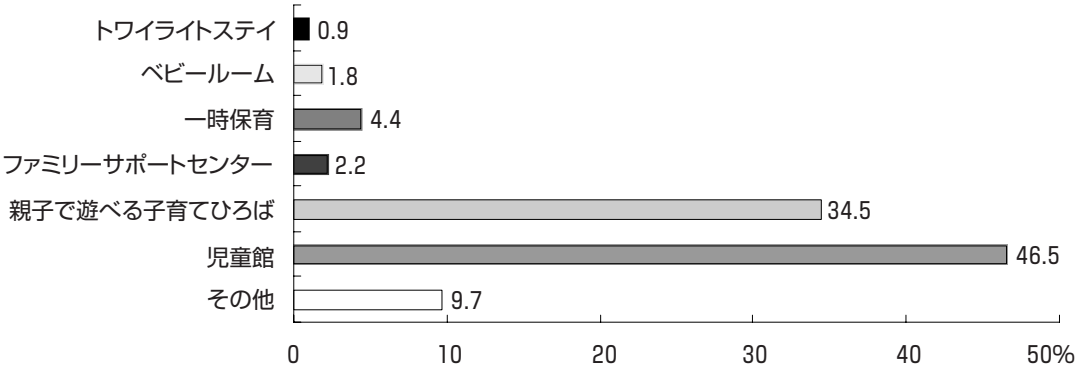
(3) 利用日数

もっともよく利用すると回答したサービスの１週間の利用日数では、「週１日」が最も多く65%、「週２日～３日」が18.6%であり、連日利用するというようなパターンはほとんど見られなかった。(図表４－３)

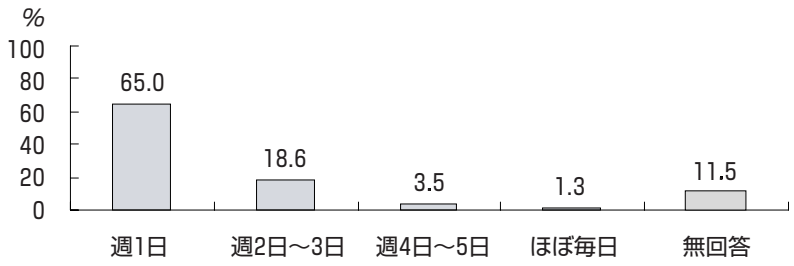
(4) １回あたりの利用時間

１回あたりの利用時間では、「１～２時間」の利用が約８割を占めている。次に「３～４時間」12.8%、５～６時間4.4%であった。(図表４－４)

図表4−2　最もよく利用しているサービス(n=226)



図表4−3　1週間の利用日数(n=226)



(5) 利用料金

利用料金では、無料のものが78.3%、有料は20.4%であった。(図表４－５)

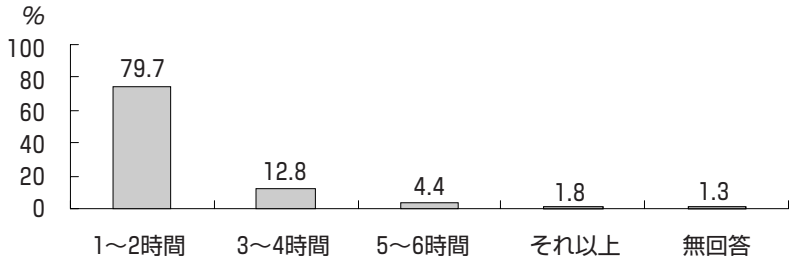
(6) サービスの利用内容

サービスの利用内容では、「親子で遊ぶひろば」が78.3%と最も多く、次に「サークル活動」16.8%、「各種イベントへ」の参加が16.4%、「一時保育」9.5%、「育児・家庭相談」8.9%であった。(図表４－６)

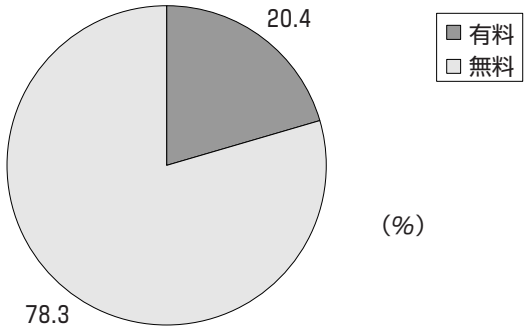
(7) 利用している子育て支援サービスの職員（スタッフ）との関係

利用している子育て支援サービスの職員との関係では、「相談にのってもらいたいと思うときに、相談できる雰囲気がある」という質問に「当てはまる」「やや当てはまる」と、肯定的に回答した人は52.2%、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」と、否定的回答をした人が47.8%であった。「家庭の状況もよく理解してくれている職員がいる」という質問では、肯定的回答は27%、否定的回答が73%であった。「職員と子どものことについて話す機会がよくある」という設問では、肯定的回答が47.3%、否定的回答が52.7%であった。(図表４－７)

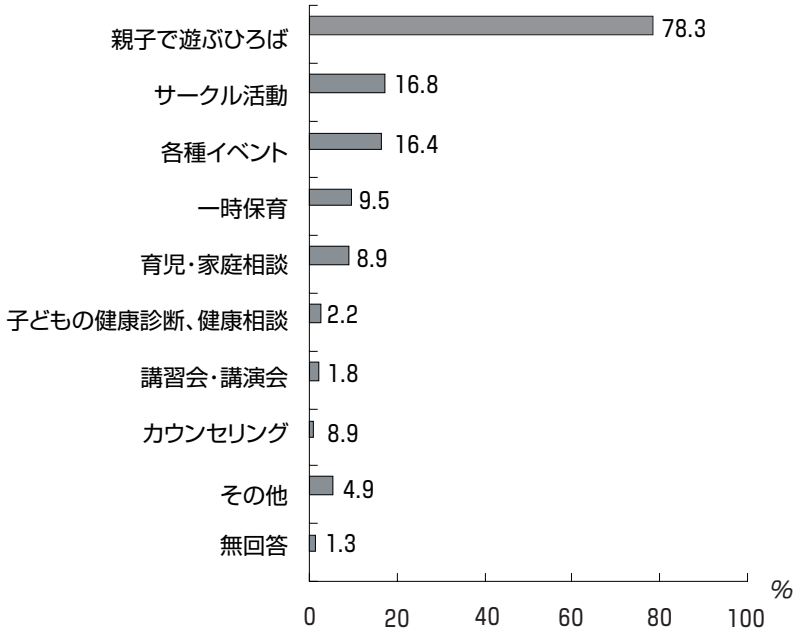
図表4−4　1回あたりの利用時間（n=226）



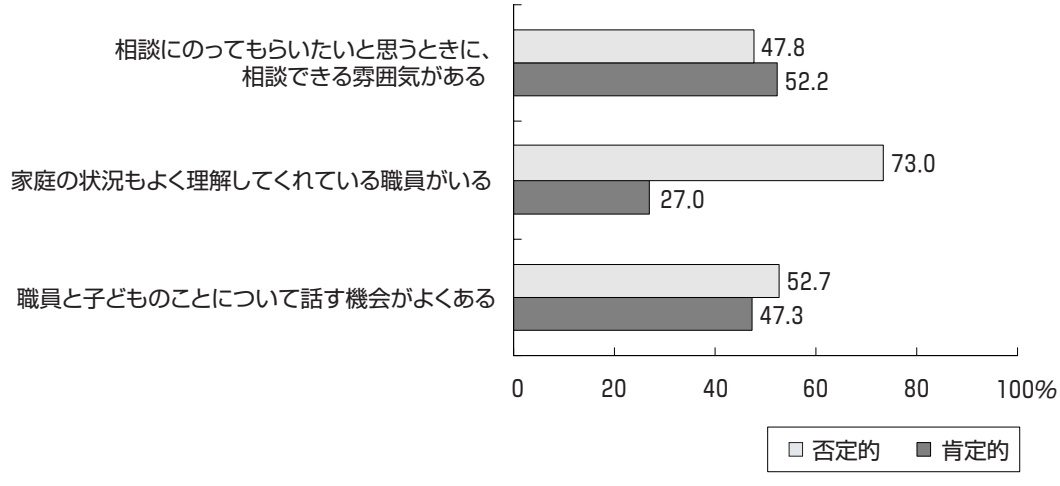
図表4−5　利用料金（n=226）



図表4−6　利用しているサービス内容 （n=226 複数回答）



図表4−7　利用している施設・機関の職員（スタッフ）との関係（n=226）



(8) 利用している感想

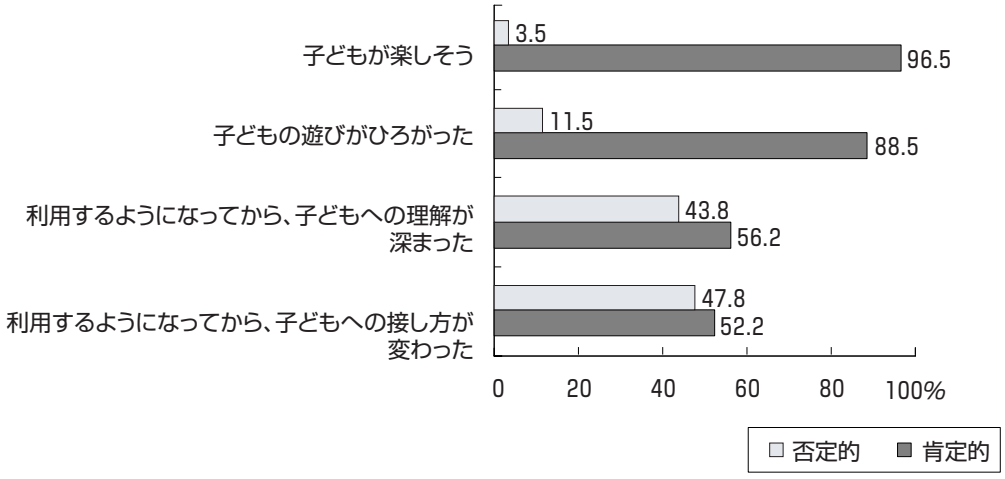
子育て支援サービスを利用している感想をたずたところ、「子どもが楽しそう」(96.5%)、「子どもの遊びがひろがった」(88.5%) の設問には人が、「当てはまる」「まあ当てはまる」」と肯定的に回答している。

しかし、「子どもへの理解が深まった」(56.2%)、「子どもへの接し方が変わった」(52.2%) の設問では、肯定的回答は5割強にとどまっている。このことから、子育て支援サービスの利用によって、子どもにとってのメリットを強く感じている反面 (子育ち支援)、自分の子育ての変化やメリット (子育て支援) を感じている人は半数にとどまっていることがわかる。(図表4－8)

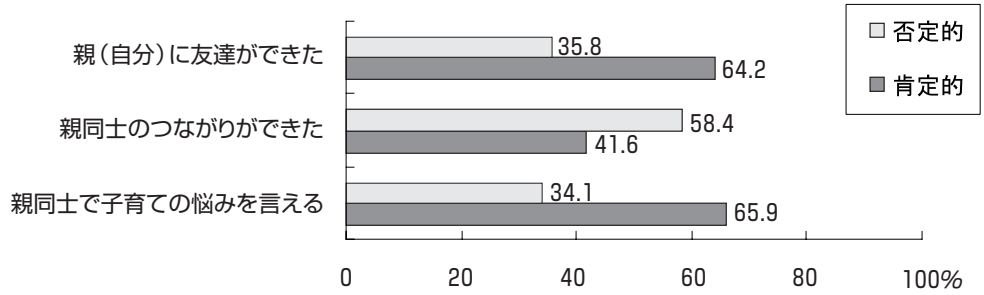
(9) 利用による変化

子育て支援サービスを利用することによって、「親に友だちができた」(64.2%)、「親同士のつながりができた」(41.6%)、「親同士で子育ての悩みを言える」(65.9%) と肯定的に回答した人は、6割程度であった。逆に、これらの設問に否定的に回答している人が35%～40%いる (図表4－9)。

図表4−8　利用している感想 (n=226)



図表4−9　子育て支援サービスの利用による変化 (n=226)



（10）子育て支援施設に期待したいこと

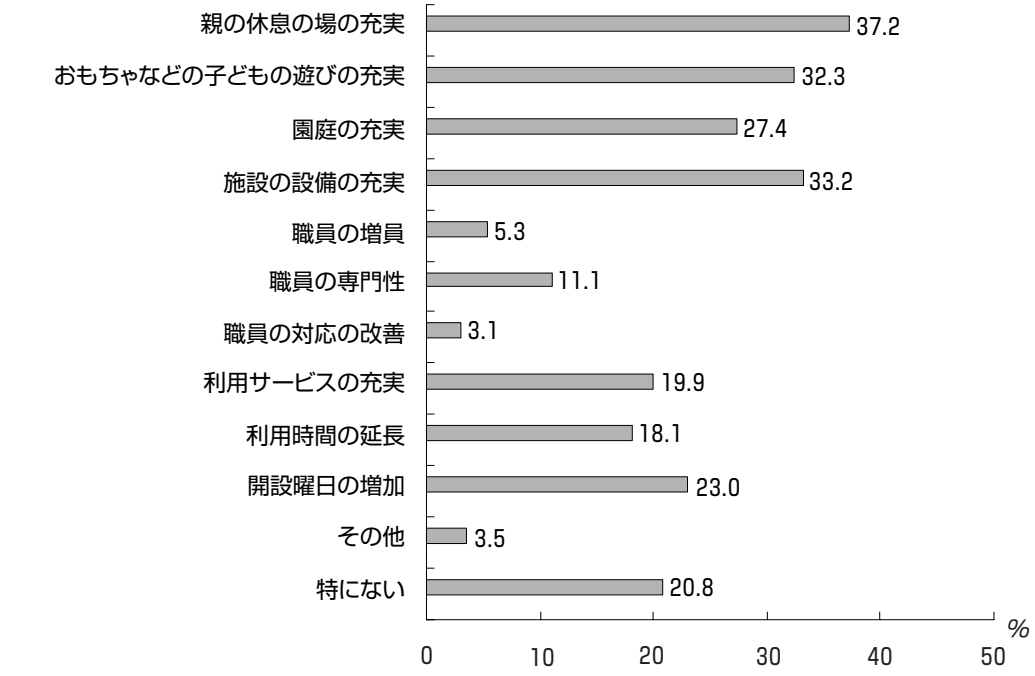
現在利用している子育て支援サービスに対して期待したいことで最も多かったのは、「親の休憩室」37.2%であった。次に「施設の設備の充実」33.2%、「おもちゃなど子どもの遊びの充実」32.3%、「園庭の充実」27.4%、「開設曜日の増加」23.0%、「利用サービスの充実」19.9%、「利用時間の延長」18.1%などであった。（図表４－10）

（11）あなたの希望する子育てサービス

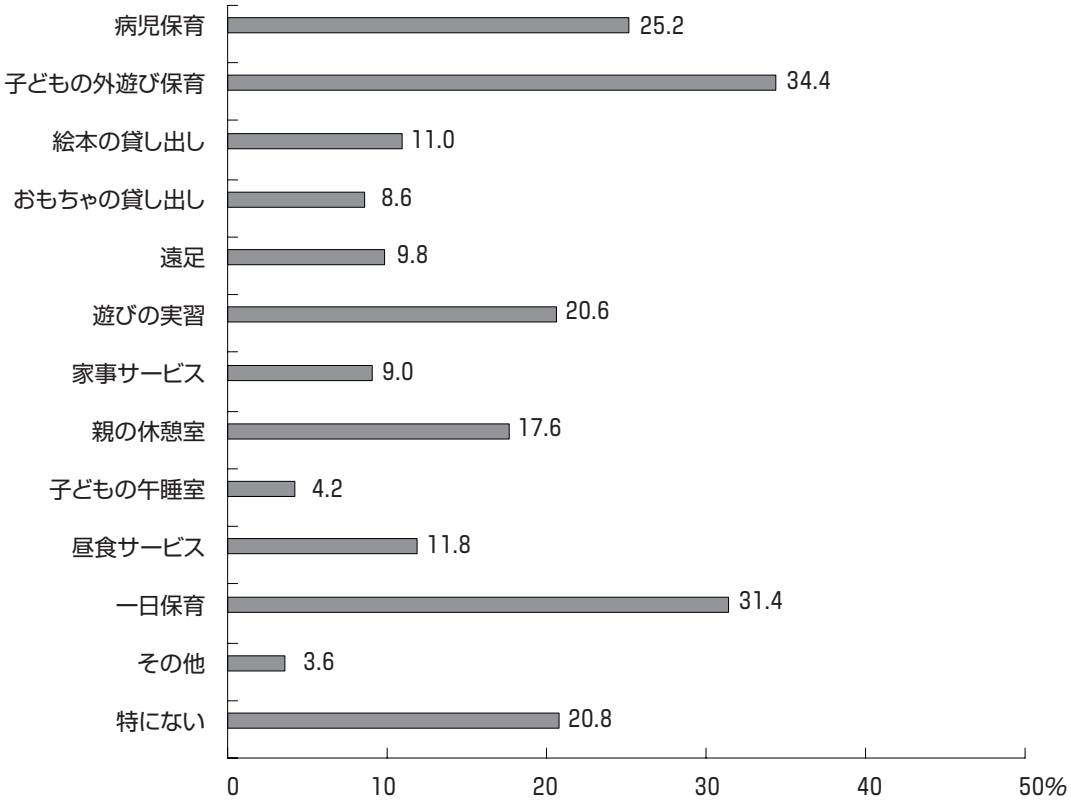
この設問は、子育て支援サービスを利用している人、利用していない人、全員に対して子育て支援サービスにどのような内容を希望するかたずねたものである。

希望がもっとも多かったものは、「子どもの外遊び保育」34.4%であった。次に多かったのは、「一日保育」31.4%、「病児保育」25.2%、「特にない」20.8%、「遊びの実習」20.6%、「親の休憩室」17.6%、「昼食サービス」11.8%、「絵本の貸し出し」11.0%などであった。（図表４－11）

図表4−10　利用している施設に期待したいこと（n=226 複数回答）



図表4−11　希望する子育て支援サービス（n=500 複数回答）



2．保育園入所家庭、在宅家庭における比較

(1) 地域子育て支援サービスの利用率

子育て支援サービスを利用している割合を、子どもを保育園に入所させている家庭と在宅家庭に区別して比較してみた。在宅家庭における利用率は、52.6%、保育園入所家庭では21.2%であった。保育園入所家庭では、保育園以外の子育て支援サービスの利用は現実的に難しい状況にある。（図表４－12）

図表4−12　子育て支援施設利用率

保育園（1〜3歳）n=123	21.2%
在宅　（1〜3歳）n=366	52.6%

(2) 子どもについての悩み

母親の子どもについての悩みを見てみると、ほとんどの項目において在宅家庭の母親の方が悩みを感じている割合が高い。「特にない」と回答しているのは、保育所入所家庭が33.9%、在宅家庭29.8%であった。

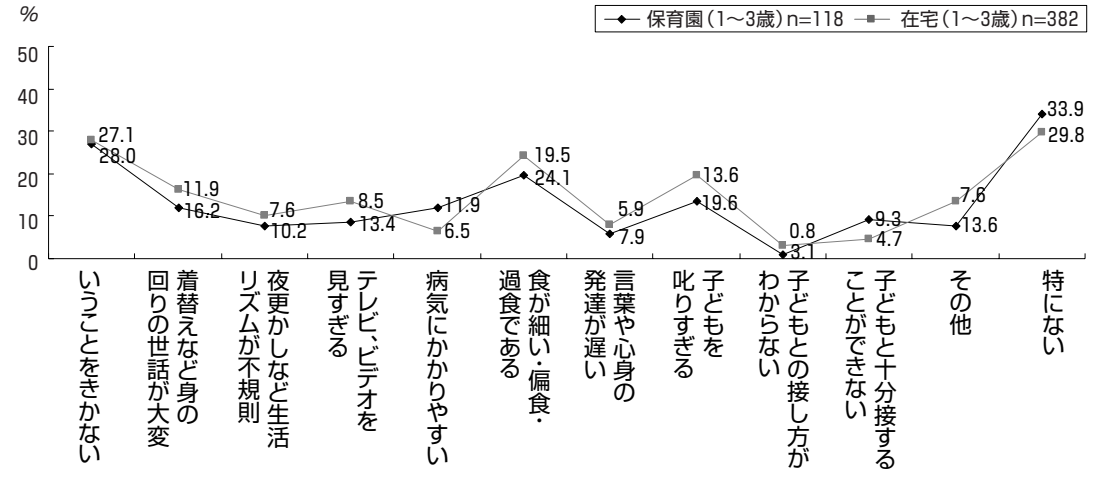
悩みの内容では、最も多かったのが「いうことをきかない」(保育園入所家庭27.1%：在宅家庭28.0%)、次に「食が細い、偏食・過食である」(保育所入所家庭19.6%：在宅家庭24.1%)、「子どもを叱りすぎる」(保育所入所家庭13.6%：在宅家庭は19.6%) などであった。「その他」の悩みが在宅家庭では保育所入所家庭の倍近い。

保育園入所家庭の方が在宅家庭より割合の高かったのは、「病気にかかりやすい」(保育所入所家庭11.9%：在宅家庭6.6%)、「子どもと十分接することができない」(保育所入所家庭9.3%：在宅家庭4.7%) であった。(図表 4 －13)

(3) メディア視聴時間

メディア視聴時間では、 1 時間未満が保育園入所家庭は13.6%、在宅家庭が11.5%。 1 時間以上 2 時間未満では、保育園入所家庭は63.6%、在宅家庭が51.1%と10%以上の開きがあった。 3 時間以上の視聴時間は、保育園入所家庭では20.0%であるが、在宅家庭では39.9%であった。在宅家庭の約 4 割が 3 時間以上視聴していると回答している。保育園入所家庭では、視聴時間が 5 時間以上は2.5%であるが、在宅家庭では11.5%であった。平日は、日中のメディア視聴時間がほとんどないと思われる保育園入所家庭に比して、在宅家庭では朝から晩までメディア視聴が可能であるという条件の違いがこれらの差になってあらわれたと思われる。(図表 4 －14)

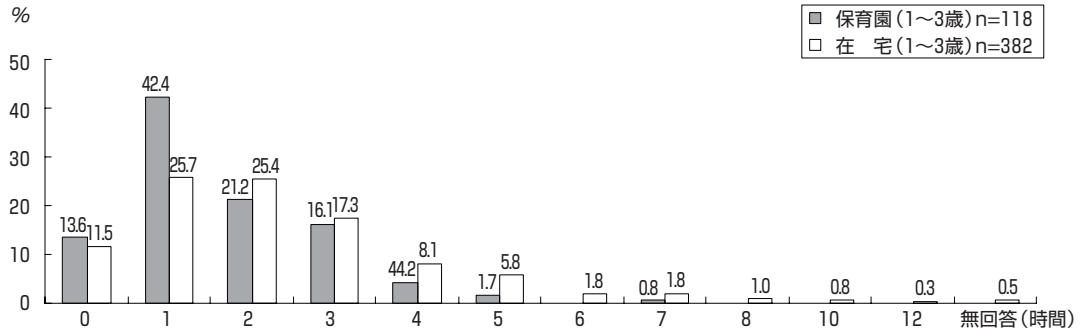
図表4−13　子どもについての悩み(複数回答)



(4) 習い事

保育園入所家庭の83.1%、在宅家庭の70.4%は習い事はしていないという回答であった。習い事をしていると回答した中で多かったのは、「通信制一括の家庭教育」が在宅家庭で6.5%、「スイミング」「語学」「知育中心の幼児教育」「その他」などがであった。在宅家庭の方が習い事をさせている割合が高く、1歳～3歳の子どもの30%以上が何らかの習い事をしているが、保育園入所家庭の方は約17%であった。(図表4 －15)

図表4−14　メディア視聴時間



図表4-15 習い事（複数回答）

	保育園（1～3歳） n=118　%	在宅（1～3歳） n=382　%
スイミング	5.1	5
スイミング以外のスポーツ	0.8	3.9
バレエ・リトミック	0.8	3.9
音楽関係	3.4	2.9
語学	1.7	5.8
通信制一括購の家庭教育	4.2	6.5
知育中心の幼児教育	0.8	5.2
その他	1.7	5.5
習い事はしていない	83.1	70.4

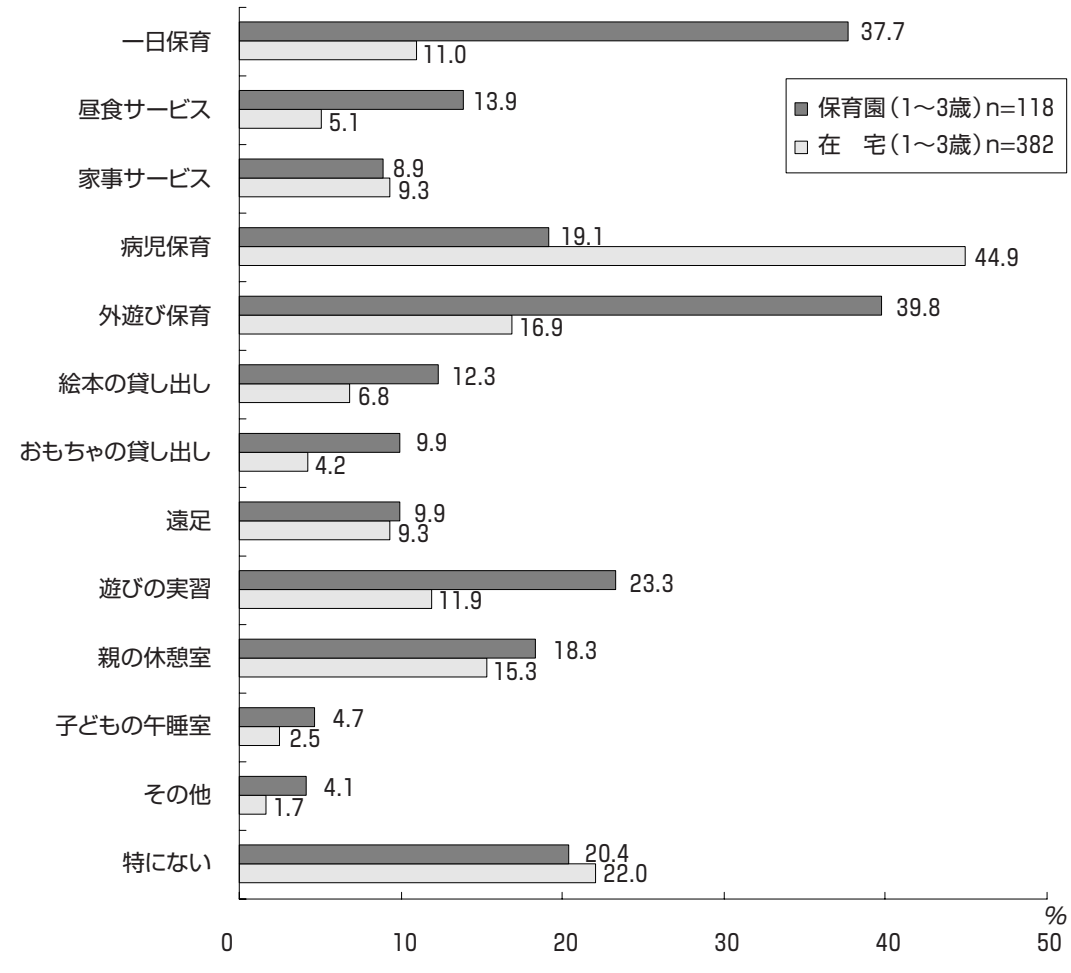
(5) 希望する子育て支援のサービス

地域の子育て支援施設に期待するサービスは、在宅家庭と保育園入所家庭の違いが大きく表れた。

在宅家庭では、「外遊び保育」がもっとも多く39.8%、次に「一日保育」37.7%、「遊びに実習」23.3%、「特にない」20.4%、続いて「病児保育」「親の休憩室」「昼食サービス」「絵本の貸し出し」「おもちゃの貸し出し」「遠足」などであった。(図表 4 －16)

保育園入所家庭では、最も多かったのが「病児保育」44.9%、次に「特にない」20.4%、「親の休憩室」15.3%、続いて「遊びの実習」11.9%、「一日保育」11.0%、「家事サービス」「遠足」がともに9.3%、「おもちゃの貸し出し」「絵本の貸し出し」の希望はごく少数で在宅家庭の半分以下であった。

図表4−16　希望する子育て支援のサービス(複数回答)



3．夫婦関係

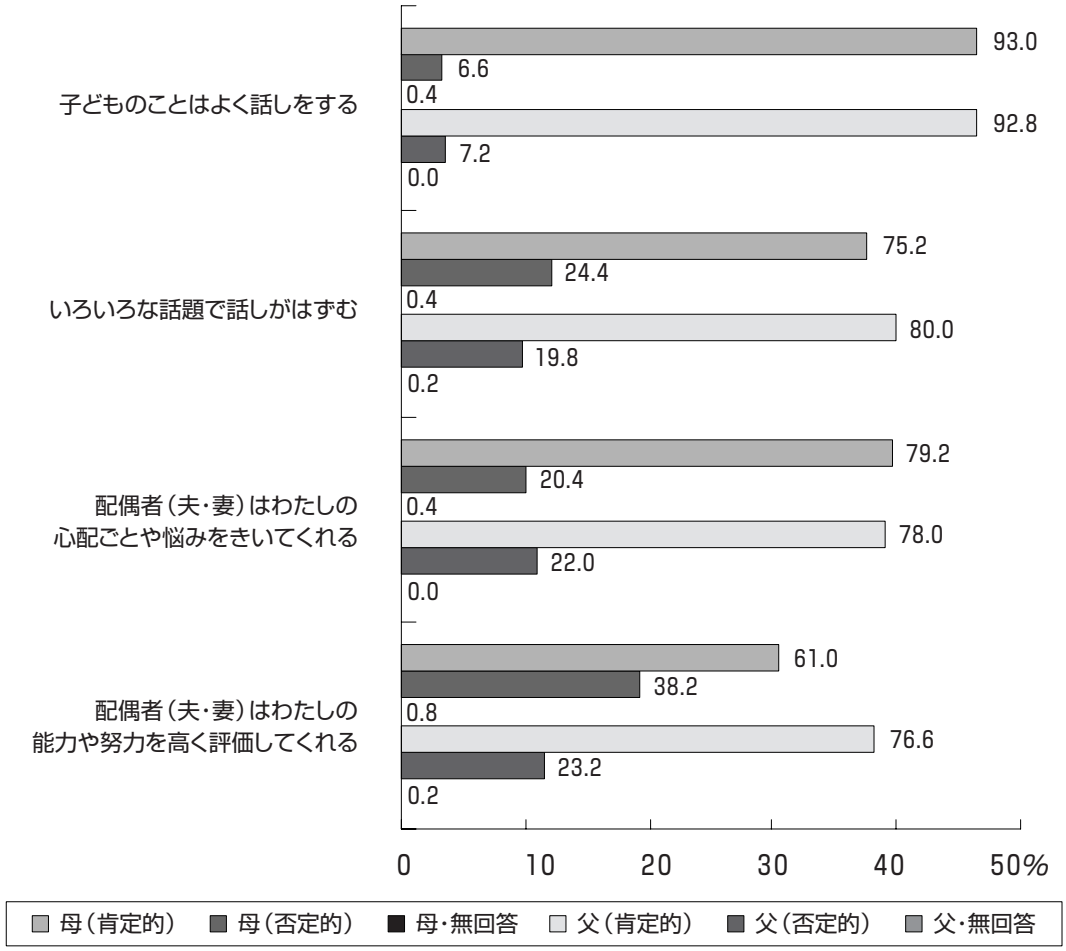
(1) 夫婦間のコミュニケーション

父親、母親ともに、「子どものことはよく話をする」という設問には 9 割以上が肯定的な回答をしており、父母間の差がもっとも少なかった。

「いろいろな話題で話がはずむ」では、肯定的に回答した父親は80.0%、母親は75.2%、否定的な回答は父親19.8%、母親24.4%であった。子どものことでは、 9 割以上の父母が「よく話をする」と回答しているにもかかわらず、それ以外の会話との開きが20%近くある。

「配偶者はわたしの心配事や悩みを聞いてくれる」という設問では、父母ともに 8 割近くが肯定的に回答している。「配偶者はわたしの能力や努力を高く評価してくれる」では、父親の76.6%が肯定的に回答し、否定的回答は23.2%であった。母親では肯定的回答は61.0%であり、否定的回答が38.2%であった。この設問が父親と母親の回答の開きがもっとも大きく、母親の方が配偶者の自分への評価が低いと感じていることがわかる。(図表 4 －17)

図表4−17　夫婦間のコミュニケーション(母 n=500　父 n=500)



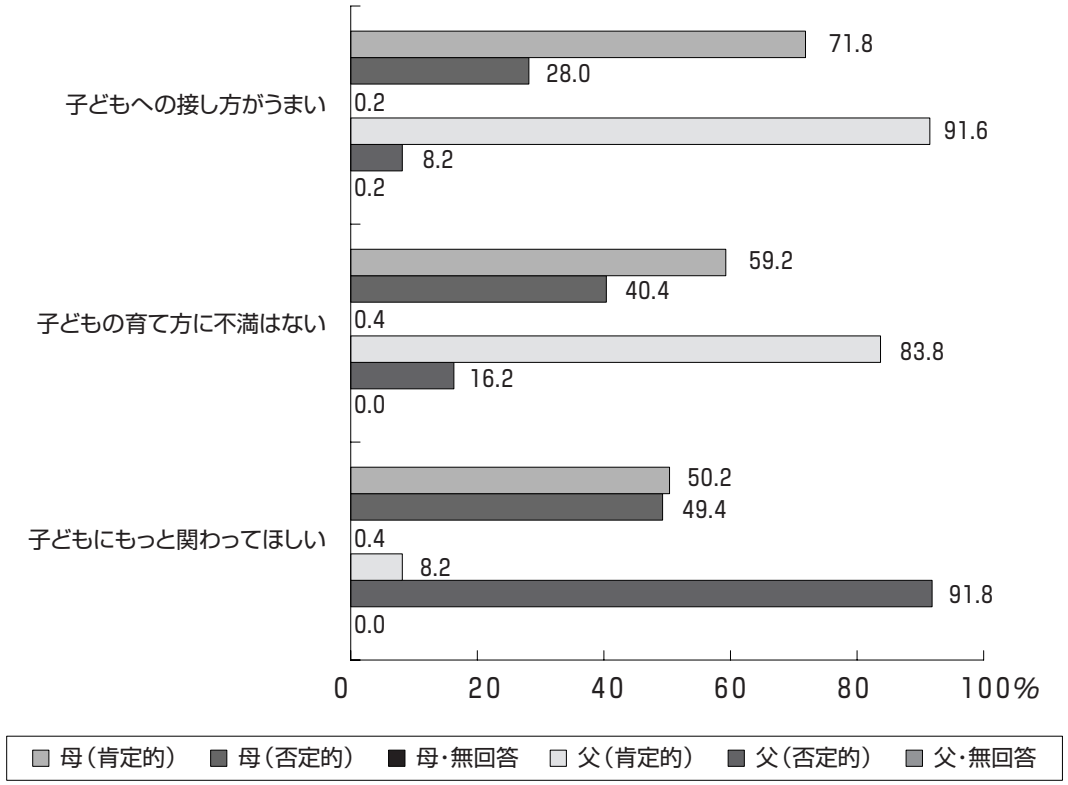
(2) 配偶者の子育てに対する関わり方について

「子どもへの接し方がうまい」では、父親の肯定的回答が91.6%、否定的回答は8.2%であった。母親は肯定的回答が71.8%、否定的回答が28.0%と差が見られた。

「子どもの育て方に不満はない」では、父親の肯定的回答が83.8%、否定的回答が16.2%であった。母親の肯定的回答は59.2%、否定的回答は40.4%であり、父親との差が大きくなっている。

「子どもにもっと関わってほしい」では、父親の91.8%が否定的回答をしており、肯定的な回答は8.2%であった。それに対して、母親は肯定的回答50.2%、否定的回答49.4%と半々であった。全般的に父親は子育てを母親に任せているからか、母親に対する不満は少ない。それに対して母親は、もっと子育てに関わってもらいたいと考えている人が半数近くおり、それが配偶者の子どもの育て方に不満をもっている人が4割強いることと関連があるのではないかと思える。(図表4－18)

図表4−18　配偶者の子育てに対する関わり方(母 n=500　父 n=500)



(3) 配偶者対して期待したいこと

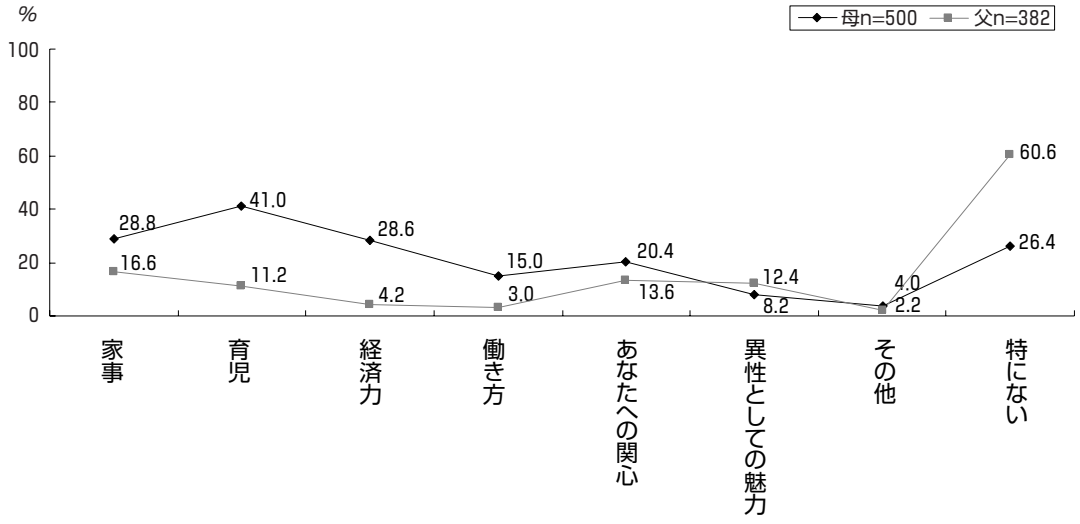
配偶者に対して期待したいことで最も多かったのが、父親は「特にない」(60.6%)、母親は「育児」41.0%であった。次に多かったものは、父親は「家事」(16.6%)、「あなたへの関心」(13.6%)、「異性としての魅力」(12.4%)、「育児」(11.2%)、「経済力」(4.2%)、「働き方」(3.0%)、「その他」(2.2%) であった。

母親では「家事」(28.8%)、「経済力」(28.6%)、「特にない」(26.4%)、「あなたへの関心」(20.4%)、「働き方」(15.0%)、「異性としての魅力」(8.2%)、「その他」(4.0%) であった。(図表 4 －19)

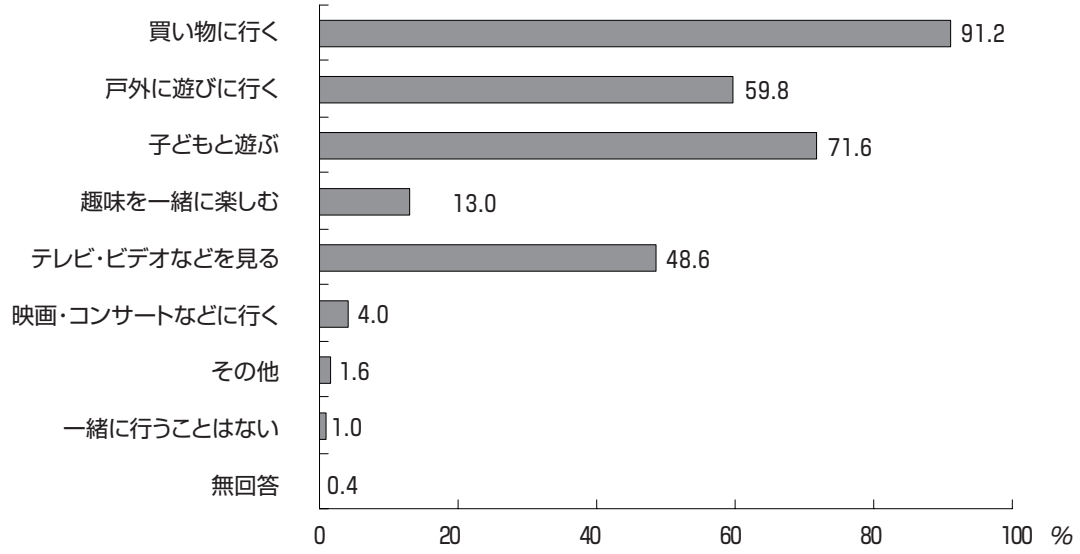
(4) 夫婦の同伴行動

夫のみに質問をしている項目である。夫婦の同伴行動として最も多かったのは、「買い物に行く」91.2%であった。次に「子どもと遊ぶ」71.6%、「戸外に遊びに行く」59.8%、「テレビ・ビデオなどを見る」48.6%、「趣味を一緒に楽しむ」13.0%、「映画・コンサートなどに行く」4.0%であった。この設問では、夫婦二人だけの同伴行動に限定せず、子どもと一緒も可とした。(図表 4 －20)

図表4−19　配偶者に対して期待したいこと(複数回答)



図表4−20　夫婦の同伴行動　（父 n=500　複数回答）



4．まとめ

(1) 地域の子育て支援サービスの利用

①少ない利用日数、利用時間

母親が利用している子育て支援サービスでは、児童館、親子で遊ぶひろばなどの利用が大多数を占めており、一時保育やファミリーサポートセンターなどの利用は少ない。利用日数は7割近くが週1日であるが、2割弱が週2～3日の利用である。利用時間は8割近くが1～2時間程度である。

②子育て支援施設の職員と親の距離

利用している施設のスタッフとの関係では、「相談にのってもらいたいと思うときに相談にのっもらえる雰囲気がある」という設問に半数以上が否定的な回答をしており、「家庭の状況を理解してくれている職員がいる」では、7割以上が否定的回答をしている。また、「子どものことを話す機会がよくある」という設問では、約半数近い人が否定的回答をしている。

これらの結果から､子育て支援の場では誰でも気楽に相談ができる訳ではないことが伺われる。施設利用が週1日1～2時間程度の人が大多数のため、職員との交流が図りにくいのか、職員との間に距離が感じられる。

これは、支援サービスを利用しにくい条件があるからなのか、それとも利用する必要を感じていない結果なのかは不明である。しかし、利用している子育て支援施設に期待したいことでは「親の休息の場の充実」「遊びや園庭の充実」「施設設備の充実」「開設曜日の増加、利用時間の延長」「利用サービスの充実」などがあがっている。週1日、1～2時間程度の利用が多いことから、利用日数、利用時間が増加することで職員と交流する機会が増加することによって、相互理解が深まることが考えられる。

③子育て支援サービスを利用するメリット

子育て支援サービスを利用した結果、「子どもが楽しそう」なことと、「子どもの遊びが広がった」ことを大多数の人があげている。しかし、親自身については、子どもへの理解を深めたり、子どもへの接し方に変化を感じている人は半数程度であった。親同士の関係では、約 6 割以上の人が「友だちができた」、「親同士のつながりができた」、「子育ての悩みを言える」と回答している。

家では経験できない広い空間で遊び、他の子どもたちとの交流などが見られることは、子どもの成長にとって意味のある施設（サービス）だと親が考えていることがわかる。

一方、親自身の成長と利用の効果は定かではない。利用することで親同士の交流が持てた人が約 6 割いるが、残りの 4 割弱は子育て支援施設を利用しながらも、親同士の交流は十分持てず、職員との関わりも少ないという状況にある人だと言えるだろう。

子どものために利用しても、親自身が利用することに楽しみや意義を見いだせない場合、その人にとって必要な子育て支援のサービスが届かなかったり、問題を抱えている家族に支援が届かないという状況を生みやすいだろう。

④子育て支援サービスに求めているもの

母親全員に希望する子育て支援サービスをたずねた設問では、「子どもの外遊び保育」「一日保育」「遊びの実習」「病児保育」「親の休憩室」「昼食サービス」「絵本・おもちゃの貸し出し」「遠足」などがあがっている。

地域における子育て支援サービスは、子どもが支援施設の空間で遊べるというだけでなく、子どもの成長・発達を考慮したサービス内容（保育内容）の提供が求められている。「外遊び保育」「絵本やおもちゃを貸し出し」など、子どもの遊びの環境設定の視点からも「子どもが育つための支援（子育ち支援）」としてのサービスを提供することが今後の課題であろう。

「一日保育」「遊びの実習」「病児保育」「親の休憩室」などの希望は、親が自分自身のために必要だと感じているサービスである。親子で遊べる広場空間の提供だけでなく、親の子育てを具体的にエンパワーしたり、育児不安や育児疲労を軽減するような「子育て支援」サービスが利用できることが今求められているのではないか。

（2）保育園入所家庭と在宅家庭における比較から

①保育園入所家庭の低い利用率

地域の子育て支援サービスの利用率をみると、在宅家庭で約半数、保育園利用家庭では約 2 割の利用率である。地域子育て支援センター、子ども家庭支援センター、つどいの広場、児童館などに代表される子育て支援施設のサービスの多くが、主に在宅家庭を対象にしているため、保育園入所家庭の利用率が低いと思われる。保育園入所家庭にとって、子育て支援サービスの利用は、ほとんど保育園のみだと言っても過言ではないだろう。

②子どもについての悩みー保育園入所家庭と在宅家庭の違い

子どもについての悩みをたずねた設問では、保育園入所在宅家庭に比べて在宅家庭の方がほと

んどの項目に関して悩みを感じている割合が３～５％程度高い。保育園入所家庭の方が割合が若干低い理由として、園の職員に子どもの悩みを相談する機会があることと、「食に関すること」、「着替え」「言葉や心身の発達」などは既に園生活の中で支援されていることなどが考えられる。

それに対して在宅家庭では、身近に相談できる人がいなかったり、子どもの成長・発達に応じた適切な関わりが分からないために、親が悩んだり、いらいらするのではないか。

逆に、「病気にかかりやすい」と感じている人の割合が在宅家庭に比して倍近いのは、保育園生活によって、病気になったり、病気をうつされたりすることが多いからだと推察される。「子どもと十分接することができない」という悩みも、保育園入所家庭の方が在宅家庭の２倍近い。これは子どもを保育園に入所させていることで、子どもに接する時間が短いことが問題だと感じているようである。

③在宅家庭のメディア視聴時間の長さ

メディア視聴時間は、保育園入所家庭の８割近くが２時間以内であるが、在宅家庭では、１時間長く３時間以内の視聴で８割近くになる。５時間以上視聴している子どもは、保育園入所家庭では2.5％であるが、在宅家庭では11.5％％以であった。平日は、日中のメディア視聴時間がほとんどないと思われる保育園入所家庭に比して、在宅家庭では朝から晩までメディア視聴が可能であるという条件の違いがこれらの差になってあらわれたと思われる。

④子育て支援サービスにおけるニーズ

子育て支援に希望するサービスをみると、在宅家庭では、「外遊び保育」「一日保育」「遊びの実習」「親の休憩室」「昼食サービス」などがあげられている。

保育園入所家庭では、「病児保育」が半数近くを占め、次に「外遊び保育」「親の休憩室」などがあげられている。

子育て支援サービスに親が期待しているのは、前述したように、自宅以外で子どもが育つ場所と、その場が親の子育てをサポートする場であることである。

保育園入所家庭に「病児保育」の希望が多いのは、保育園にそのサービスがほとんどないためである。保育園入所家庭における地域の子育て支援サービスの利用が低いのは、保育園入所家庭のニーズが満たせないことがあるだろう。

(3) 調査結果から見えてくる夫婦の関係

①父親の方が配偶者への評価が低い

夫婦間のコミュニケーションをみてみると、「子どものことはよく話をする」は父母ともに９割以上が肯定的であるが、それ以外の設問では、どれも父の肯定的回答に比べて、母親の肯定的回答率は低い。特にその差が大きかったのは、「配偶者はわたしの能力や努力を高く評価してくれる」で、肯定的回答は父76.6％、母61.0％であった。母親の方が「自分への評価が低い」と感じている割合が高いと言えるだろう。

②父親は母親の子育てに対する関わりを高く評価している

配偶者の子育てに対する関わり方では、父親の母親に対する評価は高い。それに対して母親の父親に対する評価では、「子どもにもっと関わってほしい」という設問で肯定的回答、否定的回答がほぼ半々であった。もっと父親として子育てに関わってほしいと考えている母親が半数近くいる。

③母親が父親に期待するのは「育児」「家事」「経済力」、父親は「特にない」が６割

父親は全般的に母親への期待が少ない傾向が見られた。父親の６割強が相手に期待することは「特にない」と回答しており、中でも「経済力」「働き方」はほとんど配偶者へ期待していない。

一方、母親は「育児」の期待がもっとも高く、次に「家事」「経済力」であった。「あなたへの関心」は、母親が20.4%、父親が13.6%であり、母親の方が自分に関心を払ってもらいたいと思っている人の割合が高かった。

④異性としての存在を期待するより親役割への期待が強い

「異性としての魅力」を期待する割合は両者ともに低くかった。母親は配偶者を異性として期待するより、父親・稼ぎ手として期待している。父親も同様に、母親を異性としてより母親・家事育児遂行者としての存在に価値をおいている傾向がみられる。期待することは「特にない」と答えた父親は期待していないのではなく、既に母親が自分の期待通りに育児・家事を遂行しているからだということが、「配偶者の子どもに対する関わり」の設問にほとんどの父親が肯定的な評価をしていることから推察できる。

夫婦関係が親役割を期待する関係なので、ほとんどの父親にとって母親は期待どおりであるが、「子どもと関わってほしい」と感じている母親にとって、父親は必ずしも期待に添っていない。その分、母親の育児負担が大きいことが推察される。夫婦が相互の期待にこたえる努力が必要であるが、現実に母親の育児負担・育児不安を軽減するために子育て支援施設が多様なサービスを提供することが、結果的に夫婦関係を支援することにつながるのではないだろうか。

（汐見和恵）

第５章　父親の職業生活と家族生活

本章では、父母の職業生活と家族生活の関連性について検討する。なかでも、父親の職業生活と父親の家事、育児の遂行状況および母親の出産意欲との関連を分析する。このような分析により、父親の職業生活が家族生活にもたらす影響の一端を明らかにする。

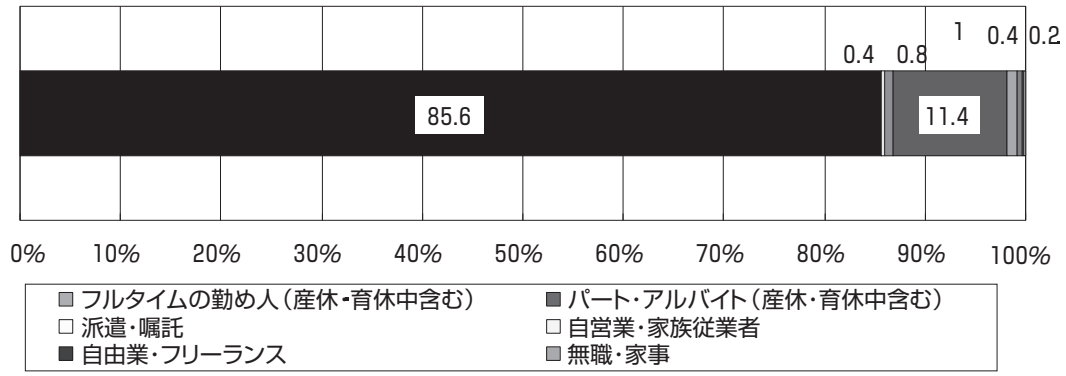
１．父親の勤務状況と家族生活

(1) 父親の就業上の特性

まず、父親の職業生活の中でも構造的側面といえる就業上の特性について把握する。

①就業形態

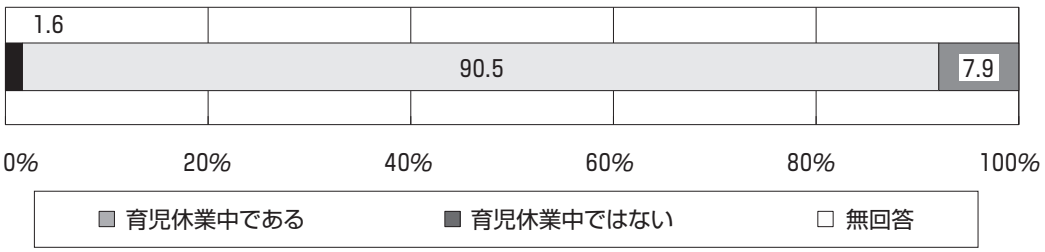
図表5−1　父親の就業形態



父親の就業形態は85.6%がフルタイムの勤め人、パート・アルバイトが0.4%、派遣・嘱託0.8%、自営業・家族従業者は11.4%、自由業１%、無職・家事0.4%、その他0.2%となっている。

②父親の育児休業の取得状況

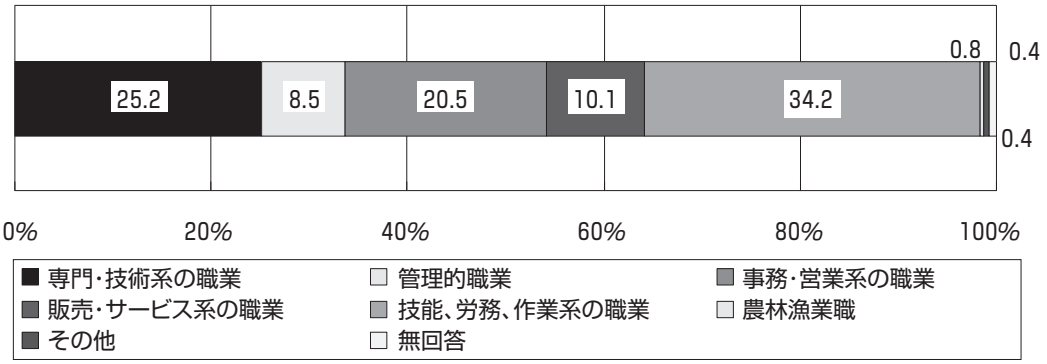
図表5−2　父親の育児休業の取得状況



父親の育児休業の取得状況については、取得中が全体の1.6%だった。

③職種

図表5−3　父親の職種



父親の職種については、専門・技術系が25.2%、管理的職業が8.5%、事務・営業系が20.5%、販売・サービス系が10.1%、技能・労務・作業系が34.2%、農林漁業職が0.8%となっている。

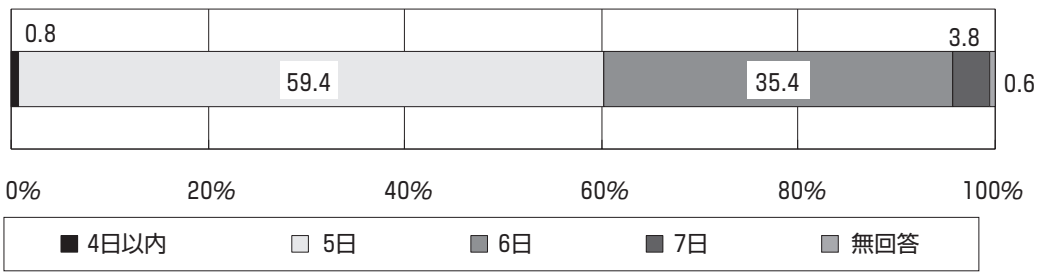
父親の職業について全体を簡単にまとめておく。フルタイムの勤め人が 8 割強と多くを占めており、育児休業取得者の割合は1.6%となっている。職種においては、技能・労務・作業系が全体の約 3 分の 1 を占め、最も多いことが本データの特色となっている。専門・技術系と事務・営業系がこれに続いている。

(2) 父親の勤務状況

次に、父親のより具体的な勤務状況を見ていく。具体的には、勤務日数や残業時間等の結果を報告する。

①週当たりの勤務日数

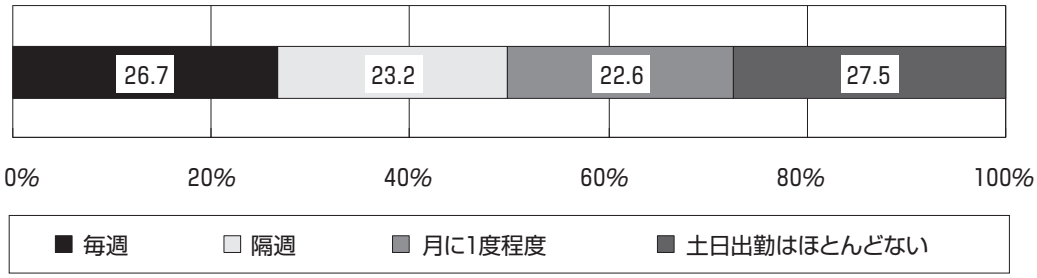
図表5−4　父親の勤務日数（週当たり）



週当たりの勤務日数であるが、 5 日が59.4%、 6 日が35.4%となっている。 7 日も3.8%いる。

②土日出勤

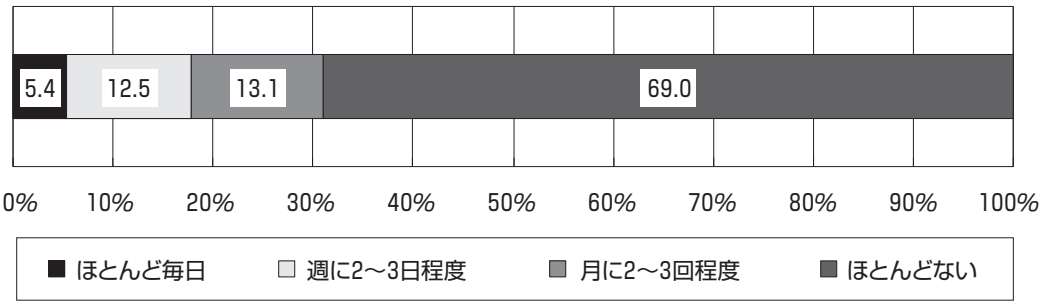
図表5−5　土日出勤の頻度



土日出勤については、毎週が26.7%、隔週が23.2%、月１度程度が22.6%、土日出勤はほとんどないは27.5%となっている。

③夜間勤務

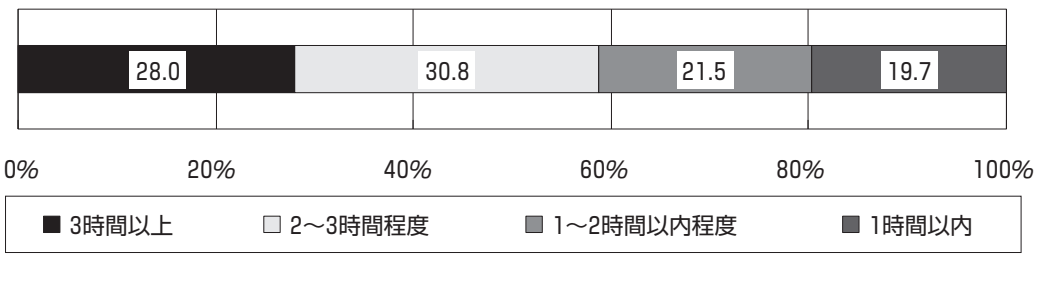
図表5−6　夜間勤務の頻度



夜間勤務については、ほとんど毎日が5.4%、週に２～３回程度が12.5%、月に２～３回程度が13.1%、ほとんどないが69.0%となった。

④残業時間

図表5−7　父親の残業時間（1日あたり）



残業時間については、３時間以上が28.0%、２～３時間程度が30.8%、１～２時間が21.5%、１時間以内が19.7%となっている。

勤務状況についてまとめると、勤務日数は５日が全体の５割強を占めるが、３分の１は週６日間勤務となっている。土日出勤も隔週以上あるものが全体の約半分を占め、残業時間も１日２時間以上の者が全体の半分を超えている。こうした結果を通して考えると、今回のデータにおける父親の勤務実態の厳しさがうかがえる。

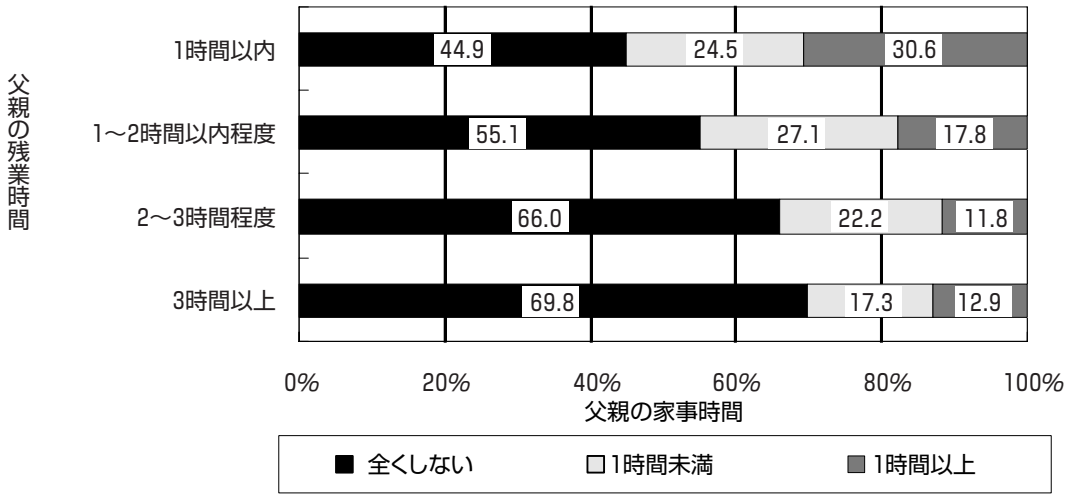
(3) 父親の勤務状況と家事遂行

次に、父親の勤務状況と家事遂行の関連をみる。父親の家事遂行は、父親が回答した生活時間（平日）の家事時間を用いた。

以下では、比較的関連が見られた結果を中心に報告していく。

①残業時間と家事遂行

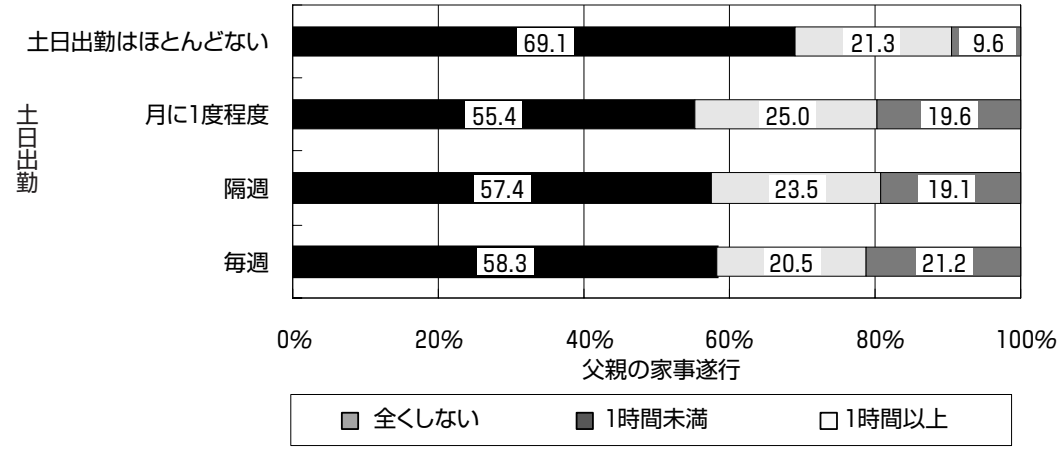
図表5−8　父親の残業時間と家事遂行の関連



父親の残業時間と家事遂行の関連を見た。残業時間が長くなるほど、家事を「全くしない」と答える者の割合が上昇している。逆に、１日あたりの残業時間が１時間以内であると、１日１時間以上家事を行う夫が３割を占めている。

②土日出勤と父親の家事遂行

図表5−9　父親の土日出勤の頻度と家事遂行



土日出勤と夫の家事遂行との関連をみた。土日出勤をしている者よりほとんどない者の方が「全くしない」の割合が高い。一方、土日出勤の頻度と夫の家事遂行の関連は明確には見られない。

父親の職業生活と家事分担の関連について、まとめておく。最も明確に関連が見られたのは、父親の残業時間と家事時間の関連だった。父親の残業時間が長いほど、本人の家事時間が減少することが示された。その他、父親の職種や土日出勤の頻度等と家事遂行との関連も見たが、明確な関連は今回の分析においては示されなかった。

(4) 父親の勤務状況と育児遂行

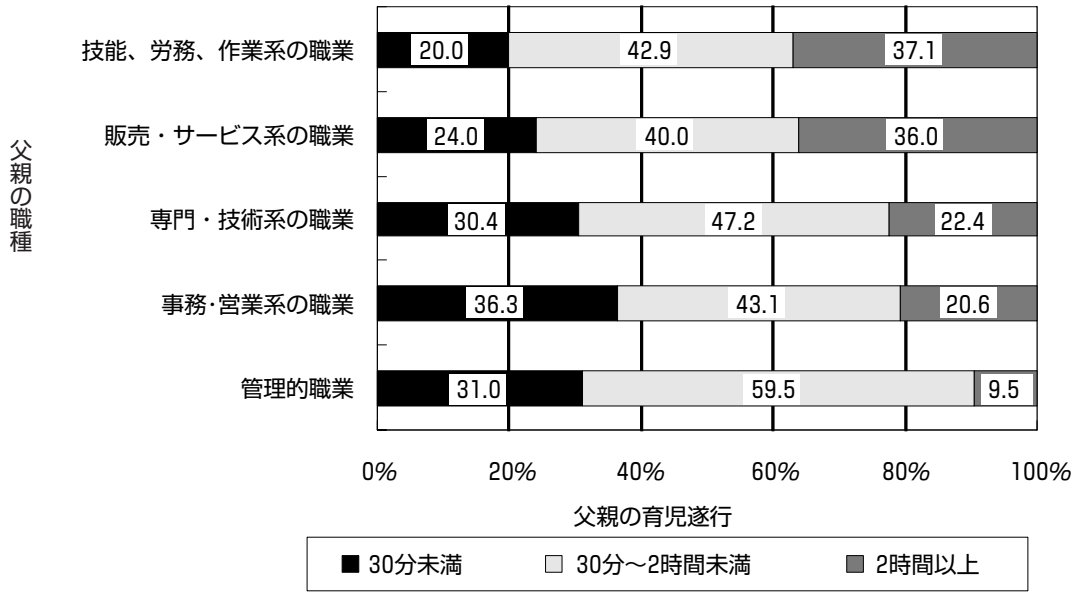
次に、父親の勤務状況と育児遂行との関連性を見る。父親の育児遂行は、父親が回答した生活時間（平日）の育児時間を用いた。比較的関連が見られた結果を中心に報告していく。

①父親の職種と育児遂行

ケース数が少ない農林漁業を除いて、父親の職種と育児遂行の関連をみた。その結果、技能・労務、作業系の職業、販売・サービス系の職業に就く父親は他の群の父親に比べ、育児時間が長い傾向があることが示された。一方、管理的職業にある父親の育児時間は短い傾向にあった。

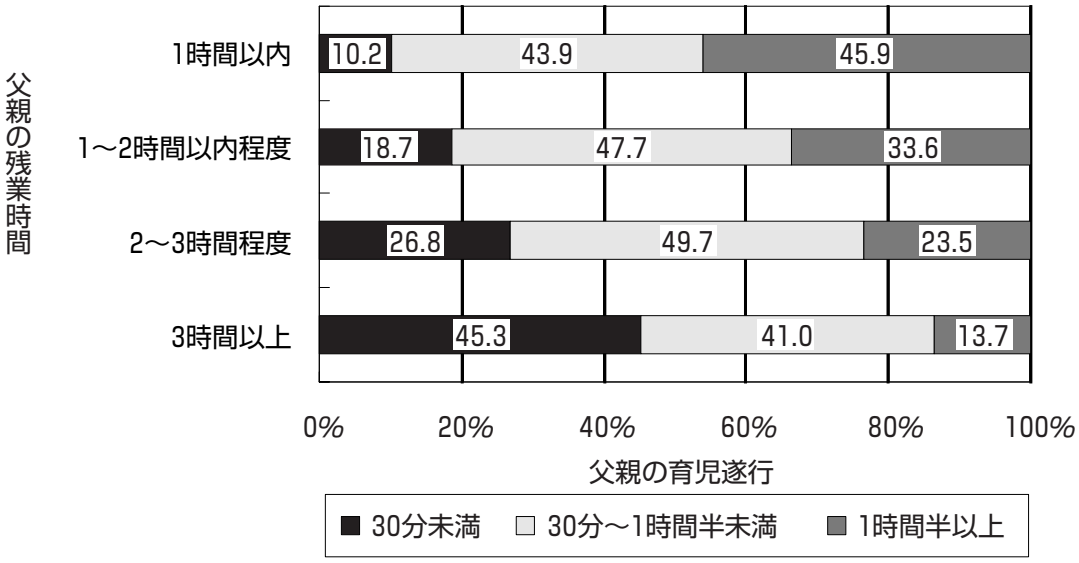
父親の職種による違いは小さいものではない。例えば、2時間以上家事を行う割合で比較すると、技能・労務・作業系の方が管理的職業より約4倍近くいることになる。

図表5−10　父親の職種と育児遂行



②父親の残業時間と育児遂行

図表5−11　父親の残業時間と育児遂行



父親の残業時間と育児時間の関連をみた。残業時間が長くなるほど育児時間が30分未満の者の割合が増えている。特に残業が３時間を越えると、父親の育児時間が減少している。

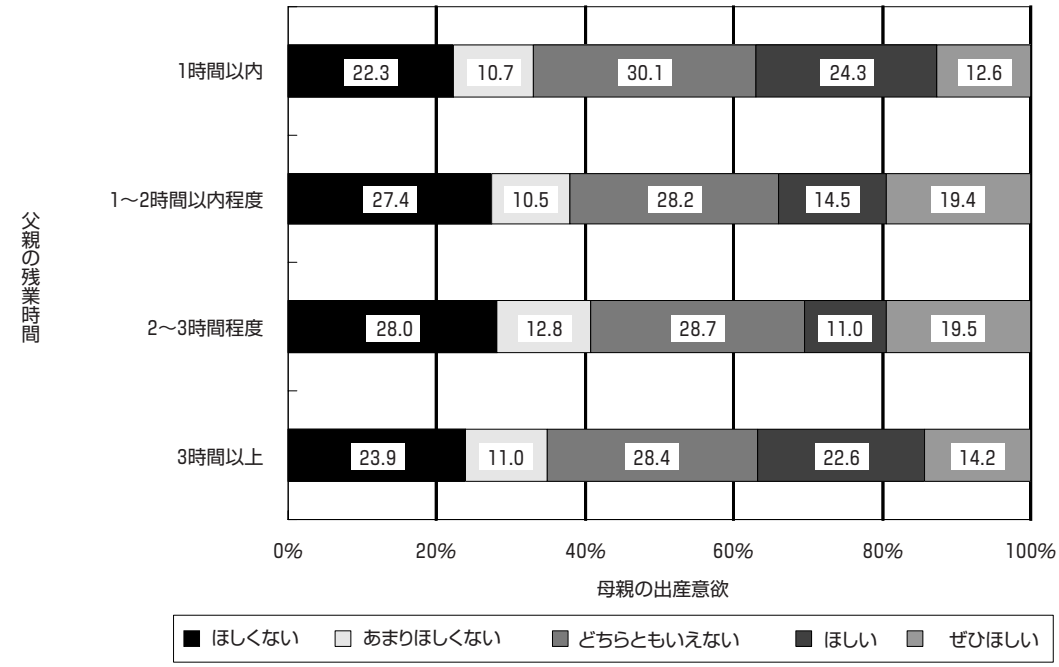
父親の勤務状況と育児遂行の関連について、まとめておく。父親の職種と残業時間が関連性を示した。具体的には、技能・労務・作業系の仕事に就く父親の育児時間は他の群より長いこと、父親の残業時間が短いほど、本人の家事時間が増すことが示された。

(5) 父親の職業生活と妻の出産意欲

父親の職業生活が家族生活にもたらす影響の１つとして、母親の出産意欲との関係が考えられる。以下、この点について分析を行った。

①父親の残業時間と母親の出産意欲

図表5−12　父親の残業時間と母親の出産意欲



父親の残業時間と妻の出産意欲の関連をみた。両者の間に明確な関連はみられなかった。

その他、土日出勤、夜間勤務との関連も見てきたが、明確な関連は見られなかった。

以上の結果からすると、父親の勤務状況と母親の出産意欲の関連は明確にはないことが考えられる。

2．父親の職場環境と家族生活

以上、父親の勤務状況と家族生活との関連をみてみた。以下では、父親の職業生活の中でもより質的な部分にあたる職場環境と本人の育児遂行および母親の出産意欲との関連をみていく。具体的な父親の職場環境として、①仕事の特性、②周囲の理解・支援、③組織風土の3つを取り上げる。

父親の仕事の特性については就業時間の柔軟性を取り上げる。具体的には「自分に都合の良い時間帯で仕事ができる」、「私は仕事のスケジュールを自由に調整できる」、「私の仕事に関する時間配分は私に任されている」「私は自由に、仕事をしたり、離れたりすることができる」の4項目の合計得点をだし、それをできるだけ等しく分布するように、低位群、中位群、高位群の3つにわけた。高位であるほど、就業時間に関して柔軟性があることを意味している。

周囲の理解・支援は、上司と同僚の2つにわけて尺度を構成した。上司の理解・支援は、「上司は私が家族のことを話すとき、聞いてくれる」、「上司は私が家族の中で役割を果たさなければならないことを理解している」、「上司は私の家族について理解がある」の3項目の合計得点をだし、それをできるだけ等しく分布するように、低位群、中位群、高位群の3つにわけた。高位であるほど、上司が自身の家族について理解しており、支援的であることを意味している。同僚の理解・支援は、上記の質問文を踏襲し、上司のところに同僚に置き換え、聞いた。そして同様の尺度を作成した。

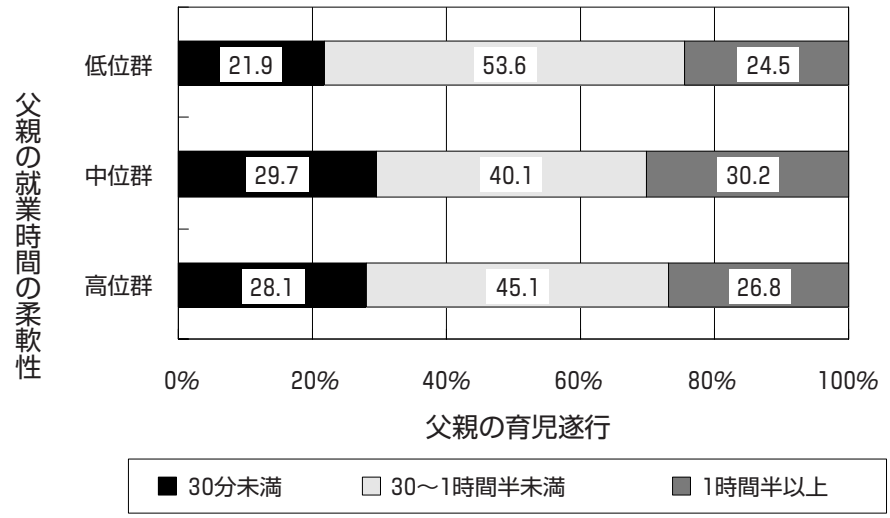
組織風土に関しては、長時間労働をよしとするような組織風土と家族支援制度の利用がキャリアの障壁となる組織風土の2つを設定した。前者については、「いまの職場には残業をするのが当然という雰囲気がある」、「いまの職場では、帰宅後や週末も家で仕事をすることが期待されている」、「いまの職場では家族やプライベートの生活より仕事を優先することが期待されている」の合計得点をだし、それをできるだけ等しく分布するように低位群、中位群、高位群の3つにわけた。高位であるほど、長時間労働をよしとする組織風土が強いことを意味している。

家族支援制度の利用がキャリアの障壁となる組織風土は、「育児休業を取得したり、育児を理由に有給休暇をとったら、いまの職場では快く思わない人がいる」、「フレックスタイム制度を使っていない人は、使っている人に比べていまの職場では人事や上層部のうけがいい」「家族の問題を理由に転勤を拒否したら、いまの職場では将来の昇進にひびく」の3項目の合計得点を出し、それをできるだけ等しく分布するように低位群、中位群、高位群の3つにわけた。高位であるほど、家族支援制度の利用がキャリアの障壁となる組織風土が強いことを意味している。

（1）父親の仕事の特性と育児遂行

①父親の就業時間の柔軟性と育児遂行

図表5−13　父親の就業時間の柔軟性と育児遂行

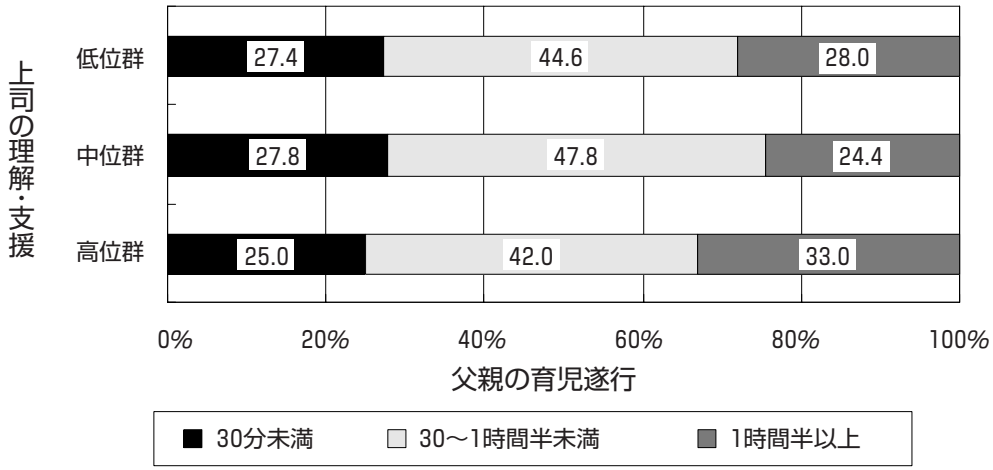


父親の就業時間の柔軟性と育児遂行との関連を見た。結果、父親の就業時間の柔軟性と育児遂行との間に明確な関係は見られなかった。

今回の分析の範囲から明確なことは言えないが、就業時間が柔軟であるほど男性の育児参加が進むというほど単純ではないようである。

②上司の理解・支援と父親の育児遂行

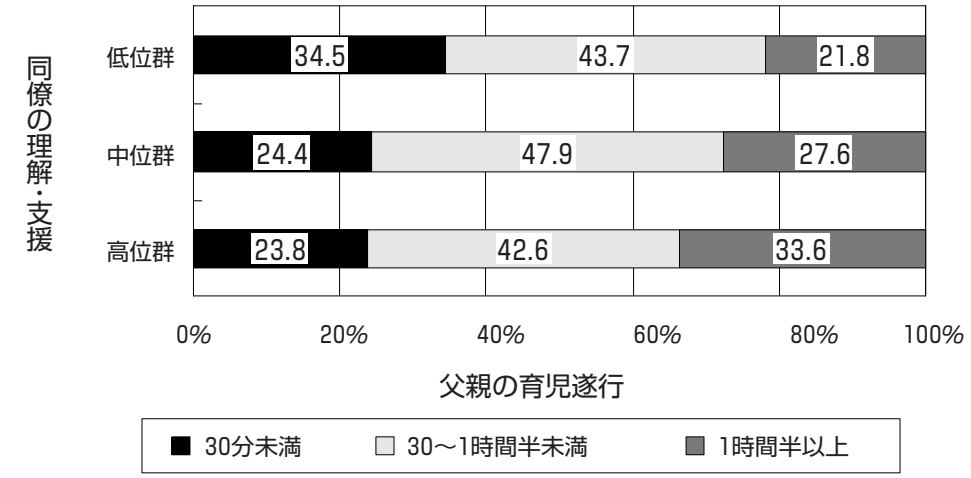
図表5−14　上司の理解･支援と父親の育児遂行



父親の育児参加を考える上で、職場の上司の理解・支援は重要な要因の１つと考えられる。両者の関連を検討してみたが、両者の間に明確な関連は見られなかった。あえて言えば、上司の理解・支援の高位群において、父親の育児時間が増える傾向が若干見られる。

③同僚の理解・支援と父親の育児遂行

図表5−15　同僚の理解･支援と父親の育児遂行



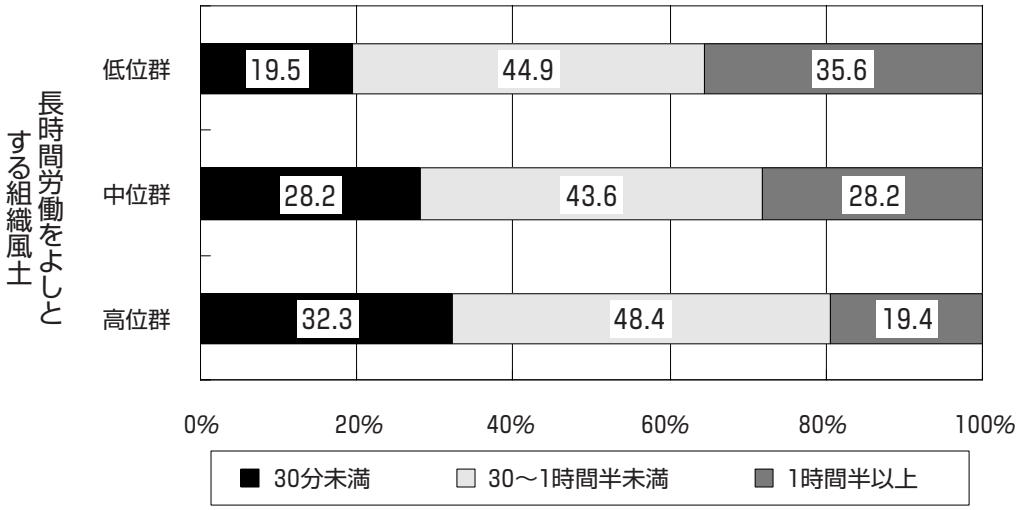
次に同僚の理解・支援と父親の育児遂行との関連を見た。父親の育児遂行と関連が見られたのは同僚の理解・支援だった。同僚の理解・支援が高まるほど、父親の育児時間が増えている傾向にある。

なお、上司および同僚の理解・支援と父親の家事遂行との間に明確な関連は見られなかった。

(2) 父親の職場の組織風土と育児遂行

①長時間労働をよしとする組織風土と父親の育児遂行

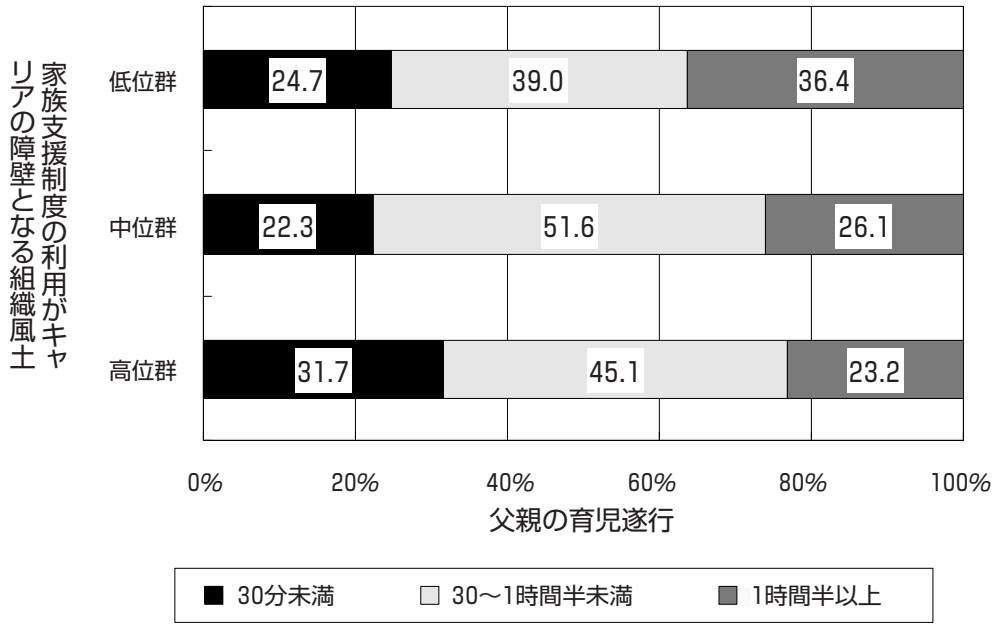
図表5−16　長時間労働をよしとする組織風土と父親の育児遂行



次に、長時間労働をよしとする組織風土と父親の育児遂行と父親の育児遂行の関連を見た。その結果、長時間労働をよしとする組織風土が弱いほど、父親の育児時間が増える傾向にあること

がわかった。長時間労働をよしとする組織風土の高位群では、１時間半以上育児を行う父親が19.4%だが、低位群では35.6%に増える。長時間労働をよしとする組織風土は、父親の育児参加に対して一定の影響力を持っていることがうかがえる。

図表5−17　家族支援制度の利用がキャリアの障壁となる組織風土と父親の育児遂行



次に、もう１つ組織風土と父親の育児遂行との関連を見た。もう１つの組織風土とは、家族支援制度の利用がキャリアの障壁となるか否かを尋ねたものである。

分析の結果、こうした組織風土が弱いと父親が認識しているほど、父親の育児時間が増える傾向にあることが示された。こうした組織風土の高位群では、１時間半以上の育児を行う夫は23.2%にとどまるが、低位群だと36.4%に増える。この結果を見ても、父親が働く職場の組織風土が育児参加と関連している様子が見てとれる。

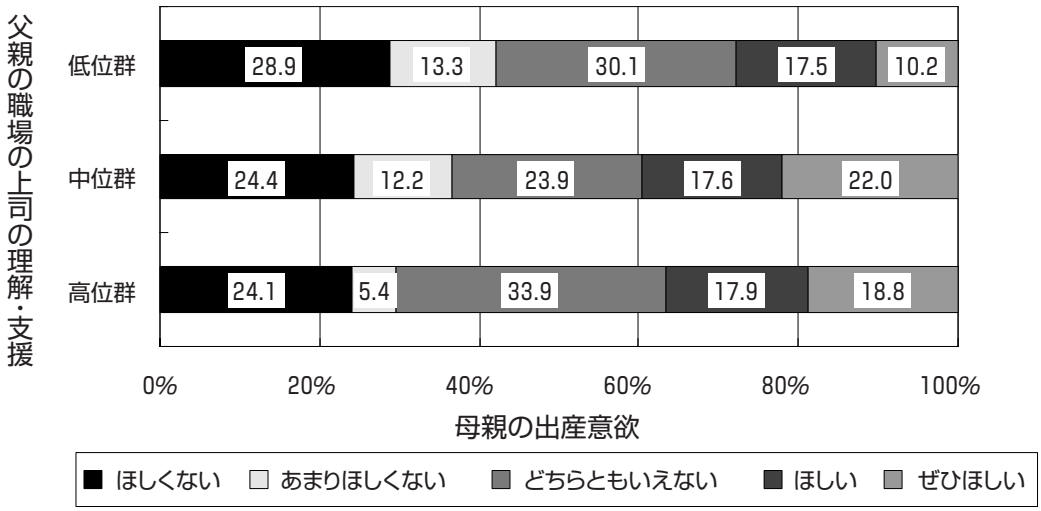
以上の分析を簡単にまとめておく。父親の就業時間の柔軟性は父親の育児遂行と明確な関連を示さなかった。一方、上司および同僚の理解・支援は緩やかに父親の育児遂行と関連しており、職場の理解・支援があるほど、父親の育児時間が増える傾向が見られた。

より明確に父親の育児遂行と関連が見られたのは父親の職場の組織風土である。長時間労働をよしとする組織風土が強いほど、家族支援制度の利用がキャリアの障壁となるような組織風土が強いほど、父親の育児時間が短いことが示された。

(3) 父親の仕事環境と母親の出産意欲

①上司の理解・支援と母親の出産意欲

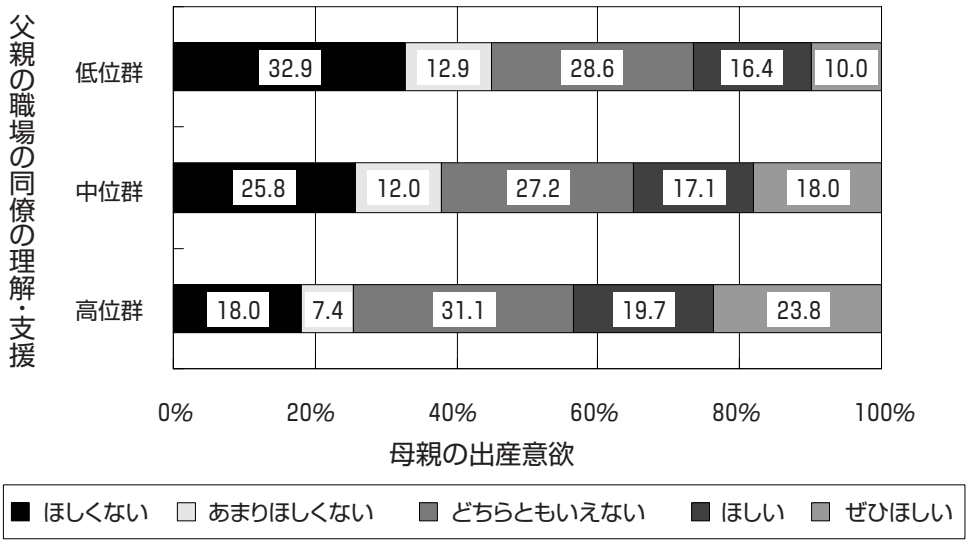
図表5−18　父親の職場の上司の理解･支援と母親の出産意欲



父親の職場の上司の理解・支援が高いほど、母親の出産意欲が高まる傾向にあることが示された。

②同僚の理解・支援と母親の出産意欲

図表5−19　同僚の理解･支援と母親の出産意欲

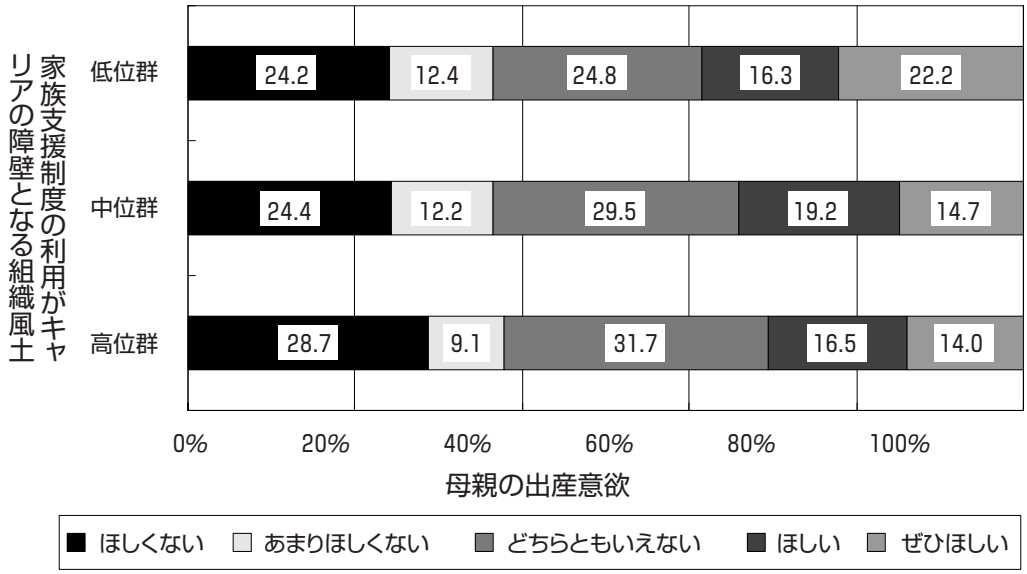


同僚の理解・支援と母親の出産意欲の関連をみた。その結果、同僚の理解・支援が高いほど、母親の出産意欲が高まる傾向にあることが示された。

母親本人ではなく、父親の職場の理解・支援の状況が母親の出産意欲と関連しているという結果そのものは、その因果プロセスの解明はひとまず脇に置くとして、興味深い結果と言える。

③家族支援制度の利用がキャリアの障壁となる組織風土と母親の出産意欲

図表5−20　家族支援制度の利用がキャリアの障壁となる組織風土と母親の出産意欲



次に父親が働く職場の組織風土と母親の出産意欲との関連を見る。ここでは母親の出産意欲との関連がより明確に見られた家族支援制度の利用がキャリアの障壁となる組織風土との結果を報告する。

分析の結果、緩やかではあるが、家族支援制度の利用がキャリアの障壁となる組織風土が高位群の父親の母親の出産意欲が低まる傾向が見られた。父親が働く職場でこうした組織風土が高位な場合、母親の出産意欲「ぜひ欲しい」の割合は14.0%であるが、低位な場合には22.2%と母親の出産意欲が上昇している。

以上、父親の職場環境と母親の出産意欲の関連を見てきた。分析の結果をまとめると、父親の職場において上司および同僚の理解・支援があるほど、家族支援制度の利用がキャリアの障壁となる組織風土が弱いほど、母親の出産意欲が高まる傾向が見られた。

3．母親の職業生活と出産意欲

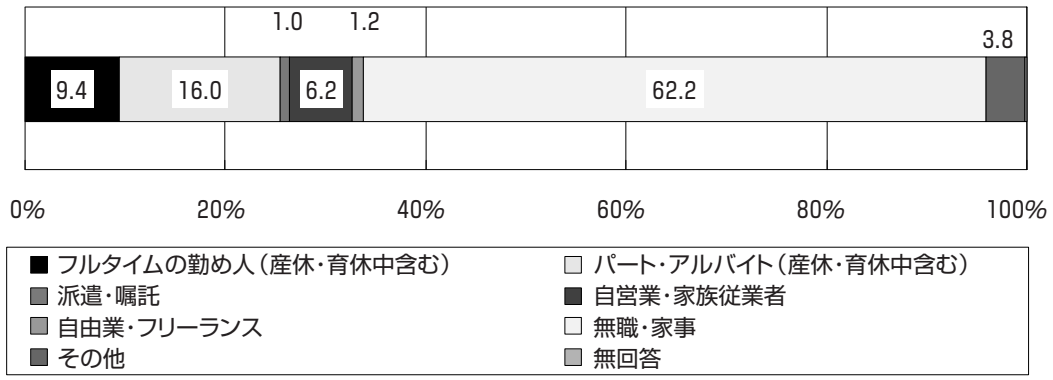
以上、父親の職業生活と家庭生活の関連を見てきた。以下では、母親の職業生活を検討する。

(1) 母親の勤務状況

以下では、母親の勤務状況を見ていく。

①母親の就業形態

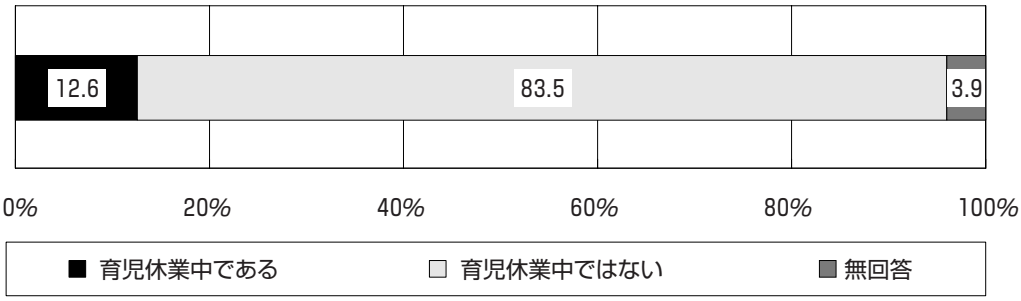
図表5−21　母親の就業形態



勤務形態は、無職が62.2%、パート・アルバイトが16.0%、フルタイムが9.4%、自営業・家族従業が6.2%となっている。自由業・フリーランスが1.2%、派遣・嘱託が1.0%だった。

②育児休業

図表5−22　母親の育児休業の取得状況

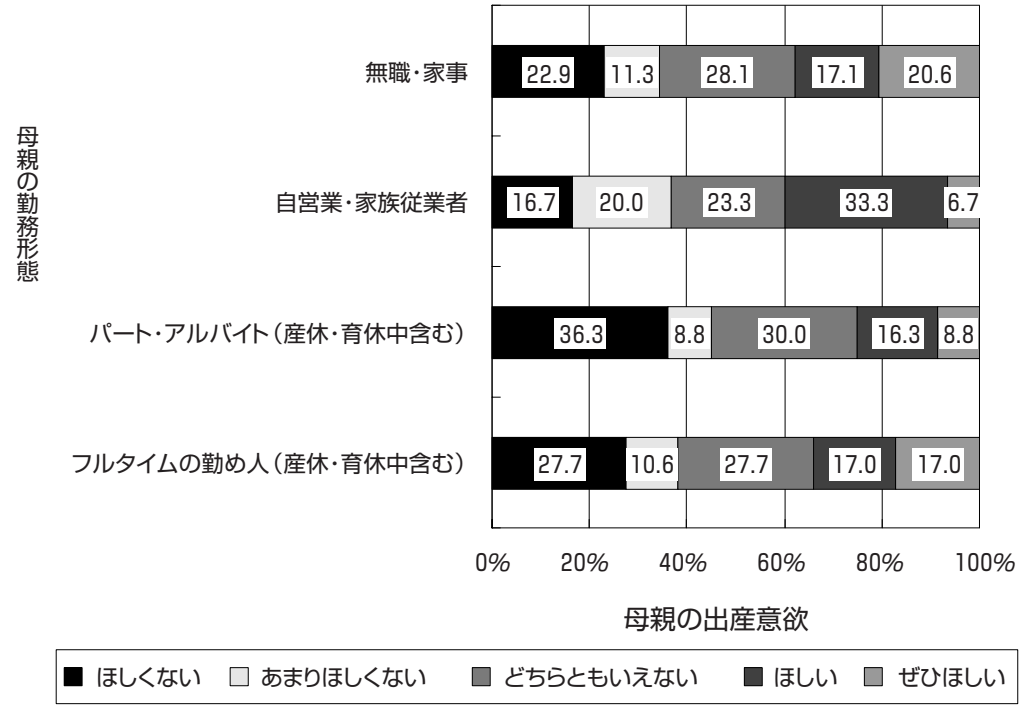


育児休業の取得状況については、育児休業中が12.6%、育児休業中ではないが83.5%となった。

（2）母親の勤務状況と出産意欲

①母親の就業形態と出産意欲

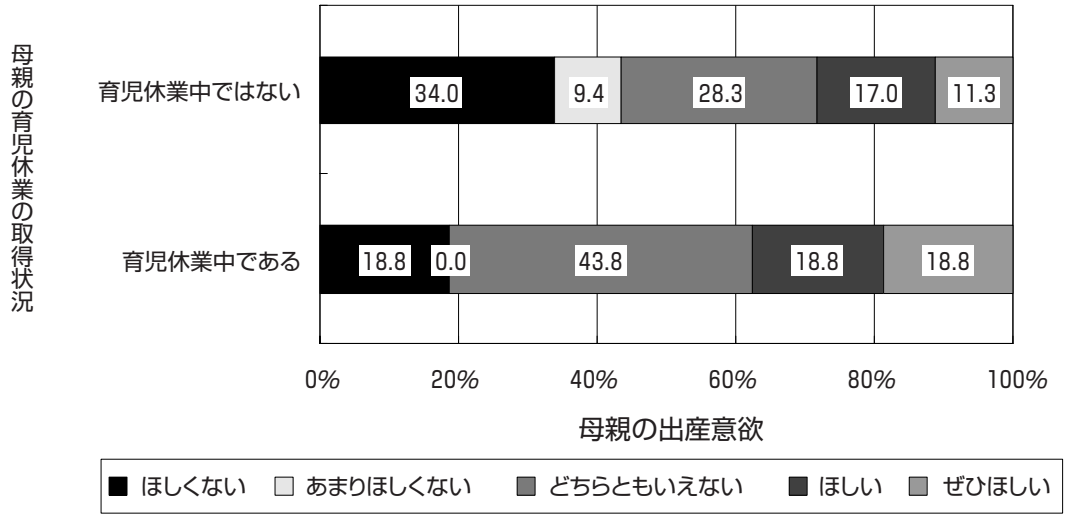
図表5−23　母親の就業形態と出産意欲



母親の就業形態と出産意欲の関連を見た。結果、「ほしい」と「ぜひほしい」を合わせた割合は、パート・アルバイトが最も低いことが示された。

②母親の育児休業の取得状況と出産意欲

図表5−24　母親の育児休業の取得状況と出産意欲



母親の育児休業の取得状況と出産意欲の関連をみた。育児休業を取得している母親の方がそうでない母親より出産意欲が高い傾向が見られた。

本節での結果をまとめておこう。母親の就業形態に関しては 6 割の者が未就業であり、大勢と占める。しかし、 3 割の者は何らかの形で就業しているとも言える。育児休業の取得状況は約 1 割となっている。

母親の就業形態と出産意欲との関連を見たところ、パート・アルバイトにある母親の出産意欲が他の群に比べ低いこと、育児休業の取得状況との関連では、育児休業を取得している方がそうでない者より出産意欲が高いことが示された。

4．まとめ

本章では、父親および母親の職業生活と家庭生活の関連を検証した。主に、父親の職業生活の状況が、父親本人の家事遂行や育児遂行、そして母親の出産意欲とどのような関連を見せるのかについて分析を行った。以下で、本分析で得られた知見についてまとめたい。

父親の職業については、フルタイムの勤め人が 8 割強と多くを占めた。育児休業取得者の割合は1.6%と少ない。職種においては、技能・労務・作業系が全体の約 3 分の 1 を占め、最も多い。製造業が産業の中心となっている東海地域の特性がうかがえる結果となった。

勤務状況についてまとめると、勤務日数は 5 日が全体の 5 割強を占めるが、 3 分の 1 は週 6 日間勤務となっており、育児期の父親の勤務状況の厳しさがうかがえる。土日出勤も隔週以上行っているものが全体の約半分を占めている。残業時間も 1 日 2 時間以上の者が全体の半分を超えている。こうした結果を通して考えると、今回のデータにおける父親の勤務実態の厳しさとともに、仮に父親が家族と時間を持ちたいと考えたとしても、それが難しいことをうかがうことができる。

次に、父親の職業生活と家事分担の関連について、まとめておこう。近年、夜間勤務の増加やシフトワークの普遍化など、男性の働き方が流動化する中で、こうした動向と家族生活との関連性を明らかにすることが本章の１つのねらいだった。

分析の結果であるが、父親の残業時間と家事時間との間に明確な関連が見られた。父親の残業時間が長いほど、本人の家事時間が減少することが示された。父親が長く職場に身を置くことが家族生活への参加の障壁となることを示す結果として、重要な知見といえる。

しかし、その他、父親の土日出勤や夜間勤務等と家事遂行との関連については明確な関連が今回の分析においては見られなかった。この点については今後も分析を進めていきたい。

次に、父親の職業生活と育児遂行の関連についてみた。家事遂行も重要なエレメント（要素）ではあるが、今回の調査対象が育児期にあることを鑑みれば、父親の職業生活と本人の育児遂行の関連の検証は本章の分析の中心的なテーマの１つと言えるだろう。

分析結果であるが、職種を除けば、上記の家事遂行の結果とほぼ同様なものとなった。父親の職種については、技能・労務・作業系の職業、販売・サービス系の職業において、育児時間が比較的長い傾向があることが示された。一方、管理的職業にある父親の育児時間は最も短く、事務・営業系、専門・技術系の育児時間も比較的短い傾向が見られた。なぜこのような結果になったのかについて、さらなる分析と解釈が必要だろう。

父親の残業時間が長いほど、本人の育児時間が短くなることも示された。この結果は、家事時間と同様な結果である。父親の残業の程度が家族生活に影響を与ぼしていることが示される結果となった。

なお、以上取り上げた諸要因と母親の出産意欲との関係を見てみたが、明確な関連は今回の分析では見られなかった。

次に、父親の職業生活のより踏み込んだ状況と家事遂行、育児遂行との関連を見た。具体的には、父親の就業時間の柔軟性、上司および同僚の理解・支援、組織風土と父親の家事遂行、育児遂行、母親の出産意欲との関連を見た。分析の結果、父親の就業時間の柔軟性は父親の育児遂行と明確な関連を示さなかった。理論的には、父親が就業時間について自律性をもつほど、父親の育児参加は促進されるように考えられるが､今回の分析ではそのような関連性は見られなかった。今後もさらに分析を進めていきたい。

一方、上司および同僚の理解・支援は緩やかに父親の育児遂行と関連していた。特に、上司より同僚の理解・支援の方が父親の育児参加と関連しているのは興味深い結果と言える。

以上の要因に加え､父親の育児遂行と明確な関連が見られたのは父親の職場の組織風土である。長時間労働をよしとする組織風土が強いほど、家族支援制度の利用がキャリアの障壁となるような組織風土が強いほど、父親の育児時間が短いことが示された。近年、さまざまな家族支援制度が制度的には制定される中、現実にはあまり利用が進んでいない背景に、職場にある組織風土の問題が指摘されている。今回の結果は、父親の育児参加に父親が働く職場の組織風土という「障壁」があることを感じさせるものだった。この点についても、今後さらに分析を進めていきたい。

次に、父親の職場環境と母親の出産意欲の関連も見た。その結果、父親の職場において上司および同僚の理解・支援があるほど、家族支援制度の利用がキャリアの障壁となる組織風土が弱いほど、母親の出産意欲が高まる傾向が見られた。母親ではなく、父親の職場環境のありようが、

母親の出産意欲に何らかの影響を与えていることを示唆する結果自体、その因果プロセスの解明が課題になるものの、興味深いと言える。

最後に、母親の就業の現状と出産意欲との関連を見た。母親の就業形態に関しては6割の者が未就業であり、大勢を占める。育児休業の取得状況は約1割となっている。

母親の就業形態と出産意欲との関連を見たところ、パート・アルバイトにある母親の出産意欲が他の群に比べ低いこと、育児休業の取得状況との関連では、育児休業を取得している方がそうでない者より出産意欲が高いことが示された。女性における労働環境の変化が出産意欲にも影響しうること、育児休業の利用が次の子どもを生もうとするモチベーションにつながる可能性が示されたと言える。

全体を通して印象に残る点を言うなら、①父親の勤務状況は厳しい状態にあり、育児参加することは難しいこと、②父親の育児参加に向けては職場の理解と組織風土の改善が重要なポイントとなっていること、③母親の就業形態も本人の出産意欲と関連していること、などが挙げられる。

今回の分析はすべてクロス集計によるものである。多変量解析を含め、今回明らかになった諸点について今後さらに分析を進めていきたい。

（末盛慶）

第６章　父母と子どもの健康・救急外来の利用状況

１．父母のからだや心の状態

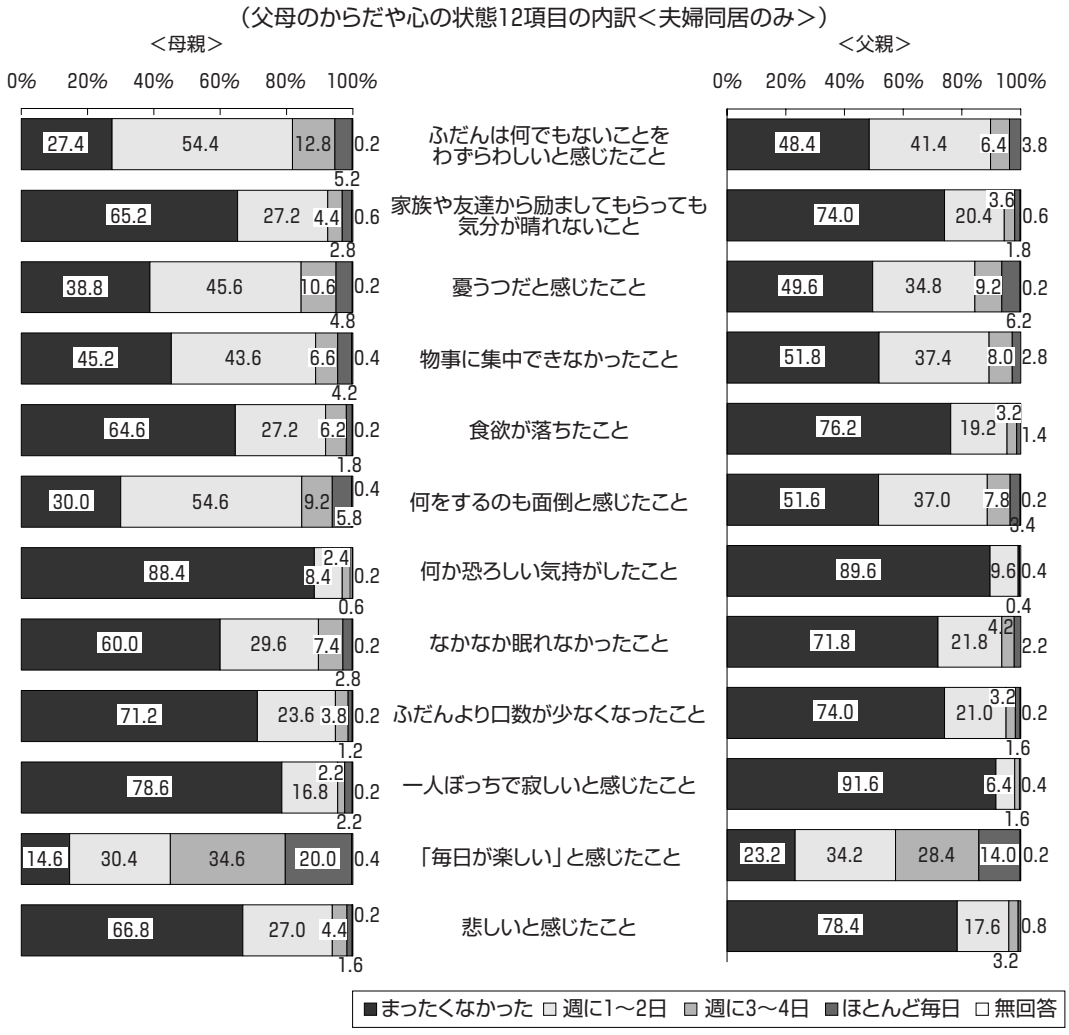
(1) 父母のからだや心の状態（夫婦同居のみ）

父母のからだや心の状態について、「ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じたこと」を含む全12項目についてたずねた。すべての項目について、からだや心の状態がよい場合を４点、悪い場合を１点として合計得点を算出し、からだと心の状態の得点とした。クロンバックの α 係数は、母親では0.852、父親では0.847と高く、得点として信頼性があることが確認された。

得点化の結果、父母別では、平均値は父親（41.9点）の方が母親（40.6点）よりやや高いが、特に差はみられない（図表６－１）。両者の相関係数は0.196となっており、関連はみられるが、相関係数は特に高くなく、からだや心の状態は父母で特に関連しているとはいえないようだ。

図表6−1　父母のからだや心の状態（夫婦同居のみ）

	度数	平均値	標準偏差
母親	494	40.6	5.389
父親	495	41.9	5.045



(2) 父母のからだや心の状態と属性（夫婦同居のみ）

父母のからだと心の状態の平均得点を、父母の属性別に比較した。

その結果、母親のからだと心の状態は、母親の就労形態、就労時間、年代などの属性、夫（父親）の就労時間（通勤時間を含む、平日12時間以上か未満か)、仕事の自由度（図表６－２の注を参照）で差はみられなかった（図表６－２)。

同様に、父親のからだと心の状態も、父親の就労時間、仕事の自由度などの就労形態、妻（母親）の就労形態、就労時間と関連はみられなかった。

図表6－2　父母の属性とからだや心の健康状態の平均得点（夫婦同居のみ）

母親のからだと心の状態、平均得点

		度数	平均値	標準偏差
母親の就労形態（産休・育休除く）	フルタイム	33	40.4	5.567
	パート・アルバイト	71	41.7	4.536
	無職	307	40.6	5.333
母親の就労時間	0時間	194	40.4	5.175
	1- 5時間	74	41.2	5.145
	6 -12時間	82	40.9	4.843
母親の年代	20代前半	12	39.5	6.948
	20代後半	82	40.0	5.922
	30代前半	227	41.3	4.804
	30代後半	143	40.1	5.795
	40代	30	39.6	5.056
父親の就労時間（通勤時間含む）	平日12時間以上	184	40.4	5.234
	平日12時間未満	286	40.8	5.394
父親の仕事の自由度	平均以上	267	40.7	5.304
	平均未満	223	40.5	5.465

父親のからだと心の状態、平均得点

		度数	平均値	標準偏差
父親の就労時間（通勤時間含む）	平日12時間以上	184	40.8	5.406
	平日12時間未満	287	42.5	4.807
父親の仕事の自由度（注）	平均以上	265	42.4	4.424
	平均未満	226	41.3	5.619
母親の就労形態（産休・育休除く）	フルタイム	34	42.0	3.689
	パート・アルバイト	72	41.8	5.221
	無職	308	42.1	4.857
母親の就労時間	0時間	192	41.6	5.586
	1- 5時間	73	41.4	5.268
	6 -12時間	82	42.0	4.640

注：父親の仕事の自由度とは、「自分に都合の良い時間帯で仕事ができる」「私は仕事のスケジュールを自由に調整できる」「私の仕事に関する時間配分は私に任されている」「私は自由に、仕事をしたり、離れたりすることができる」「仕事のやり方は私に任せられている」「職場での仕事の進め方に関して、私は口を出すことができる」「仕事のやり方は、私は自分で選ぶことができる」の７項目について、それぞれ「当てはまる」から「ほとんど当てはまらない」の４段階で回答を得たものを、１点から４点に得点化し、合計得点を自由度得点としている。仕事の自由度が高い方が得点は高い。

(3) 父母のからだや心の状態と生活満足度（夫婦同居のみ、別居、離別・死別を除く）

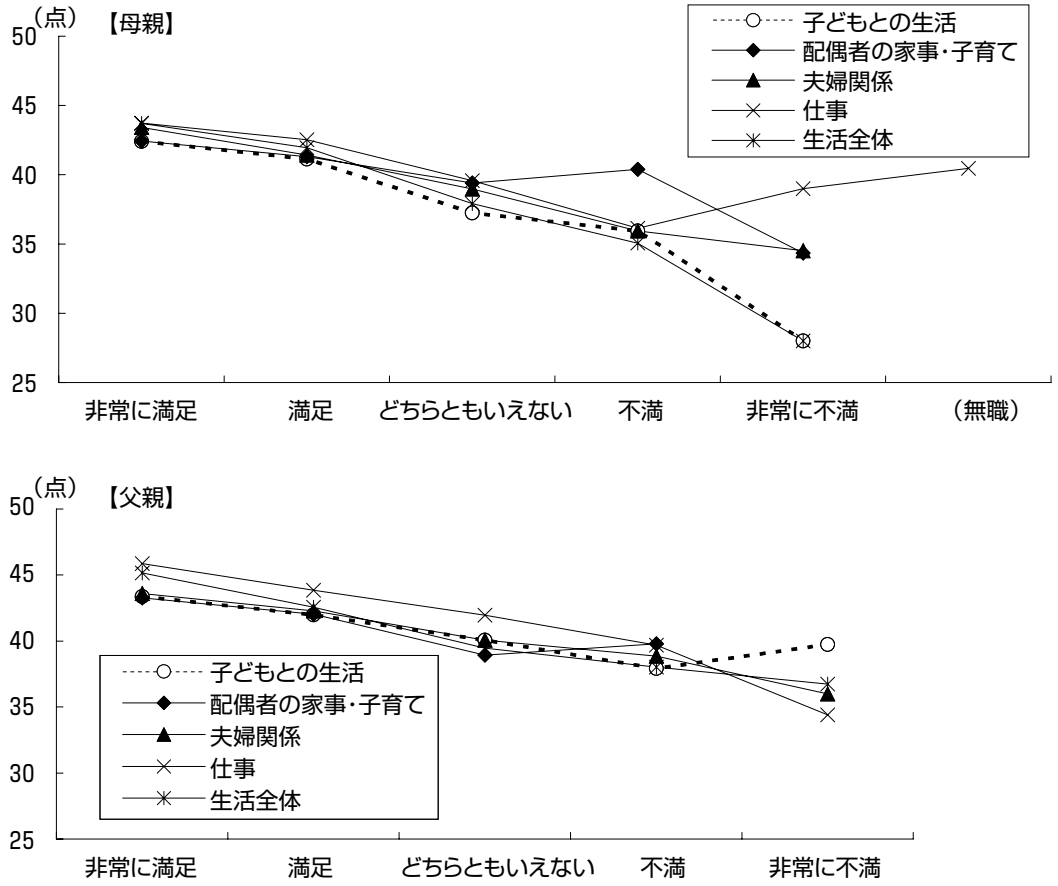
父母のからだや心の健康状態と生活満足度の関連をみたものが、図表６－３である。父母ともに、生活満足度が高い場合に、からだや心の状態もよい傾向にある。

母親では、子どもとの生活と生活全体の満足度の回答で、からだや心の健康状態の平均得点はほぼ同じ値となっている。また、両者の関係は、満足度が高いほど、からだや心の健康状態の平均得点も高く、満足度が低いとからだや心の健康状態の平均得点は低く、その差が、母親自身の中で最も顕著であるだけでなく、父親にはみられない差がある。子どもとの生活が満足のいくも

のであることが、母親のからだや心の健康状態にとって重要であり、それが生活全体の満足度やからだや心の健康状態とも関連しているのではないかと考えられる。

それに対し、父親では、生活満足度が非常に満足な場合と、非常に不満と回答した場合で、からだや心の健康状態の平均得点に最も差がみられたのは、仕事の満足度であり、仕事の満足度がからだや心の健康状態に与える影響が最も大きいようだ。

図表6−3　父母の生活満足度とからだや心の健康状態の平均得点（夫婦同居のみ）

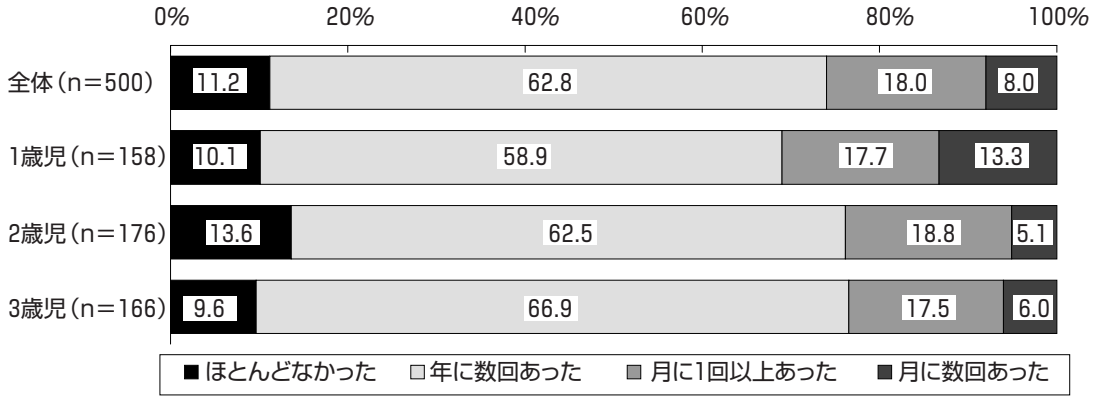


２．子どもの健康とかかりつけ医

(1) 過去１年間の病気

子どもが過去１年間に病気になった回数をたずねたところ、最も回答が多いのは、「年に数回あった」（62.8%）、次いで「月に１回以上あった」（18.0%）、「ほとんどなかった」（11.2%）、「月に数回あった」（8.0%）の順となっている（図表６－４）。年齢別では、１歳の場合は「月に数回あった」が13.3%と、やや高い傾向にある。

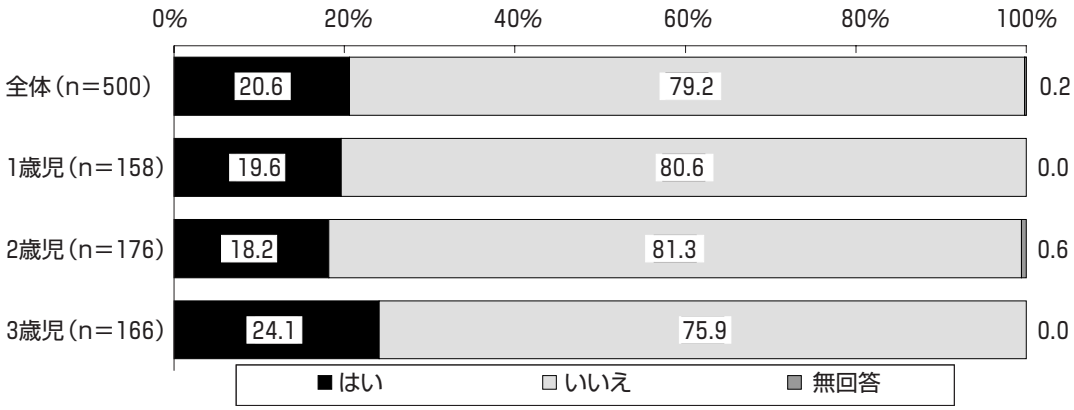
図表6−4　過去1年間に、病気（風邪や発熱を含む）やけがで医療機関（救急外来を除く）を利用した回数（年齢別）



（2）持病や大病、過去１年間の入院

今回の調査対象者のうち、持病がある割合は20.6%となっている（図表６－５）。１歳児では19.6%、２歳児で18.2%と２割に満たないが、３歳児では24.1%とやや高い。

図表6−5　持病（アレルギー（アトピーや喘息を含む））の有無（年齢別）



過去１年間に、入院や手術を要するなど重症となったことが１回以上あった子どもは、12.8%となっている（図表６－６）。年齢別では、重症になった回数が「０」回、つまり過去１年間に重症にならなかった割合は、年齢が低いほど微減しているが、特に差はみられない。

図表6−6　過去1年間に重症となった回数（年齢別）

（%）

	0回	1回	2回	3回	4回	無回答
全体（n＝500）	86.6	9.8	2.0	0.6	0.4	0.6
１歳児（n＝158）	84.2	11.4	3.2	0.6	0.0	0.6
２歳児（n＝176）	85.8	10.8	2.3	0.0	0.6	0.6
３歳児（n＝166）	89.8	7.2	0.6	1.2	0.6	0.6

これまでに、長期入院をするような大病を経験した割合は3.8%となっている。年齢別では、1歳児（3.2%）、2歳児（4.5%）、3歳児（3.6%）となっており、特に差はみられない（図表6－7）。

図表6−7　これまで、長期入院をするような大病の経験の有無（年齢別）

（%）

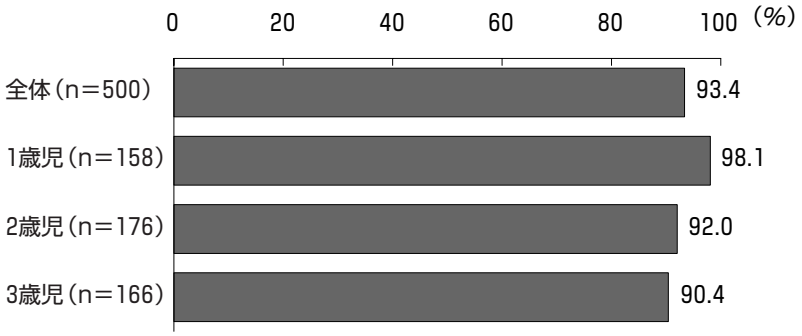
	あった	なかった
全体（n＝500）	3.8	96.2
1歳児（n＝158）	3.2	96.8
2歳児（n＝176）	4.5	95.5
3歳児（n＝166）	3.6	96.4

(3) かかりつけ医の有無

かかりつけ医があると回答した割合は93.4%と高く、これまでの調査結果[1]とほぼ等しい結果となっている。

ただし、年齢別でみると、かかりつけ医がいる割合は、1歳児では98.1%であるのに対し、2歳児では92.0%、3歳児では90.4%と、年齢が低いほどかかりつけ医の保有率は高い（P<0.01）（図表6－8）。

図表6−8　かかりつけ医の有無（年齢別）



(4) かかりつけ医の平日夜間・休日診察の可否

かかりつけ医の平日夜間、休日診察の可否についてたずねたところ、「いつでも診察を受けることができる」と回答した割合は7.7%と1割に満たない（図表6－9）。「場合によっては診察を受けることができる」と答えた割合（18.4%）を加えても、診察ができると回答した割合は26.1%と、約4人に1人に過ぎない。最も回答が多かったのは、「診察を受けることはできない」で、52.0%と半数を占め、「診察を受けられるかどうかわからない」が21.8%となっている。

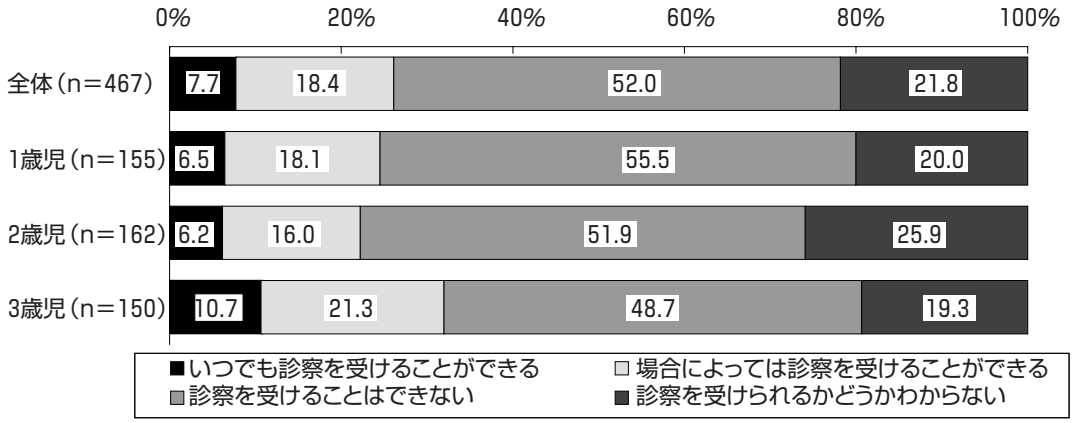
かかりつけ医であっても、平日夜間や休日に利用することを想定していない層が約2割存在しており、既存調査[2]と同様の結果となっている。年齢別では、「診察を受けられるかどうかわから

[1] 第一生命経済研究所，2007，『子どもの生活に関するアンケート調査　報告書』など

[2] 下開千春，2004，「乳幼児を持つ保護者の救急医療への備え」『LDIレポート』2004年11月，p16－23.

ない」と答えた割合は 2 歳児（25.9%）で最も高い。

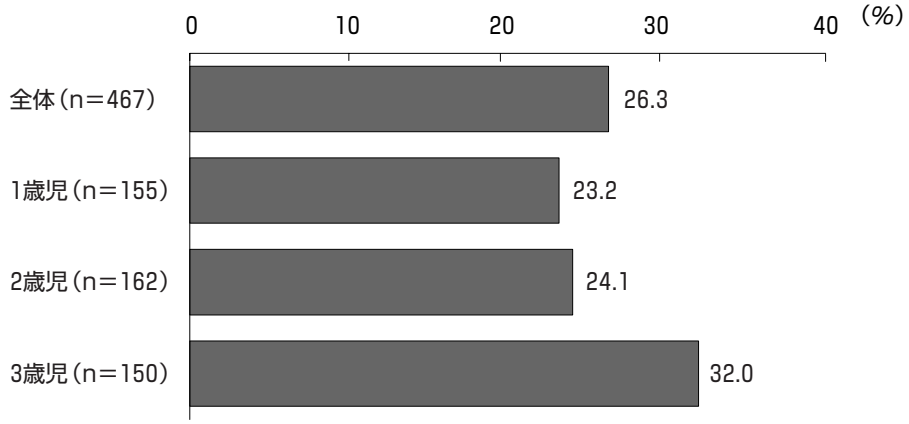
図表6−9　かかりつけ医の有無と夜間・休日の診察（年齢別）



(5) かかりつけ医での平日夜間、休日の診察経験の有無

かかりつけ医で平日夜間、休日の診察を受けた経験があると回答した割合は26.3%で、約 4 人に 1 人が回答している（図表 6 −10）。

図表6−10　かかりつけ医での平日夜間、休日の診察経験



(6) かかりつけ医と救急対応

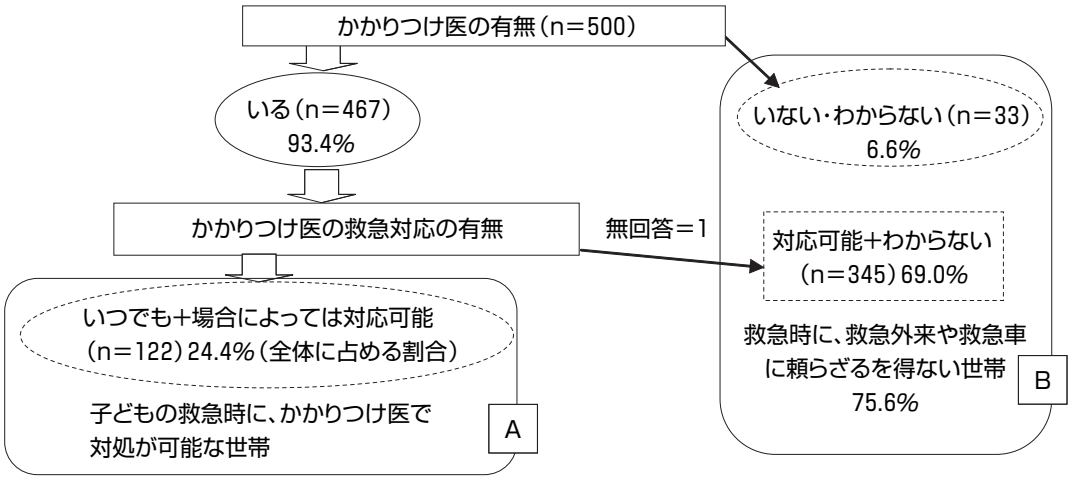
かかりつけ医の有無と時間外診療の不可についてみてきた。その結果から、かかりつけ医と救急対応の状況をとりまとめると、図表 6 −11のようになる。

子どもの救急時に、かかりつけ医で対処が可能な世帯（A）は24.4%で、約 4 人に 1 人である。これに対し、かかりつけ医がいないまたは、かかりつけ医がいても、救急時には救急外来や救急車に頼らざるを得ない世帯の合計（B）は75.6%と、後者が大半を占めている。

現在、全国的に、医療機関の小規模化（クリニックなど入院施設をもたない医療機関の増加）や小児科医の不足などにより、救急外来の利用増が問題となっている。そのような中、今回の調査結果からも、現状としては、かかりつけ医は時間内診療が中心であり、時間外には大半がかか

りつけ医ではない救急外来の利用に頼らざるを得ない状況にあることがうかがえる。

図表6−11　かかりつけ医と救急対応



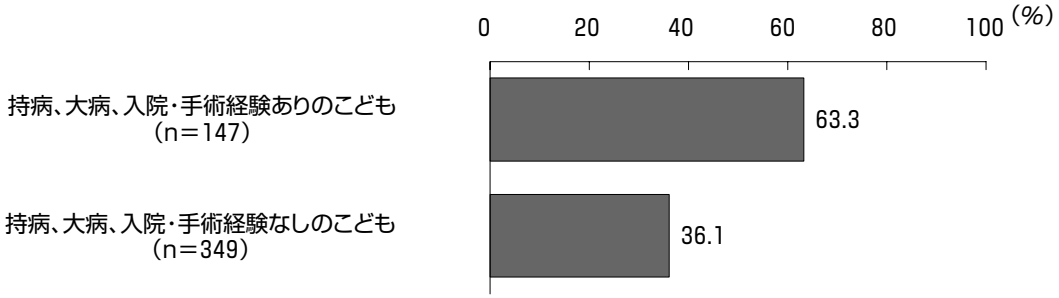
3．子どもの救急外来の利用

（1）子どもの救急外来利用の状況

今回の調査対象者のうち、過去１年間に入院や手術をしたことがあった子どもは12.8%、持病がある割合は20.6%、大病の経験がある割合は3.8%となっている。これら特別に病気の経験を持つ子ども147名と、これらの子どもを除外した子ども349名別に、過去１年間の救急外来の利用状況をみてみたい。

過去１年間に、子どもの救急外来の利用があったと答えた割合は、持病や大病・入院・手術経験ありの子どもでは63.3%であったが、非該当の子どもでは36.1%となっている。このように、持病や大病・入院・手術経験の有無によって、大きく救急外来の利用度は異なっている。持病等や大病の経験がなくても、４割近くの子どもが救急外来を利用している（図表６－12）。

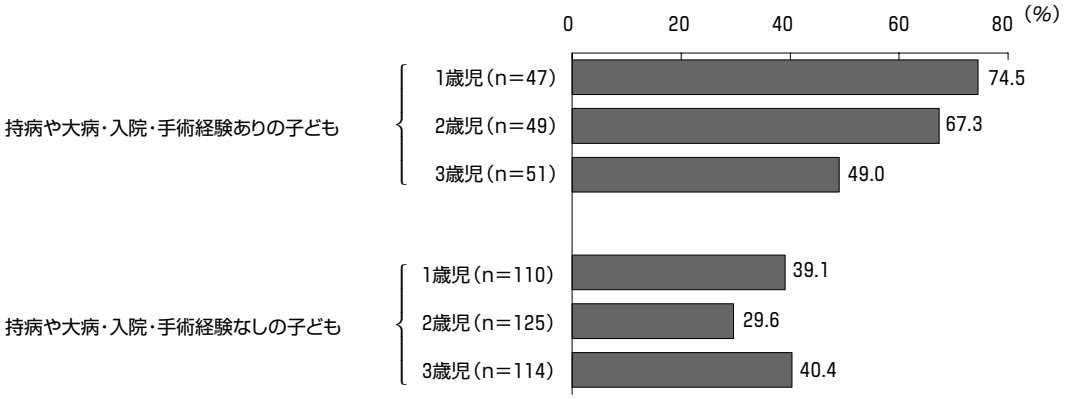
図表6−12　過去1年間の救急外来の利用（持病、大病・入院・手術経験の有無別）



救急外来の利用を年齢別にみると、持病や大病・入院・手術経験ありの子どもでは、１歳児で74.5%、２歳児で67.3%と多くの子どもが救急外来を利用している（図表６－13）。これに対し、

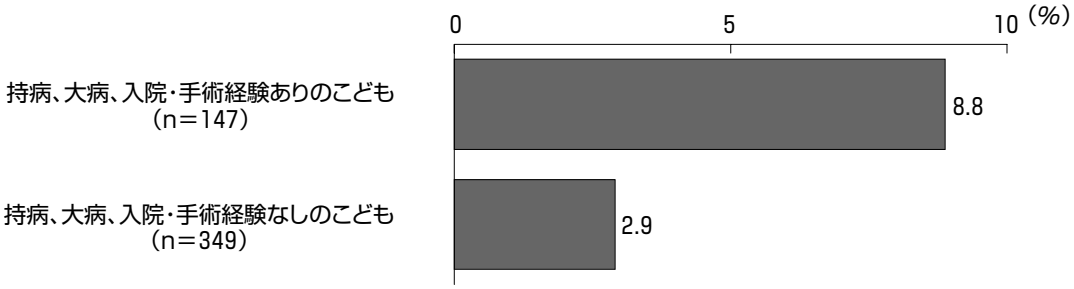
非該当の子どもでは、1歳児（39.1%）と3歳児（40.4%）で約4割の利用がみられる。2歳児では29.6%とやや利用割合は低い傾向にある。

図表6−13　過去1年間の救急外来の利用（持病、大病・入院・手術経験の有無別・年齢別）



一方、過去1年間に救急車を利用した割合は持病や大病・入院・手術経験ありの子どもでは8.8%であったが、非該当の子どもでは2.9%となっている（図表6 −14）。救急外来の利用のうち、救急車の利用によるかけつけは、持病や大病・入院・手術経験ありの子どもでは12.9%であったのに対し、非該当の子どもでは7.9%で、自家用車などでの救急外来へのかけつけが大半を占めている（図表省略）。

図表6−14　過去1年間の救急車の利用（持病、大病・入院・手術経験の有無別）



(2) 子どもの救急外来の利用の各要因

1）育児ネットワーク

＜子育てを支えてくれる人＞

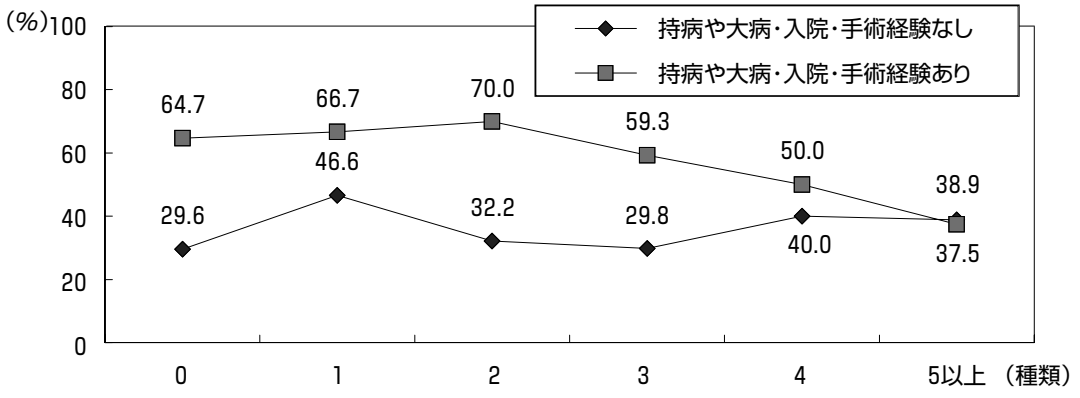
持病、大病・入院・手術経験の有無別に、育児ネットワークと救急外来の利用状況について、その関連をみた。育児ネットワーク「外出中に、子どもの世話をしてくれる」（以下、育児ネットワーク①）の人数と救急外来の利用割合を示したものが図表6 −15である。「育児の相談にのってくれる人」については、育児ネットワーク②として同様に図表6 −16に示した。

「外出中に、子どもの世話をしてくれる」人で、あなたの親、配偶者の親、兄弟姉妹、その他の親戚、近隣の人、友人の6つに該当する人がいる場合には○を選択してもらい、その合計の種類数を育児ネットワーク①としている。その結果、持病や大病・入院・手術経験がある子どもで

は、ネットワークがある方が、救急外来の利用割合が低く、ネットワーク①が0種類～2種類の人では、いずれも約7割が過去1年間に救急外来を利用している。これに対し、持病や大病・入院・手術経験がない子どもでは、ネットワーク①が1種類の場合に、過去1年間に救急外来を利用している割合が46.6%と最も高く、その他は、ネットワーク①の種類数によって救急外来の利用割合に、特に違いはみられない。

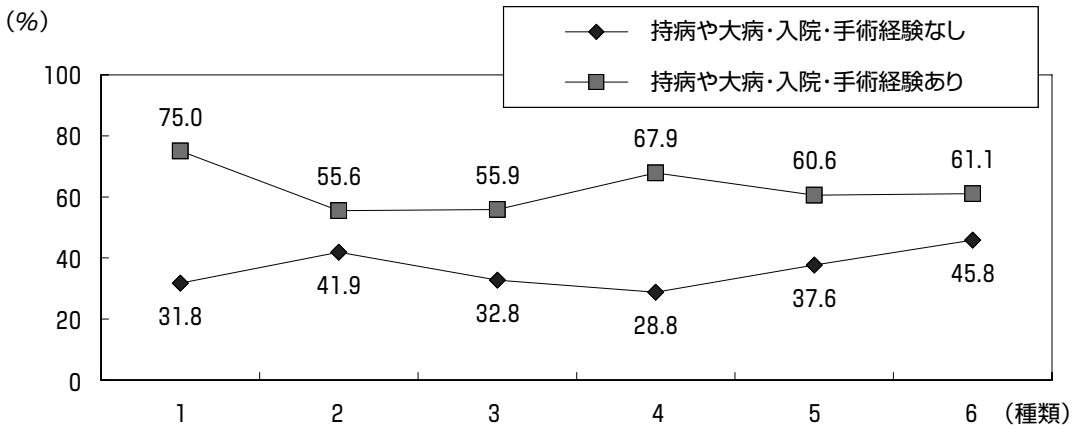
特に持病や大病・入院・手術経験がある子どもにとって、ネットワークがあることは、救急外来の利用とも関連しており、ネットワークが不足している人で、救急外来を頼る傾向にあるといえる。

図表6−15　育児ネットワーク①と救急外来の利用割合（持病、大病・入院・手術経験の有無別）



次に、育児ネットワーク②（「育児の相談にのってくれる人」）では、持病や大病・入院手術経験がある子どもで、ネットワークが1種類と少ない場合に75.0%が過去1年間に救急外来を利用している。育児ネットワーク②が2種類では、持病や大病・入院手術経験の有無にかかわらず、ネットワーク人数が増えるからといって、救急外来の利用割合が低下することはなく、むしろ持病や大病・入院手術経験がない場合に、ネットワークが4種類から6種類にかけて、救急外来の利用は高くなる傾向がみられる。

図表6−16　育児ネットワーク②と救急外来の利用割合（持病、大病・入院・手術経験の有無別）



2）子育ての悩みと救急外来の利用

子育ての悩みとして11項目をたずねている。詳細については、第3章を参照されたい。ここで

は、子育ての悩みについて、「病気にかかりやすい」を除いた10項目について、悩みがあると回答した項目を合計し、その数値を子育ての悩み得点とし、救急外来の利用の有無別に平均得点を比較した。その結果、持病や大病・入院・手術経験がない子どもでは、救急外来の利用があった方は1.51点であったのに対し、救急外来の利用がなかった方は1.11点と子育ての悩みの項目がやや多い傾向にある（図表６－17）。

図表6−17　救急外来の利用と子育ての悩み得点（持病、大病・入院・手術経験の有無別）

		救急外来の利用	平均値	度数	標準偏差
持病や大病・入院・手術経験	あり	あった	1.58	93	1.499
		なかった	1.54	54	1.599
	なし	あった	1.51	126	1.527
		なかった	1.11	218	1.152

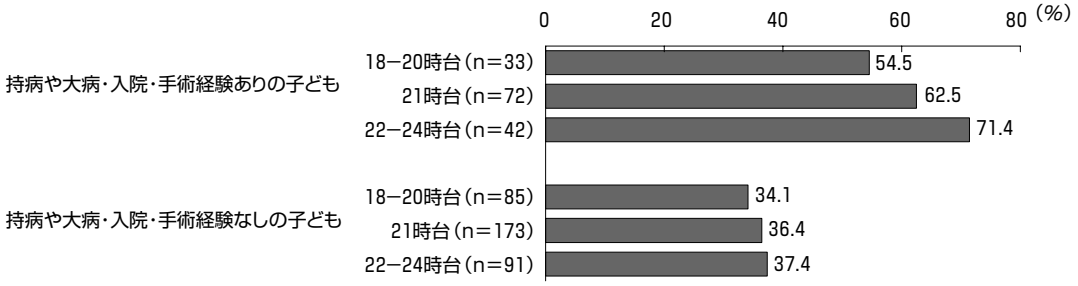
注：子育ての悩み得点は、11項目中、「病気にかかりやすい」を除いた10項目から作成した。

３）子どもの生活時間

子どもの生活時間の変化の中でも、就寝時間が遅くなっていることが、夜間の救急外来の利用に結びついているのではないか、といわれてきた。

そこで、子どもの就寝時間別に救急の利用の有無をみてみたが、持病や大病・入院・手術経験のない子どもでは、18～20時台、21時台、22～24時台の救急外来の利用は順に34.1%、36.4%、37.4%と特に差はない（図表６－18）。これに対し、持病や大病・入院・手術経験がある子どもでは、18～20時台（54.5%）、21時台（62.5%）、22～24時台（71.4%）と、就寝時間が遅いほど、過去１年間の救急外来の利用割合は高い。

図表6−18　子どもの就寝時間と救急外来の利用割合（持病、大病・入院・手術経験の有無別）



４）母親の就労・就業形態

＜母親の就労時間＞

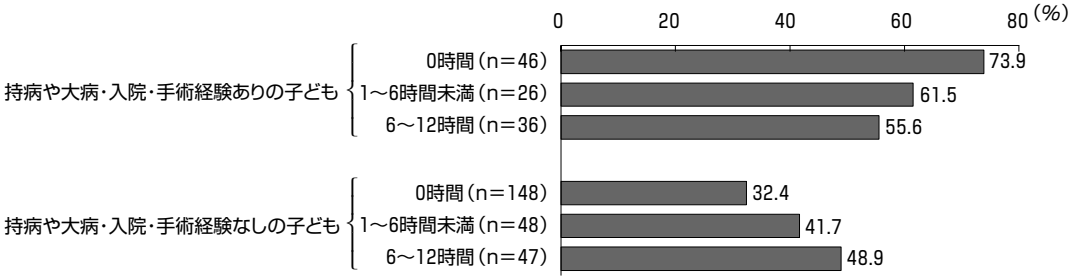
母親の就労時間の長さが救急利用につながっているのではないかと想定し、母親の就労時間別（無職の場合は０時間、平日の仕事時間を○時間○分で回答を得た）に過去１年間の救急医療の利用の有無をみてみた。

その結果、持病、大病・入院・手術経験がない子どもでは、母親の就労時間が長いほうが

(P<0.01、図表 6 －19)、救急外来の利用割合が高くなっている。母親の就労時間が長いことが、救急外来の利用と関連しているのではないかという仮説が裏づけられたことになる。

一方、持病、大病・入院・手術経験がある子どもでは、逆に、母親の就労時間が 0 時間で73.9%が救急外来を利用しているのに対し、 6 ～12時間では55.6%と低く、母親の就労時間が 0 時間の場合、つまり就業していない無職の母親の子どもで、救急外来の利用割合が高い。

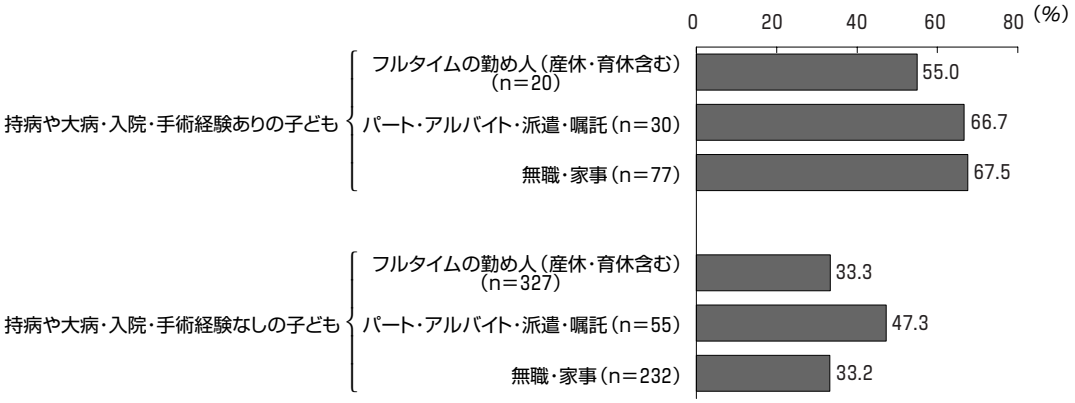
図表6－19　母親の仕事時間と救急外来の利用（持病、大病・入院・手術経験の有無別）



＜母親の就業形態＞

母親の就業形態別に救急外来の利用割合をみると、持病、大病・入院・手術経験がある子どもでは、無職・家事で利用割合は高く67.5%を占めている（図表 6 －20)。一方、持病、大病・入院・手術経験がない子どもでは、フルタイムの勤め人と無職・家事では、33.3%、33.2%と低いのに対し、パート・アルバイトでは47.3%と高い。

図表6－20　母親の就業形態と救急外来の利用（持病、大病・入院・手術経験の有無別）



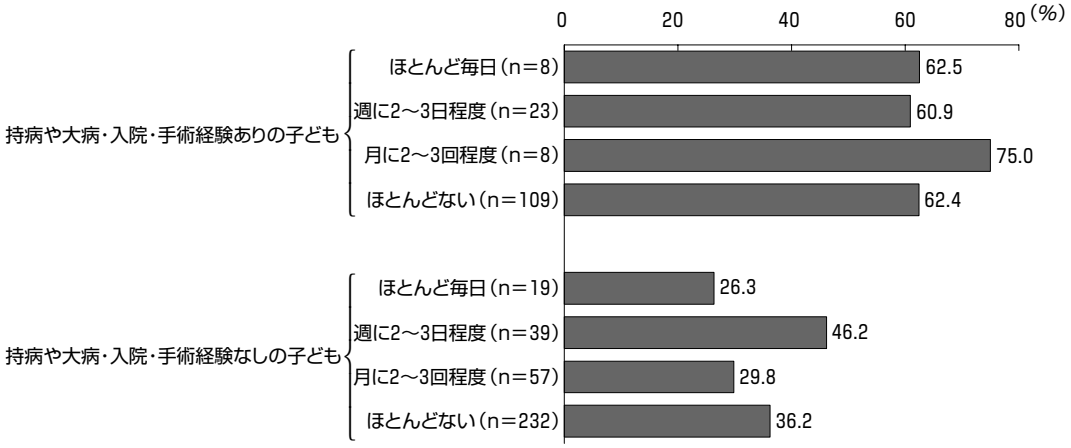
5）父親の就業

＜父親の夜間勤務＞

父親の夜間勤務別にみると、持病、大病・入院・手術経験がある子どもでは、「月に 2 ～ 3 回程度」で救急外来の利用があった割合が75.0%と特に高いが、全般的に父親の夜間勤務の頻度にかかわらず、救急外来の利用は 6 割以上と高い（図表 6 －21)。

一方、持病、大病・入院・手術経験がない子どもでは、父親の夜間勤務が「週に２～３日程度」の場合に46.2%が救急外来を利用している。これに対し、「ほとんど毎日」の場合には、逆に26.3%と少ない。ほとんど毎日が夜間勤務の場合には母親として対応がとりやすいが、「週に２～３日」と不規則な場合の方が、救急外来への依存が高くなりがちなのかもしれない。

図表6−21　父親の夜間勤務と救急外来の利用（持病、大病・入院・手術経験の有無別）



＜父親の仕事の自由度＞

父親の仕事の自由度について、「私は自由に都合の良い時間帯で仕事ができる」から「仕事のやり方は、私は自分で選ぶことができる」まで７項目についてたずねた。それぞれの回答について、自由度が高いと回答した場合を４点、低い場合を１点とし、合計得点を仕事の自由度得点とした。

父親の仕事の自由度得点を、子どもの救急外来の有無別にみると、持病、大病・入院・手術経験がない子どもで、救急外来を利用しなかった家庭では、父親の仕事の自由度の平均得点は高い傾向にある（図表６－22）。急病時などに対応がとりやすいなど、仕事の自由度が高く働けることが重要といえる。

図表6−22　過去1年間の救急外来の利用（持病、大病・入院・手術経験の有無別）別

父親の仕事自由度の平均得点

持病、大病・入院・手術経験	救急外来の利用	平均値	度数	標準偏差
あり	なかった	16.5	54	5.397
	あった	16.3	92	5.212
なし	なかった	17.4	223	5.377
	あった	15.9	123	5.158

(3) 子どもの救急外来の利用の要因分析

子どもが持病、過去１年間の入院、手術などの重症、長期入院などの大病の経験のない子ども

のみを分析対象とし、救急外来の利用要因を分析した。

救急外来の利用の有無（ダミー変数）を目的変数とし、子どもの年齢（末子、ダミー変数）、母親の就労形態と労働時間の組み合わせ（就労形態別に平均労働時間で分割、フルタイム８時間未満、フルタイム８時間以上、パート･アルバイト６時間未満、パート・アルバイト時間以上）、子育ての悩み得点（平均1.25点より高いか低いか）、父親の仕事の自由度（平均16.90点より高いか低いか）を説明変数としてロジスティック回帰分析を行った。

回帰分析の結果、救急外来の利用は、パート･アルバイトで６時間以上の場合、父親の仕事自由度が低いほど、母親の子育て悩み得点が高いほど、救急外来の利用が多くなっている（図表６－23）。母親の就労形態と労働時間の組み合わせでは、フルタイムでは８時間以上と平均以上でも有意となっておらず、パート･アルバイト６時間以上で有意となっていることから、就労の時間が長いことに加えて、働き方も救急外来の利用と関連しているといえる。父親の仕事の自由度が低い場合には、家族や子どもの急な病気などに対応できないことが、救急外来の利用につながっているのではないかと考えられる。

図表6−23　救急外来の利用を規定する要因のロジット分析結果（オッズ比）

	救急外来の利用
末子年齢	1.012
母親労働時間　無職（RG）	
フルタイム８時間未満ダミー	0.566
フルタイム８時間以上ダミー	1.191
パート・アルバイト６時間未満ダミー	1.380
パート・アルバイト６時間以上ダミー	2.850 ＊
子育て悩み得点（平均以上ダミー）	1.824 ＊
父親仕事自由度（平均以上ダミー）	0.605 ＊
－２対数尤度	366.2
χ２	13.2 ＋
有功ケース数	291

注１：分析対象は、子どもが持病、過去1年間の入院、手術などの重症、長期入院などの大病の経験のない場合のみ
注２：子育ての悩み得点は、11項目中、「病気にかかりやすい」を除いた10項目から作成

４．まとめ

父母のからだや心の状態は、父母で特に差はない。父母ともに、母親の就労形態や就労時間、父親の就労時間、仕事の自由度による差もみられない。属性による差はみられないが、父母ともに、生活満足度が高い場合に、からだや心の状態もよくなっている。特に、母親では、子どもとの生活や生活全体が満足度が高いことが、からだや心の健康状態にとって重要であることがわかった。一方、父親では、からだや心の健康状態の平均得点と関連が最もみられたのは仕事の満足度であり、仕事の満足度とからだや心の健康状態の関連が大きいようだ。

次に、子どもの健康については、子どもの年齢にかかわらず、１歳児から３歳児では年に数回の医療機関の利用が６～７割を占めていた。月に１回以上あった子どもはいずれの年齢でも２割近い。持病を持つ子どもはいずれの年齢でも約２割を占め、既存の調査結果と特に差はみられない。ただし、年齢が高まるほど、その割合は高い。

子どものかかりつけ医を保有している保護者は約 9 割と大半を占めているが、かかりつけ医の半数以上が平日夜間や休日の時間外診療を受けることはできず、子どもの救急にもかかりつけ医で対処が可能な世帯は約 4 人に 1 人と少ない。したがって、約 4 人に 3 人がいざというときにかかりつけ医を頼れないため、救急外来や救急車を要する状況にある。

過去 1 年間に救急外来を利用した割合は、 4 割以上を占めた。現状として、小児救急に対応できる小児科医、医療機関が不足している。かかりつけ医が対応できない時間外診療は、救急外来に集中せざるをえない状況にある。ただし、この割合は、持病や大病・入院・手術経験の有無によって大きく異なっていた。持病や大病･入院・手術経験のある子どもでは 6 割以上が救急外来を利用していたが、そうでない子どもでは 4 割未満にとどまっている。したがって、現在、救急外来のコンビニ化が問題視されているが、子どもの健康状況によって利用状況には差があり、現実として提供される救急外来の医療が減少している中、一概に保護者の利用の仕方を責めることはできないだろう。ただし、持病や大病･入院・手術経験のない子どもであっても、 4 割弱が過去 1 年間に救急外来を利用しており、この数値は決して低くはない。

そこで、これまで救急外来の利用の増加や依存の原因としてあげられてきた、母親の就労、母親の子育ての悩み、核家族化による育児ネットワークの減少、生活時間の夜間化、父親の就労や不在について、これらが救急外来の利用と実際に関連しているのか具体的に調査を実施した。具体的には、持病や大病・入院・手術経験のない子どもについて、どのような環境や状況が、救急外来の利用とかかわっているのか、母親の就労や子育ての悩み、育児ネットワーク、子どもの生活時間、父親の就労状況別に探った。

まず、母親の就労時間と救急外来の利用の関係は、確かに母親の平日の就労時間が 6 ～12時間で救急外来の利用割合が48.9%と高くなっていた。しかし、就業形態別でみると、救急外来の利用が多かったのはフルタイムの母親よりも、パート・アルバイト・派遣・嘱託の場合で47.3%と高い。このことから、就業形態と時間の組み合わせによって、救急外来の利用に違いがあるのではないかと考えられる。

次に、救急外来の利用があった母親では、利用がなかった母親に比べて子育ての悩みを多く抱えていた。救急外来の利用の有無の実態でみる限り、子育ての悩みが多いことは、救急外来の利用に結びついており、子育ての悩みを解消することは、救急外来の利用を軽減するのではないかと考えられる。さらに、子どもが持病や大病・入院・手術経験がある子どもに限ってみると、外出中に子どもの世話をしてくれる子育てネットワークの種類が少ない場合に救急外来の利用が多くなっていた。

子どもの就寝時間が遅くなっていることが救急外来の利用につながっているのではないかという仮説については、今回の調査では、子どもの就寝時間別に救急外来の利用頻度に差はみられなかった。

父親調査とのマッチングから、父親の仕事の自由度が平均よりも低い場合に救急外来の利用が多くなっていた。したがって、子どもの救急時に父親が何らか協力できる状況にあるか否かが、救急外来の利用の要因のひとつとなっているのではないかと推測される。

以上から、小児医療という資源が限られている中、中でも情勢が厳しい救急外来を有効に活用するためには、母親や父親の就労の仕方、母親の子育ての悩みへの支援、子どもの健康に心配の

高い保護者への支援の充実が必要といえる。

（下開千春）

第７章　総括

本調査では、１～３歳の子どもをもつ父母を対象にアンケートを実施して、日常生活、育児を支えるネットワーク、労働環境、子育て支援の利用状況等を調べた。本章では、本調査から得られた主要な結果を整理した上で、１～３歳の子どもをもつ家庭の育児の現状と問題点を述べる。

１．親子の日常生活と子どもの発達

現在、子どもの生活については、生活のリズム、食生活、遊びなどのさまざまな面について「みだれ」が指摘されている。例えば、子どもの就寝時刻は遅くなり、リズムも不規則であるといわれる。食生活についてみれば、乳児の卒乳が遅延化していることや、遊び食べや食べるものと量にむらがあるといわれる。こうした食生活や生活リズムなどの乱れが、子どもの発達に負の影響をもたらすことが懸念されている。本調査では、その現状を調べた。

その結果、平日の子どもたちの生活リズムは「決まっている」または「おおよそ決まっている」と答えた人をあわせると96%であった。朝は７時過ぎごろに起き、30分ほどして朝食を食べる。12時ごろに昼食をとり、１時半ごろに昼寝をし、３時ごろに起きる。夕食は６時半ごろにとって９時半よりも前には就寝する。これが本調査の平均的な子どもの生活である。この結果からは、子どもたちの生活リズムは規則正しく、乱れているような様子はみられなかった。共働き世帯においてもこれは同様であった。母親たちの食事の悩みからは、食のしつけの面で日々悩まされている様子がみられたが、これらは食生活の変調というよりも母親たちが日々食事の場面で子どもの健康を守る食事をさせ、子どもに基本的なマナーを身につけようとしていることであるとみられる。

子どもの遊び、話、生活面から発達をみると、どの年齢においても保育園に通う子どもの発達度が高かった。一例をあげれば、２歳から３歳にかけて子どもができる割合が急速に増えるのが、「昼間のオムツをせずにすごす」という項目であるが、これは保育園に入所しているかどうかで明確な差がある。親と保育士で子どもへの対応のしかたには相違があるし、園には恒常的に複数の大人や子どもと接する環境が整っている。その結果が子どもの発達によい影響を与えている可能性が示唆された。

２．父母の子育ての悩み

現在、親の育児の不安や悩みが多いことが指摘されている。特に小さな子どもを育てる親において、そうした悩みは多いとみられている。

本調査において子育ての悩みを尋ねたところ、父母とも、「いうことをきかない」「職が食が細い・偏食・過食である」という悩みが多くあげられた。これらに次いで、母親では「子どもを叱りすぎる」「着替えや歯磨きなど身の回りの世話が大変」など、父親では「子どもと十分接することができない」「夜更かしなど、子どもの生活リズムが不規則」という悩みがあげれれた。

父母とも子どもの年齢があがるほど「いうことをきかない」「職が食が細い・偏食・過食であ

る」という悩みをあげた割合は高くなっていたいたが、特に1歳から2歳にかけて「いうことをきかない」という悩みをあげる割合は大幅に高まる。この結果から、子どもが1歳から2歳になる時期に、親の育児の負担は重くなっている様子がみられた。

3．育児を支えるネットワーク

育児は家族のみで行っているわけではない。本調査からは、家族が行う育児を、親族、非親族の幅広い人が育児を支えていることが見出された。特に愛知県の地域性を反映してか、母親方と父親方の双方の親族が、母親の外出中に子どもの世話や母親の育児の相談にかかわっていた。また、母親の相談相手としては、母親の親が最も多いが、それと同程度に友人が相談にのっている。本調査の対象者は、親族と非親族の豊富なネットワークに支えられて育児をしている。

ただし、平均的には育児を支えるネットワークが多いとはいえ、中にはそれがほとんどない者もいる。こうしたネットワークが少ないことは、父母の子育ての負荷を増し、悩みを多くする要因になる。本調査では、父母とも、子どもの世話をするあるいは相談にのる親族または非親族のネットワークの種類が少ないと子育ての悩みが多くなる傾向がみられた。このように、育児を支えるネットワークの種類が多いことが悩みを軽減する効果は、父親よりも母親において強くみられた。

4．子育て支援の利用

地域の子育て支援サービスの利用状況をみると、児童館、親子で遊ぶひろばなどの利用が大多数を占めており、一時保育やファミリーサポートセンターなどの利用は少なかった。

子育て支援サービスの利用者の多くは、「子どもが楽しそう」なことと、「子どもの遊びが広がった」と回答している。親同士の関係では、約6割以上の人が「友だちができた」、「親同士のつながりができた」、「子育ての悩みを言える」と回答している。家では経験できない広い空間で遊び、他の子どもたちとの交流などが見られることは、子どもの成長にとって意味のある施設（サービス）だと親が考えていることがわかる。

しかし、親自身の成長と利用の効果は定かではない。利用することで親同士の交流が持てた人が約6割いるが、残りの4割弱は子育て支援施設を利用しながらも、親同士の交流は十分持てず、職員との関わりも少なかった。利用している施設のスタッフとの関係も、半数以上が「相談にのってもらいたいと思うときに相談にのっもらえる雰囲気がある」とは感じていないなど、子育て支援の場では誰でも気楽に相談ができる訳ではないことが伺われた。

母親全員に希望する子育て支援サービスをたずねた設問では、「子どもの外遊び保育」「一日保育」「遊びの実習」「病児保育」「親の休憩室」などがあがっている。地域における子育て支援サービスは、子どもが支援施設の空間で遊べるというだけでなく、子どもの成長・発達を考慮したサービス内容（保育内容）の提供が求められている。

5．労働環境と育児

育児の現状を知るためには、子どもの世話等の育児の様子をみるだけではなく、親の労働環境およびそれと育児との関連をみる必要がある。本調査では、父母、特に父親の労働環境と育児の

関係を調べた。

調査対象者となった父親の85.6%はフルタイムの勤め人、11.4%は自営業（家族従業者を含む）であった。職種は、愛知県の特性を反映して、技能・労務・作業系が全体の約 3 分の 1 を占め、最も多かった。勤務状況をみると、勤務日数は 5 日が全体の半数強を占め、 3 分の 1 は週 6 日間勤務である。残業時間も 1 日 2 時間以上の者が全体の半分を超えていた。本調査からは、父親の長時間労働と仕事の負荷の重さがうかがわれた。

父親の残業時間が長いと、家事時間や育児時間が有意に短くなっており、長時間労働が育児に影響を及ぼしていることが見出された。また、長時間労働をよしとする組織風土が強いほど、家族支援制度の利用がキャリアの障壁となるような組織風土が強いほど、父親の育児時間が短いことが示された。さらに、長時間労働をよしとする組織風土は、母親の出産意欲を低下させることにつながっていた。

6．子どもの健康・救急外来の利用状況

過去 1 年間に子どもが病気になった回数をみると、「月に数回あった」（7.9%）、「月に 1 回以上あった」（17.0%）、「年に数回あった」（63.5%）、「ほとんどなかった」（11.6%）であった。 4 人に 1 人は毎月病気になっており、年齢別にみると 1 歳でその割合が若干高い。また、持病がある割合は、 1 歳児で19.3%、 2 歳児で18.7%であるが、 3 歳児では23.9%であった。

子どもの場合、急な発熱や体調の変化により夜間や休日にも医療機関を受診する機会も多い。調査対象の世帯のうち約 9 割には子どものかかりつけ医がいるものの、子どもの救急にもかかりつけ医で対処が可能な世帯は約 4 人に 1 人に過ぎないため、多くの者は救急外来や救急車を利用することになる。

この背景には、小児救急に対応できる小児科医、医療機関が不足していることもある。また、そうした医療の問題とは別に、子育ての悩みが多いことが、救急外来の利用を増やしていることが見出された。現在、軽度の症状でも救急外来を利用する者が増加しており、医療スタッフの負荷の増加とより重症の患者に対する医療が手薄になることが危惧されている。そうした中、親の子育ての悩みを解消する支援を行うことは、悩みを軽減するのみならず、過度の救急外来の利用を減らすことにつながる可能性があるといえる。

7．育児を支えるために

本調査から、 1 ～ 3 歳の子どもを抱えた父母は、子どもが「いうことをきかない」「食が細い・偏食・過食である」「子どもを叱りすぎる」などの悩みが多いことが見出された。こうした悩みをもつ父母は、子どもの年齢があがるにしたがって増加する。特に子どもが「いうことをきかない」ことについて悩む者は、 1 歳から 2 歳にかけて大幅に増える。ここにあげた悩みをもつ者が多く、かつ子どもの年齢と共にその割合が増加することは、親たちが子どもにしっかりと向き合い、世話をしていることの証である。ただし、こうした悩みが過度に高いことは、親の心身の健康を阻害することやひいては子どもの発達に負の影響を与えることが懸念される。調査結果をみると子どもの自我が強まる 2 歳ごろに親の悩みが急激に増加することから、特にこの時期の親が過度に悩みを背負い込まないように支えることが必要であろう。

調査結果をみると、この時期の親をサポートするためには、3つの支えが大切である。第一は、親族、友人、地域の人の支えあいである。代わりに子どもの世話をし、育児の相談にのる親族や友人らが親の周囲にいれば、母親の育児の負担は軽減し、育児で過度に悩むことも減る。わが国ではこうしたインフォーマルなサポートは弱くなっているが、今一度、こうした支えの大切さを見直す必要がある。

第二に、1～3歳児の多くは在宅で世話をされているが、そうした家庭が利用できる地域子育て支援サービスの充実が求められる。現在、子育て広場や一時保育、ファミリーサポートセンターなどが増設されつつあるが､本調査をみるとそれらの恩恵を受けている家庭は一部にとどまる。また、そうしたサービスの利用者による評価も芳しくはない。1～3歳児をかかえる親の心身の健康と子どもの発達を支えるために、地域子育て支援サービスの一層の充実が望まれる。

第三に、本分析からは、育児を支えるための父親の就労環境の改善が求められることがあげられる。本調査ではフルタイムで働く父親の1日の労働時間（仕事の合間の休憩時間を含む）は平均11.2時間、通勤時間は1.2時間で、合計は12.4時間にのぼる。父親が長時間労働であると、彼らの育児へのかかわりが少なくなり、母親の育児の負担が重くなる。また、社員の育児を支えようとする職場風土は、父親の育児への関わりを可能にするのみならず、その配偶者の出産意欲を高めていた。企業の第一の役割は営利を上げ、雇用を創ることであるが、深刻な少子化がすすみ社会で子育てを支えることが社会的課題になっている中にあっては、従業員が子育てしやすい就労環境づくりをすすめることが求められよう。

（松田茂樹）

《 調査票 》

調査票（お父様票）

子育てに関する意識調査

平成 19 年 6 月

支　局		地　点			対象番号		点検者

（調査企画）社団法人全国私立保育園連盟
保育・生活環境研究会
（調査実施）中央調査社

保護者の方へ

〔ご記入に際してのお願い〕

・本アンケートは、乳児（3歳以下）をもつお父様（もしくはお父様に準じる方）にお答えいただくものです。

・本アンケートは、無記名で回答するものです。ご回答いただきました内容については、厳重に管理し、研究以外の目的に使用することは一切ございません。

・調査結果は、「どのような意見の方が何％いる」というように統計数値として処理し、ご回答いただきました皆様に個人的にご迷惑をおかけすることはございませんので、ありのままお答えください。

・質問の番号の順番に従って、お答えください。ただし、質問によっては、一部の方だけにお伺いする質問もあります。各質問の指示（問９へ　など）に従ってお答えください。

・質問文の後には、（○は１つ）（○はいくつでも）（数字を記入）などの指示がありますので、この指示にもとづいてご記入ください。

・「その他」を回答された場合は、その他（　　）の括弧の中にはなるべく詳細に書いてください。

・調査票の右欄の⑪などの数字は集計上の記号です。お気になさらずお答えください。

ご回答いただきましたアンケート用紙は、回収用封筒に入れていただき、調査員にお渡しくださいますようお願いいたします。

【調査実施】中央調査社
担当：名古屋支社　合瀬
電話：052-231-4619
月～金 9:00～17:00

社団法人　中央調査社は財団法人　日本情報処理開発協会が推進する「プライバシーマーク」認定を受けております。皆様の個人情報やご協力いただきましたご意見は、個人情報保護方針に従い、情報管理を徹底いたします。

(8698)

はじめに、あなたのお子様全員の、性別や年齢などを次の表にご記入ください

⑧～⑩＝101

順番	性別（○は１つ）	満年齢（数字を記入）	現在、保育園・幼稚園に入所していますか（ぞれぞれ○は１つ）	
第１子	1. 男の子 2. 女の子	満 □□ 歳 □□ ヵ月	1. 保育園（一時保育除く） 2. 幼稚園 3. どちらにも通っていない	⑪～⑯
第２子	1. 男の子 2. 女の子	満 □□ 歳 □□ ヵ月	1. 保育園（一時保育除く） 2. 幼稚園 3. どちらにも通っていない	⑰～・
第３子	1. 男の子 2. 女の子	満 □□ 歳 □□ ヵ月	1. 保育園（一時保育除く） 2. 幼稚園 3. どちらにも通っていない	・～・
第４子	1. 男の子 2. 女の子	満 □□ 歳 □□ ヵ月	1. 保育園（一時保育除く） 2. 幼稚園 3. どちらにも通っていない	・～・
第５子	1. 男の子 2. 女の子	満 □□ 歳 □□ ヵ月	1. 保育園（一時保育除く） 2. 幼稚園 3. どちらにも通っていない	・～・

次に、あなたの１歳～３歳までのお子様についてうかがいます。該当するお子様が２人以上いる場合は、そのうち一番下のお子様についてうかがいます。

問１．最近１ヶ月、あなたは、そのお子様の子育てをどのくらいしましたか。実際にしたと思うおおよその日数に、１つだけ○をつけてください。（それぞれ○は１つ）

	ほぼ毎日	週４～５日程度	週２～３日程度	週１日程度	ほとんどなし	NA
a　子どものおむつを替える／トイレを手伝う	18.8	11.2	24.8	22.4	22.8	–
b　子どもの食事（ミルク含む）のしたくをする	6.6	2.8	11.2	15.2	63.8	0.4
c　子どもの食事（ミルク含む）を手伝って食べさせる	11.6	7.6	25.4	29.2	25.8	0.4
d　子どもの着替えをさせる	11.2	10.6	29.2	28.0	20.8	0.2
e　子どもと一緒にお風呂に入る	21.6	11.4	30.8	23.8	12.4	–
f　子どもの歯磨きをする	9.6	7.0	23.8	21.2	38.0	0.4
g　子どもを寝かしつける	9.8	5.6	22.4	19.0	42.8	0.4
h　育児用品を買いにいく	0.2	1.0	7.6	35.2	55.8	0.2
i　子どもに話しかけたり、話し相手をする	58.0	14.0	19.2	7.0	1.4	0.4
j　子どもに絵本を読み聞かせる	4.0	4.4	18.2	26.8	46.2	0.4
k　子どもと一緒に遊ぶ	32.8	12.6	34.8	17.4	2.2	0.2
l　子どもに言葉、数、文字などを教える	16.8	7.8	26.4	24.4	24.4	0.2

問２．そのお子様について、現在お悩みのことはありますか。（○はいくつでも）

22.8　いうことをきかない	5.6　言葉や心身の発達が遅い
6.6　着替えや歯磨きなど身の回りの世話が大変	8.4　（あなたが）子どもを叱りすぎる
12.0　夜更かしなど、子どもの生活リズムが不規則	2.4　（あなたが）子どもとの接し方がわからない
9.4　テレビやビデオを見すぎる	12.6　（あなたが）子どもと十分接することができない
4.6　病気にかかりやすい	2.6　その他（具体的に：　　）
19.0　食が細い・偏食・過食である	40.8　特にない

次に、あなた方ご夫婦のことについておうかがいします。

問３．あなたは、配偶者の方といっしょにお住まいですか。（○は１つ）

100
いっしょに住んでいる　　別居（単身赴任含む）　　配偶者はいない（死別、離別等）

（６ページ問９へ）

（問４～８は、問３で「１～２」と回答された方にお聞きします）

問４．夫婦間のコミュニケーションについておたずねします。（それぞれ○は１つ）

平日について	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	
a　子どものことはよく話しをする	62.6	30.2	5.6	1.6	–
b　いろいろな話題で話しがはずむ	34.2	45.8	17.4	2.4	0.2
c　配偶者（夫・妻）はわたしの心配ごとや悩みをきいてくれる	38.4	39.6	18.4	3.6	–
d　配偶者（夫・妻）はわたしの能力や努力を高く評価してくれる	33.8	42.8	18.0	5.2	0.2

問５．休日など時間があるときに、夫婦でよく一緒に行うこと（子どもと一緒も可）について、当てはまるものに○をつけてください。（○はいくつでも）

91.2　買い物に行く	48.6　家でＴＶやビデオを見る
71.6　子どもと遊ぶ	4.0　映画やコンサートに行く
59.8　戸外に遊びに行く	1.6　その他（具体的に：　　）
13.0　親の趣味を一緒に楽しむ	1.0　夫婦で一緒に行うことはない

問６．配偶者の子育てに対する関わりについて、どう感じていますか。（○はそれぞれ１つ）

	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	
a　子どもへの接し方がうまい	46.0	45.6	8.0	0.2	0.2
b　子どもの育て方に不満がある	1.4	14.8	46.6	37.2	–
c　子どもにもっと関わってほしい	1.2	7.0	30.8	61.0	–

問７．あなたが配偶者に対して今以上に期待したいことはありますか。いずれもあてはまらない場合は、「８．特にない」に○をつけてください。（○はいくつでも）

16.6	家事	13.6	あなたへの関心
11.2	育児	12.4	異性としての魅力
4.2	経済力	2.2	その他（具体的に：　　）
3.0	働き方	60.6	特にない

問８．配偶者（妻）に以下のようなことをどのくらい言われますか（○はそれぞれ１つ）

	週に3～4回以上	週に1～2回程度	月に1～2回程度	2ヶ月に1回以下	NA
a　早く帰ってきて欲しい	13.4	15.6	22.8	47.0	1.2
b　話しをもっと聞いて欲しい	8.8	16.4	24.2	49.6	1.0
c　家にいるときは子どもを見て欲しい	13.6	23.6	23.2	38.8	0.8
d　家事を手伝ってほしい	7.8	19.0	20.6	51.6	1.0

（次のページにお進みください）

次に、あなたご自身のお考えや意識についておうかがいします。

（全員の方に）

問９．次には家族に関するさまざまな意見があげられています。それぞれの意見について、あなたはどう思いますか。（それぞれ○は１つ）

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	NA
a　父親と母親は、おなじように育児をすべきだ	20.4	37.8	24.0	17.8	－
b　夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである	12.4	43.2	23.8	20.4	0.2
c　３歳になるまでは母親がそばにいてやることが、子どもの成長には必要だ	47.8	37.4	9.0	5.6	0.2
d　父親は、仕事よりも子育てを優先すべきだ	4.2	17.6	51.2	27.0	－
e　母親は、仕事よりも子育てを優先すべきだ	30.4	48.4	13.0	8.0	0.2

問 10．ご自分の生活をふりかえったとき、「仕事より家族が生活の中心を占めている」と思いますか。（○は１つ）

12.2	32.8	38.0	14.4	2.6
そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	NA

問 11．この１週間のあなたのからだや心の状態についてお聞きします。以下のような気分やことがらをどのくらい経験しましたか。それぞれあてはまる番号に○をつけてください。（それぞれ○は１つずつ）

⑧～⑩＝102

	まったくなかった	週に１～２日	週に３～４日	ほとんど毎日	NA
a　ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じたこと	48.4	41.4	6.4	3.8	－
b　家族や友達から励ましてもらっても気分が晴れないこと	74.0	20.4	3.6	1.8	0.2
c　憂うつだと感じたこと	49.6	34.8	9.2	6.2	0.2
d　物事に集中できなかったこと	51.8	37.4	8.0	2.8	－
e　食欲が落ちたこと	76.2	19.2	3.2	1.4	－
f　何をするのも面倒と感じたこと	51.6	37.0	7.8	3.4	0.2
g　何か恐ろしい気持がしたこと	89.6	9.6	0.4	0.4	－
h　なかなか眠れなかったこと	71.8	21.8	4.2	2.2	－
i　ふだんより口数が少なくなったこと	74.0	21.0	3.2	1.6	0.2
j　一人ぼっちで寂しいと感じたこと	91.6	6.4	1.6	0.4	－
k　「毎日が楽しい」と感じたこと	23.2	34.2	28.4	14.0	0.2
l　悲しいと感じたこと	78.4	17.6	3.2	0.8	－

問 12. あなたはいまのご自分の生活にどの程度満足していますか。(それぞれ○は１つ)

	非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満	該当しない	NA
a 子どもとの生活	31.0	46.8	15.8	4.8	1.6	−	−
b 配偶者の家事・子育て	29.0	54.0	15.0	2.0	−	−	−
c 夫婦関係	22.8	49.8	20.8	6.2	0.2	−	0.2
d 仕事	6.6	34.2	35.6	15.2	7.8	0.6	−
e 生活全体	13.2	57.2	22.6	6.2	0.8	−	−

次に、お仕事の状況についておうかがいします。

問 13. 現在のあなたのお仕事は次の働き方のうち、どれにあたりますか。(○は１つ)

85.6 フルタイムの勤め人（産休・育休中含む）
0.4 パート・アルバイト（産休・育休中含む）
0.8 派遣・嘱託
11.4 自営業・家族従業者
1.0 自由業・フリーランス
0.4 無職・家事 → (10 ページ問 28 へ)
0.2 その他（ ）
0.2NA

付問 13-1. 現在、育休中ですか。(○は１つ)
1.6 はい 90.5 いいえ 7.9NA
(問 14 へ)

(問 14～27 は、問 13 で「１～５、７」を回答した人にお聞きいたします) 以下、問 14～27 n=497

問 14. その仕事の種類は、大きく分けて次のどれにあたりますか。(○は１つだけ)

25.5 専門・技術系の職業 (医師、弁護士、教員、ｴﾝｼﾞﾆｱ、看護師、作家、ﾃﾞｻﾞｲﾅｰ、編集者など)
8.6 管理的職業 (課長相当以上の管理職、議員など)
20.8 事務・営業系の職業 (事務員、営業社員、銀行員、タイピスト、集金人など)
10.2 販売・サービス系の職業 (店主、店員、外交員、美容師、ｸﾘｰﾆﾝｸﾞ、給仕、接客、清掃、ﾍﾙﾊﾟｰなど)
34.7 技能,労務,作業系の職業−農林漁業職 (工場労働者、自衛官、警察官、職人、建設作業者、運転手など) (植木職、造園業を含む)
0.6 その他（具体的に： ）

問 15. 平均的に、１週間に何日その仕事をしていますか。(数字を記入)

週あたり 全体平均 5.4 日

問 16. 現在、土曜日あるいは日曜日に働くことがどのくらいありますか。(○は１つ)

26.6 毎週 23.1 隔週 22.5 月に１度程度 27.4 土日出勤はほとんどない 0.4 NA

問 17. 現在、夜間で働くことがどのくらいありますか。夜間とは午後 11 時以降とします。(○は１つ)

5.4 ほとんど毎日 12.5 週に２～３日程度 13.1 月に２～３回程度 69.0 ほとんどない

問 18. 現在、残業時間は一日あたりどのくらいありますか。(○は１つ)

28.0 ３時間以上 30.8 ２～３時間程度 21.5 １～２時間以内程度 19.7 １時間以内

問 19. 現在のお仕事の状況についておたずねします。次のそれぞれの問いについて、もっとも実態に近いと思う番号に○をつけてください。(それぞれ○は１つ)

	当てはまる	まあ当てはまる	あまり当てはまらない	ほとんど当てはまらない
a 自分に都合の良い時間帯で仕事ができる	10.9	24.1	26.8	38.2
b 私は仕事のスケジュールを自由に調整できる	9.7	28.4	26.0	36.0
c 私の仕事に関する時間配分は私に任されている	20.8	32.7	18.1	28.4
d 私は自由に、仕事をしたり、離れたりすることができる	9.5	19.1	31.4	40.0
e 仕事のやり方は私に任せられている	21.5	44.9	17.5	16.1
f 職場での仕事の進め方に関して、私は口を出すことができる	23.1	42.9	21.5	12.5
g 仕事のやり方は、私は自分で選ぶことができる	18.3	44.3	22.3	15.1

問 20. 社員の子育てに対する職場の理解についておたずねします。次の問いについて、もっとも実態に近いと思う番号に○をつけてください。(それぞれ○は１つ)

	当てはまる	まあ当てはまる	あまり当てはまらない	ほとんど当てはまらない
a 上司は私が家族のことを話すとき、聞いてくれる	21.4	46.5	20.4	11.7
b 上司は私が家族の中で役割を果たさなければならないことを理解している	17.1	46.4	24.3	12.2
c 上司は私の家族について理解がある	15.6	49.0	23.9	11.5
d 同僚は私が家族のことを話すとき、聞いてくれる	24.3	59.5	9.3	6.8
e 同僚は家族内では私が家族員の１人として責任を果たさなくてはならないことを理解している	21.1	56.0	13.8	9.1
f 同僚は私の家族について理解がある	17.8	54.8	18.2	9.3
g いまの職場には残業をするのが当然という雰囲気がある	37.4	26.4	24.2	12.0
h いまの職場では、帰宅後や週末も家で仕事をすることが期待されている	6.8	13.3	32.9	47.0
i いまの職場では家族やプライベートの生活より仕事を優先することが期待されている	13.8	26.5	42.2	17.5
j 育児休業を取得したり、育児を理由に有給休暇をとったら、いまの職場では快く思わない人がいる	24.9	28.5	28.9	17.7
k フレックスタイム制度を使っていない人は、使っている人に比べていまの職場では人事や上層部のうけがいい	9.0	13.9	33.0	44.1
l 家族の問題を理由に転勤を拒否したら、いまの職場では将来の昇進にひびく	17.6	23.0	27.1	32.3

問 21. お子さんが生まれて、あなたが職場でとった対応についておたずねします。次の問いについて、もっとも実態に近いと思う番号に○をつけてください。（それぞれ○は１つ）

		当てはまる	まあ当てはまる	あまり当てはまらない	ほとんど当てはまらない
a	育児と仕事の両立に関して、上司に相談している	3.5	13.8	30.2	52.5
b	育児と仕事の両立に関して、同僚に相談している	3.7	19.3	30.9	46.1
c	育児や仕事の両立に関して、人事部に相談している	1.2	3.3	24.7	70.7
d	育児と仕事を両立するために、職場の家族支援制度（育児休業制度・短時間勤務等）を利用している	1.0	3.7	13.8	81.4
e	子どもが生まれてから、以前より早く帰宅している	10.2	19.4	27.1	43.3
f	子どもが生まれてから、仕事量を減らしている	2.0	8.2	32.4	57.3
g	子どもが生まれてから、特に働き方は変わっていない	49.0	26.7	14.9	9.4

問 22. 仕事と家族のバランスについておたずねします。次の問いについて、もっとも実態に近いと思う番号に○をつけてください。（それぞれ○は１つ）

		当てはまる	まあ当てはまる	あまり当てはまらない	ほとんど当てはまらない
a	仕事が原因で家族との接触が十分とれないでいる	17.1	37.3	29.6	15.9
b	仕事が家族と過ごしたい時間を奪っている	19.5	34.8	31.6	14.1
c	仕事が忙しいために、家に帰ってもゆったり落ち着くことができない	15.1	31.6	36.4	16.9
d	家にいても仕事のことが気になってしかたがないことがしばしばある	9.7	32.2	36.6	21.5
e	仕事をする上で有効な考え方や態度は、私が良き親、良き配偶者であることには役に立たない	9.9	24.1	48.3	17.7
f	私の仕事を円滑に進める上で有効な考え方や態度は、家庭内の問題を解決する上ではあまり役に立たない	11.1	26.2	48.5	14.3

問 23. 家庭と仕事のバランスについておたずねします。次の問いについて、もっとも実態に近いと思う番号に○をつけてください。（それぞれ○は１つ）

		当てはまる	まあ当てはまる	あまり当てはまらない	ほとんど当てはまらない
a	家族のあれやこれやで思うように仕事に時間を配分できない	2.6	13.5	47.9	36.0
b	家族の状況が、いまの仕事の遂行の妨げになっている	1.0	4.2	43.1	51.7
c	家事や育児で疲れてしまい、仕事をやろうという気持ちになれない	0.4	4.0	37.3	58.3
d	家庭内の問題がストレスになって、本来こなせるはずの業務の量や質をこなせない	0.8	4.2	36.5	58.5
e	家庭において良き親であり、良き配偶者である上で適切な考え方や態度は、いまの仕事を遂行する上であまり役に立たない	6.7	15.3	47.2	30.8
f	家庭内での問題をうまく対処する上で適切な考え方や態度はいまの仕事を遂行する上ではあまり役に立たない	7.3	15.9	47.4	29.4

問 24. 現在の職場に対するあなたの見方をおたずねします。次の問いについて、もっとも実態に近いと思う番号に○をつけてください。（それぞれ○は１つ）

		当てはまる	まあ当てはまる	あまり当てはまらない	ほとんど当てはまらない
a	友人に自分の職場が素晴らしい所であると言える	9.1	32.9	42.3	15.7
b	他の職場ではなく現在の職場を選んで良かったと思う	14.3	44.2	29.6	11.9
c	私は現在の職場を気にいっている	13.9	48.2	26.6	11.3
d	いま、新しい仕事を探そうと思っている	8.5	10.5	31.5	49.5
e	私は現在の仕事を辞めたいと思っている	7.3	13.9	32.3	46.6
f	いまの仕事を辞めたいが、就職先がないので辞められない	9.7	16.3	21.6	52.4

問 25. これまでに転職の経験はありますか。転職の経験がない場合は「４」に○をつけてください。（○は１つ）

21.1　１回　　11.9　２回　　15.5　３回以上　　51.5　転職をしたことはない

問 26. 現在、副職をお持ちですか。（○は１つ）

3.0　持っている　　97.0　持っていない

問 27. 過去に、副職を持ったことはありますか。（○は１つ）

11.1　持ったことがある　　88.9　持ったことはない

（全員の方に）　　⑧～⑩＝103

問28. あなたのふだんの平日の過ごし方についてお聞きします。それぞれの行動にかけている時間はおよそどのくらいですか（**合計で24時間になるように、10分単位でご記入ください**）。

		全体平均						
1.	自分のケア（すいみん、食事、入浴など）	8	時間	04	分	⑪～⑬
2.	仕事（収入をともなう行動、仕事合間の休憩時間含む）	11	時間	03	分	⑭～⑯
3.	家事（炊事、洗濯、掃除、買い物、介護など）	0	時間	21	分	⑰～⑲
4.	育児（子どもの世話）	1	時間	00	分	⑳～・
5.	（4歳以上の）子どもや同居している家族との交流	0	時間	54	分	・～・
6.	自由時間（趣味、娯楽、交際、学習など）	1	時間	22	分	・～・
7.	移動（通勤・通学や買い物への移動など）	1	時間	09	分	・～・
8.	その他（具体的に：　　）	0	時間	8	分	・～・
	合計	2	4	時間	0	0	分	

年齢や収入等についておうかがいします。これらの項目は統計的分析のために用います。回答はすべて個人情報をとり除いた数値データとして分析しますので、ご回答いただいた内容からあなた様が特定されることはありませんので、ありのままお答えください。

問 29. あなたの年齢をお知らせください。(数字を記入)

現在 [全体平均 34.8] 歳

問 30. あなたが最後に行った(または在学中の)学校は次のどれにあたりますか。中退・在学中も卒業と同じ扱いでお答えください。(○は１つだけ)

35.6	中学校・高校	41.4	大学(４年制)
12.4	各種専門学校(高卒後)	5.8	大学院
3.6	短大・高専	0.8	その他(具体的に:)

0.4 NA

問 31. あなたご自身の昨年１年間の税込み年収(ボーナスなども含む)はどの程度ですか。(○は１つ)
※学術調査のために必要な問ですので、ご回答くださいますようお願いします。

0.4	収入はなかった	41.8	400 万円以上～600 万円未満
0.6	100 万円未満	23.8	600 万円以上～800 万円未満
1.8	100 万円以上～200 万円未満	5.6	800 万円以上～1,000 万円未満
3.8	200 万円以上～300 万円未満	4.4	1,000 万円以上
15.6	300 万円以上～400 万円未満	2.2	NA

問 32. あなたが小学生だった頃、もっとも長く住んでいた場所は下記のどれにあてはまりますか。(○は１つ)

39.0	31.8	28.2	1.0
現在の居住地とおなじ市区町村	現在の居住地とおなじ県内	現在の居住地とちがう都道府県	その他 ( )

本アンケートにご協力いただき誠にありがとうございました。
大変恐れ入りますが、最後にもう一度記入漏れがないかをご確認願います。
回答した調査票をそれぞれ封筒に入れて、調査員にお渡しください。

調査票(お母様票)

子育てに関する意識調査

平成 19 年６月

支局		地点			対象番号		点検者

(調査企画)社団法人全国私立保育園連盟
保育・生活環境研究会
(調査実施)中央調査社

保護者の方へ

〔ご記入に際してのお願い〕

・本アンケートは、乳児(３歳以下)をもつお母様(もしくはお母様に準じる方)にお答えいただくものです。

・本アンケートは、無記名で回答するものです。ご回答いただきました内容については、厳重に管理し、研究以外の目的に使用することは一切ございません。

・調査結果は、「どのような意見の方が何%いる」というように統計数値として処理し、ご回答いただきました皆様に個人的にご迷惑をおかけすることはございませんので、ありのままお答えください。

・質問の番号の順番に従って、お答えください。ただし、質問によっては、一部の方だけにお伺いする質問もあります。各質問の指示(問９へ　など)に従ってお答えください。

・質問文の後には、(○は１つ)(○はいくつでも)(数字を記入)などの指示がありますので、この指示にもとづいてご記入ください。

・「その他」を回答された場合は、その他(　　)の括弧の中にはなるべく詳細に書いてください。

・調査票の右欄の⑪などの数字は集計上の記号です。お気になさらずお答えください。

ご回答いただきましたアンケート用紙は、回収用封筒に入れていただき、調査員にお渡しくださいますようお願いいたします。

【調査実施】中央調査社
担当：名古屋支社　合瀬
電話: 052-231-4619
月～金 9:00～17:00

社団法人　中央調査社は財団法人　日本情報処理開発協会が推進する「プライバシーマーク」認定を受けております。皆様の個人情報やご協力いただきましたご意見は、個人情報保護方針に従い、情報管理を徹底いたします。

(8698)

はじめに、あなたのお子様全員の、性別や年齢などを以下の表にご記入ください

⑧～⑩＝201

順番	性別（○は１つ）	満年齢（数字を記入）	現在、保育園・幼稚園に入所していますか（それぞれ○は１つ）	
第１子	1. 男の子 2. 女の子	満　歳　カ月	1. 保育園（一時保育除く） 2. 幼稚園 3. どちらにも通っていない	⑪～⑯
第２子	1. 男の子 2. 女の子	満　歳　カ月	1. 保育園（一時保育除く） 2. 幼稚園 3. どちらにも通っていない	⑰～・
第３子	1. 男の子 2. 女の子	満　歳　カ月	1. 保育園（一時保育除く） 2. 幼稚園 3. どちらにも通っていない	・～・
第４子	1. 男の子 2. 女の子	満　歳　カ月	1. 保育園（一時保育除く） 2. 幼稚園 3. どちらにも通っていない	・～・
第５子	1. 男の子 2. 女の子	満　歳　カ月	1. 保育園（一時保育除く） 2. 幼稚園 3. どちらにも通っていない	・～・

次に、あなたの１歳～３歳までのお子様についてうかがいます。該当するお子様が２人以上いる場合は、そのうち一番下のお子様についてうかがいます。

（問１～問 13 は、１歳から３歳までの一番下のお子さんについてお答えください）

問１．あなたのお子さんは卒乳（断乳）していますか。（○は１つ）

79.2　はい → 付問１－１．卒乳（断乳）したのはいつごろですか。（○は１つ）　・
20.4　いいえ　　満 1 歳 1.7 か月　・～・

0.4 NA

問２．お子さんの食生活についてあてはまるものに○をつけてください。母乳・ミルクのみの場合は、「７」に○をつけてください。（○はいくつでも）

51.0	遊びながら食べる	12.6	小食である
15.4	偏食がひどい	11.4	食べ過ぎる
51.2	食べる量にむらがある	2.2	母乳・ミルクのみ
28.4	食べるのに時間がかかる	11.6	あてはまるものはない

・

問３．お子さんの就寝のしかたであてはまるものに○をつけてください。（○はいくつでも）

71.0	母と同じフトンまたはベッドで就寝	49.0	父と同室で就寝
26.4	父と同じフトンまたはベッドで就寝	0.8	親とは別室で就寝
92.2	母と同室で就寝	7.0	その他（具体的に：　　）

・

問４．最近１ヶ月、あなたは、そのお子様の子育てをどのくらいしましたか。実際にしたと思うおおよその日数に、１つだけ○をつけてください。（それぞれ○は１つ）

		ほぼ毎日	週４～５日程度	週２～３日程度	週１日程度	ほとんどなし	NA
a	子どものおむつを替える／トイレを手伝う	93.2	2.0	1.4	0.2	3.0	0.2
b	子どもの食事（ミルク含む）のしたくをする	97.6	1.0	0.8	0.2	0.2	0.2
c	子どもの食事（ミルク含む）を手伝って食べさせる	82.8	1.6	5.2	1.0	9.2	0.2
d	子どもの着替えをさせる	92.8	2.2	1.6	1.2	2.0	0.2
e	子どもと一緒にお風呂に入る	64.2	15.6	10.8	3.4	5.6	0.4
f	子どもの歯磨きをする	79.4	8.2	5.6	2.6	4.2	－
g	子どもを寝かしつける	84.8	7.2	4.0	0.6	3.4	－
h	育児用品を買いにいく	23.4	1.0	9.6	52.8	12.8	0.4
i	子どもに話しかけたり、話し相手をする	99.0	0.2	0.4	－	－	0.4
j	子どもに絵本を読み聞かせる	38.8	15.2	23.0	13.4	9.0	0.6
k	子どもと一緒に遊ぶ	86.2	5.6	6.0	1.8	0.2	0.2
l	子どもに言葉、数、文字などを教える	59.8	10.8	12.2	7.8	9.2	0.2

問５．お子さんの平日のすごしかたについてお聞きします。生活リズムは決まっていますか。（○は１つ）

33.4 決まっている　62.2 おおよそ決まっている　3.8 あまり決まっていない　0.6 決まっていない　・

問６．お子さんの平日の生活時間を、24 時間表記、10 分単位でご記入ください。生活リズムが決まっていない場合には、もっとも近い平日の生活をお答えください。

記入例）　降園（園を出る時刻）　1 7 時　0 0 分頃

午後は 12～24 の数字で記入　0～5 を記入

1. 起床時刻	時	0	分頃　・～・
2. 朝食（開始時刻）	時	0	分頃　・～・
3. 登園または外出（家を出る時刻）	時	0	分頃　・～・
4. 昼食（開始時刻）	時	0	分頃　・～・
5. 昼寝（寝つく時刻）	時	0	分頃　・～・
6. 昼寝（起きる時刻）	時	0	分頃　・～・
7. 夕食（開始時刻）	時	0	分頃　・～・
8. 就寝時刻	時	0	分頃　・～・

⑧〜⑩=202

問７．お子さんがふだんテレビ、ビデオ、DVDなどをみている時間はあわせてどのくらいですか。ただし、通信教育や英語教材などに付属の視聴覚教材も含みます。

全体平均（平日１日あたり）　2 時間 1 8 分　⑪〜⑭

問８．あなたのお子さんは現在、習い事をしていますか。（○はいくつでも）

5.0　スイミング
3.0　（スイミング以外の）スポーツ
3.0　バレエ・リトミック
3.0　音楽関係
4.8　語学
6.0　通信制や一括購入による家庭教育
4.2　知育を中心とした幼児教室
4.6　その他（具体的に：　　　　　）⑮
73.4　習い事はしていない

問９．そのお子様について、現在お悩みのことはありますか。（○はいくつでも）

27.8 いうことをきかない
15.2 着替えや歯磨きなど身の回りの世話が大変
9.6 夜更かしなど、子どもの生活リズムが不規則
12.2 テレビやビデオを見すぎる
7.8 病気にかかりやすい
23.0 食が細い・偏食・過食である
7.4 言葉や心身の発達が遅い
18.2（あなたが）子どもを叱りすぎる
2.6（あなたが）子どもとの接し方がわからない ⑯
5.8（あなたが）子どもと十分接することができない ⑰
12.2 その他（具体的に：　　　　　）
30.8 特にない

問 10．お子さんの様子についてお聞きします。お子さんがしていることに○をつけてください。ただし、いまはしていなくても以前やっていたことがある項目は「する」とお答えください。（それぞれ○は１つ）

		する	ときどきする	しない	NA
a	そばにあるおもちゃなどに手をのばしてつかむ	96.6	1.2	2.0	0.2
b	１人遊びをする	92.2	6.8	1.0	-
c	おとなのかんたんなことばを理解する	93.4	4.8	1.8	-
d	ことばをいくつか話す（ワンワン　など）	89.2	5.0	5.8	-
e	こぼしながらでも１人で食べる	84.2	10.0	5.8	-
f	クレヨンなどでめちゃくちゃ書きをする	82.6	8.8	8.6	-
g	かんたんな文章を話す（ワンワン　キタ　など）	73.6	2.6	23.8	-
h	友だちといっしょに遊ぶ	67.8	20.8	11.4	-
i	ごっこ遊びをする	65.0	11.2	23.8	-
j	自分が見たり聞いたり経験したことを親に話す	56.0	11.0	33.0	-
k	昼間のオムツをせずにすごす	35.0	10.4	54.6	-

問 11．子育てを支えてくれる人と自分の周囲にいる人についておうかがいします。あなたには、次のａとｂのそれぞれにあてはまる人はいますか。（それぞれ○は１つ）

	あなたの親	配偶者の親	兄弟姉妹	その他の親戚	近隣の人	友人
記入例）子どもの遊び相手をしてくれる人	1 いる ②いない	1 いる ②いない	①いる 2 いない	1 いる ②いない	①いる 2 いない	①いる 2 いない
a. あなたの外出中に、子どもの世話をしてくれる	60.4 いる いない	52.0 いる いない	30.0 いる いない	12.0 いる いない	13.8 いる いない	27.4 いる いない
b. 育児の相談にのってくれる人	90.0 いる いない	66.6 いる いない	55.4 いる いない	31.4 いる いない	48.0 いる いない	87.6 いる いない

問 12．あなたの家族は、地域の子育てサービスなどを利用していますか。利用しているものすべてに○をつけてください。（○はいくつでも）

31.0　親子で遊べる子育てひろばなど
27.0　児童館
3.6　ファミリーサポートセンター
3.8　一時保育
1.4　ベビールームなど（有料）
0.4　トワイライトステイ
4.8　ショートステイ
4.8　その他（具体的に：　　　　　）
54.8　特にない　→　（6ページの問 13 へ）

（問 12-1a〜問 12-6 は、問 12 で１〜８に○がついた方に）　問 12-1a〜問 12-6 は　n=226

問 12-1a．上記の問 12 の子育てサービスの中でもっともよく利用しているサービスを１つお答えください。あてはまる数字をご記入ください。

もっともよく利用しているサービス	番（番号は１つだけ）

上位２位　①親子で遊べる子育てひろばなど（46.5）、②児童館（34.5）

b．ａで回答されたサービスの利用についてお答えください。（○はそれぞれ１つ）

・１週間の利用日数（○は１つ）	65.0　週１日 18.6　週２日〜３日	3.5　週４日〜５日 1.3　ほぼ毎日　11.5 NA
・１回あたりの利用時間（○は１つ）	79.6　１〜２時間 12.8　３〜４時間	4.4　５〜６時間 1.8　それ以上　1.3 NA
・利用料金（○は１つ）	20.4　有料	78.3　無料　1.3 NA

問 12-2．そのサービスの中で利用している内容はどのようなものでしょうか。（○はいくつでも）

78.3 親子で遊ぶひろば
8.8 育児、家庭相談など
8.4 一時保育
1.8 講習会・講演会
16.8 サークル活動
2.2 子どもの健康診断、健康相談
16.4 各種イベント（行事など）
0.9 カウンセリング
4.9 その他（　　　　　）

問 12-3．利用している施設・機関の職員（スタッフ）との関係についておたずねします。（それぞれ○は１つ）

		当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
a	職員と子どものことについて話す機会がよくある	16.4	31.0	28.8	23.9
b	家庭の状況もよく理解してくれている職員がいる	8.0	19.0	21.7	51.3
c	相談にのってもらいたいと思うときに、相談できる雰囲気がある	17.7	34.5	27.9	19.9

問 12-4. 利用している感想をおたずねします。(それぞれ○は１つ)

	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
a　利用するようになってから、子どもへの接し方が変わった	14.6	37.6	32.7	15.0
b　利用するようになってから、子どもへの理解が深まった	18.6	37.6	31.9	11.9
c　子どもの遊びがひろがった	43.8	44.7	6.6	4.9
d　子どもが楽しそう	66.4	30.1	1.8	1.8

問 12-5. 利用をしたことで変化したことがありますか。(それぞれ○は１つ)

	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
a　親（自分）に友達ができた	38.1	26.1	17.7	18.1
b　親同士のつながりはあまりない	17.7	23.9	37.6	20.8
c　親同士で子育ての悩みを言える	31.9	34.1	15.5	18.6

問 12-6. あなたが現在利用している子育て支援の施設に期待したいことはどれでしょうか。(○はいくつでも)

23.0　開設曜日の増加	33.2　施設の設備の充実
18.1　利用時間の延長	27.4　園庭の充実
19.9　利用サービスの充実	32.3　おもちゃなどの子どもの遊びの充実
3.1　職員の対応の改善	37.2　親の休息の場の充実
11.1　職員の専門性	3.5　その他（具体的に：　　）
5.3　職員の増員	20.8　特にない

（全員の方に）

問 13. 以下の中で、あなたが希望する子育てサービスがありましたら、お答えください。(○はいくつでも)

31.4　一日保育	9.8　遠足
11.8　昼食サービス(有料)	8.6　おもちゃの貸し出し
4.2　子どもの午睡室	11.0　絵本の貸し出し
17.6　親の休憩室	34.4　子どもの外遊び保育
9.0　家事サービス	25.2　病児保育
20.6　遊びの実習	3.6　その他（具体的に：　　）
	20.8　特にない

（次のページにお進みください）

次に、１歳から３歳までの一番小さいお子様のかかりつけ医についてうかがいます。かかりつけ医が複数いる場合は、もっとも利用する医療機関についてお答え下さい。

問 14. 一番小さいお子様に、かかりつけ医はいますか。(○は１つ)

93.4　はい　　6.6　いいえ　→　(問 15 へ)

問 14-1. その医療機関では、平日の夜間や休日の昼間・夜間に、お子様が医師による診療を受けることは可能ですか。(○は１つ)

7.7　いつでも診察を受けることができる	52.0　診察を受けることはできない
18.4　場合によっては診察を受けることができる	21.8　診察を受けられるかどうかわからない

問 14-2. 平日の夜間や休日の昼間・夜間に、その医療機関で診療を受けたことがありますか。(○は１つ)

26.3　過去に受けたことがある　　73.7　過去に受けたことはない

（全員の方に）

問 15. そのお子様は、過去１年間に、病気（風邪や発熱を含む）やけがで昼間に医療機関（救急外来を除く）を利用したことは何回程度ありましたか。(○は１つ)

11.2　ほとんどなかった	18.0　月に１回以上あった
62.8　年に数回あった	8.0　月に数回あった

問 16. そのお子様は、過去１年間に、病気やけがで救急外来を利用したことはありましたか。(○は１つ)

44.0　あった　　56.0　なかった

問 17. そのお子様は、過去１年間に、病気やけがで救急車を利用したことはありましたか。(○は１つ)

4.6　あった　　95.2　なかった　　0.2 NA

問 18. そのお子様は、過去１年間に、入院や手術を要するなど重症となった回数は何回程度ありましたか。ない場合は「０」を記入してください。(数字を記入)

[　　] 回程度

問 19. お子様は、持病（アレルギー（アトピーや喘息など）を含む）をお持ちですか。(○は１つ)

20.6　はい　　79.2　いいえ　　0.2 NA

問 20. お子様は、これまでに長期入院をするような大病をしたことがありますか。(○は１つ)

3.8　あった　　96.2　なかった

次に、お母様ご自身についておうかがいします。

問 21. あなたが小学生だった頃、もっとも長く住んでいた場所は下記のどれにあてはまりますか。(○は１つ)

30.4	42.4	26.0	1.2
現在の居住地とおなじ市区町村	現在の居住地とおなじ県内	現在の居住地とちがう都道府県	その他（　　）

日頃の生活についておうかがいします。

⑧～⑩＝203

問22. あなたのふだんの平日の過ごし方についてお聞きします。それぞれの行動にかけている時間はおよそどのくらいですか（合計で24時間になるように、10分単位でご記入ください）。

n=141（全てに回答があり、合計が24時間になる回答のみ）

1.	自分のケア（すいみん、食事、入浴など）	8	時間	1	0	分	⑪～⑬
2.	仕事（収入をともなう行動、仕事合間の休憩時間含む）	1	時間	4	7	分	⑭～⑯
3.	家事（炊事、洗濯、掃除、買い物、介護など）	4	時間	0	2	分	⑰～⑲
4.	育児（子どもの世話）	6	時間	5	7	分	⑳～・
5.	（4歳以上の）子どもや同居している家族との交流	1	時間	4	4	分	・～・
6.	自由時間（趣味、娯楽、交際、学習など）	1	時間	1	0	分	・～・
7.	移動（通勤・通学や買い物への移動など）	0	時間	4	9	分	・～・
8.	その他（具体的に：　　）	0	時間	2	2	分	・～・
	合計	2	時間	0	0	分	

お母様ご自身のお考えや意識についておうかがいします。

問 23. 以下には家族に関するさまざまな意見があげられています。それぞれの意見について、あなたはどう思いますか。（それぞれ○は１つ）

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	NA
a 父親と母親は、おなじように育児をすべきだ	19.2	45.4	26.0	9.2	0.2
b 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである	9.4	41.6	26.8	22.0	0.2
c ３歳になるまでは母親がそばにいてやることが、子どもの成長には必要だ	40.4	41.2	11.4	7.0	–
d 父親は、仕事よりも子育てを優先すべきだ	2.4	19.2	56.4	22.0	–
e 母親は、仕事よりも子育てを優先すべきだ	27.2	55.4	12.8	4.6	–

問 24. あなたはいまのご自分の生活にどの程度満足していますか。（それぞれ○は１つ）

	非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満	該当しない	NA
a 子どもとの生活	24.6	55.6	15.2	3.8	0.4		0.4
b 配偶者の家事・子育て	13.4	44.2	25.4	13.2	3.4		0.4
c 夫婦関係	14.2	50.6	26.6	7.0	0.8		0.8
d 仕事	3.0	14.6	13.8	3.0	0.4	62.8	2.4
e 生活全体	10.6	56.0	26.8	5.8	0.4		0.4

問 25. あなたは、現在いる子どもに加えて、さらに子どもがほしいですか。（○は１つ）

17.1	17.6	28.0	11.2	25.8	0.4
ぜひほしい	ほしい	どちらともいえない	あまりほしくない	ほしくない	NA

問 26. この１週間のあなたのからだや心の状態についてお聞きします。次のような気分やことがらをどのくらい経験しましたか。それぞれあてはまる番号に○をつけてください。（それぞれ○は１つずつ）

	まったくなかった	週に１～２日	週に３～４日	ほとんど毎日	NA
a ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じたこと	27.4	54.4	12.8	5.2	0.2
b 家族や友達から励ましてもらっても気分が晴れないこと	65.2	27.2	4.4	2.8	0.4
c 憂うつだと感じたこと	38.8	45.6	10.6	4.8	0.2
d 物事に集中できなかったこと	45.2	43.6	6.6	4.2	0.4
e 食欲が落ちたこと	64.6	27.2	6.2	1.8	0.2
f 何をするのも面倒と感じたこと	30.0	54.6	9.2	5.8	0.4
g 何か恐ろしい気持がしたこと	88.4	8.4	2.4	0.6	0.2
h なかなか眠れなかったこと	60.0	29.6	7.4	2.8	0.2
i ふだんより口数が少なくなったこと	71.2	23.6	3.8	1.2	0.2
j 一人ぼっちで寂しいと感じたこと	78.6	16.8	2.2	2.2	0.2
k 「毎日が楽しい」と感じたこと	14.6	30.4	34.6	20.0	0.4
l 悲しいと感じたこと	66.8	27.0	4.4	1.6	0.2

次に、ご夫婦のことについておうかがいします。

問 27. あなたは、配偶者の方といっしょにお住まいですか。（○は１つ）

100	–	–
いっしょに住んでいる	別居（単身赴任含む）	配偶者はいない（死別、離別等）
		→ (問 31 へ)

（問 28～30 は、問 27 で「１～２」と回答された方にお聞きします）

問 28. 夫婦間のコミュニケーションについておたずねします。（それぞれ○は１つ）

	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	NA
a 子どものことはよく話しをする	65.6	27.4	6.4	0.2	0.4
b いろいろな話題で話しがはずむ	31.8	43.4	21.8	2.6	0.4
c 配偶者（夫・妻）はわたしの心配ごとや悩みをきいてくれる	38.6	40.6	15.8	4.6	0.4
d 配偶者（夫・妻）はわたしの能力や努力を高く評価してくれる	23.2	37.8	29.4	8.8	0.8

問 29. 配偶者の子育てに対する関わりについて、どう感じていますか。（○はそれぞれ１つ）

	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	NA
a 子どもへの接し方がうまい	28.4	43.4	23.6	4.4	0.2
b 子どもの育て方に不満がある	4.4	36.0	44.8	14.4	0.4
c 子どもにもっと関わってほしい	18.2	32.0	34.2	15.2	0.4

問 30. あなたが配偶者に対して今以上に期待したいことはありますか。いずれもあてはまらない場合は、「８．特にない」に○をつけてください。（○はいくつでも）

28.8	家事	20.4	あなたへの関心
41.0	育児	8.2	異性としての魅力
28.6	経済力	4.0	その他（具体的に：　　）
15.0	働き方	4.0	特にない

次に、お仕事の状況についておうかがいします。

（全員の方に）

問 31. 現在のお仕事は以下のどれですか。（○は１つ）

- 9.4 フルタイムの勤め人（産休・育休中含む）
- 16.0 パート・アルバイト（産休・育休中含む）
- 1.0 派遣・嘱託
- 6.2 自営業・家族従業者
- 1.2 自由業・フリーランス
- 62.2 無職・家事 →（１１ページ問 38 へ）
- 3.8 その他（　　）
- 0.2 NA

付問 31-1. 現在、産休・育休中ですか。（○は１つ）

12.6 はい　83.5 いいえ　3.9 NA

（問 32 へ）

（問 32～37 は、問 31 で「１～５、７」を回答した人にお聞きいたします）

問 32. その仕事の種類は、大きく分けて次のどれにあたりますか。（○は１つだけ）

- 18.1 専門・技術系の職業（医師、弁護士、教員、ｴﾝｼﾞﾆｱ、看護師、作家、ﾃﾞｻﾞｲﾅｰ、編集者など）
- 1.1 管理的職業（課長相当以上の管理職、議員など）
- 28.2 事務・営業系の職業（事務員、営業社員、銀行員、タイピスト、集金人など）
- 30.9 販売・サービス系の職業（店主、店員、外交員、美容師、ｸﾘｰﾆﾝｸﾞ、給仕、接客、清掃、ﾍﾙﾊﾟｰなど）
- 11.2 技能,労務,作業系の職業（工場労働者、自衛官、警察官、職人、建設作業者、運転手など）
- 0.5 農林漁業職（植木職、造園業を含む）
- 7.4 その他（具体的に：　　）
- 2.7 NA

問 33. 平均的に、１週間に何日その仕事をしていますか。（数字を記入）

週あたり 全体平均　4 . 3 日

問 34. 現在、土曜日あるいは日曜日に働くことがどのくらいありますか。（○は１つ）

19.9 毎週　8.8 隔週　9.9 月に１度程度　61.3 土日出勤はほとんどない

問 35. 現在、夜間で働くことがどのくらいありますか。（夜間とは午後１１時以降とします。○は１つ）

3.4 ほとんど毎日　4.5 週に２～３日程度　1.7 月に２～３回程度　90.4 ほとんどない

問 36. 現在、残業時間は一日あたりどのくらいありますか。（○は１つ）

3.1 ３時間以上　4.4 ２～３時間程度　5.7 １～２時間以内程度　86.8 １時間以内

問 37. これまでの転職の経験はありますか。転職の経験がない場合は、「４」とお答えください。（○は１つ）

18.6 １回　11.7 ２回　22.3 ３回以上　43.1 転職をしたことはない　4.3 NA

最後に、年齢やご家庭の生活状況などについておうかがいします。

これらの項目は統計的分析のために用います。回答内容からあなた様が特定されることはありませんので、ありのままお答えください。

問 38. あなたの年齢をお知らせください。（数字を記入）

全体平均 現在　33. 1 歳

問 39. あなたが最後に行った（または在学中の）学校は次のどれにあたりますか。中退・在学中も卒業と同じ扱いでお答えください。（○は１つだけ）

- 32.0 中学校・高校
- 18.6 各種専門学校（高卒後）
- 29.2 短大・高専
- 19.0 大学（４年制）
- 0.6 大学院
- 0.2 その他（具体的に：　　）
- 0.4 NA

問 40. あなたご自身の昨年１年間の税込み年収（ボーナスなども含む）はどの程度ですか。（○は１つ）
※学術調査を行うために必要な問です。回答内容は一切外には出ませんので、ご回答くださいますようお願いします。

- 67.0 収入はなかった
- 17.8 100 万円未満
- 4.6 100 万円以上～200 万円未満
- 3.2 200 万円以上～300 万円未満
- 2.2 300 万円以上～400 万円未満
- 3.0 400 万円以上～600 万円未満
- 0.8 600 万円以上～800 万円未満
- － 800 万円以上～1,000 万円未満
- － 1,000 万円以上
- 1.4 NA

問 41. あなたの配偶者の昨年１年間の税込み年収（ボーナスなども含む）はどの程度ですか。配偶者がいない場合は「10」に○をつけてください。（○は１つ）

- 2.0 収入はなかった
- 1.2 100 万円未満
- 1.8 100 万円以上～200 万円未満
- 5.4 200 万円以上～300 万円未満
- 16.8 300 万円以上～400 万円未満
- 40.2 400 万円以上～600 万円未満
- 20.8 600 万円以上～800 万円未満
- 5.0 800 万円以上～1,000 万円未満
- 3.8 1,000 万円以上
- － 配偶者はいない
- 3.0 NA

問 42. あなたの現在のお住まいは次のどれにあたりますか。（○は１つ）

- 53.8 一戸建ての持ち家
- 4.0 一戸建ての借家
- 6.4 集合住宅の持ち家
- 31.2 賃貸のマンション・アパート
- 2.4 社宅・官舎・寮
- 2.0 その他（具体的に：　　）
- 0.2 NA

（３～５の方へ）
付問 42-1. お住まいは何階ですか。（数字を記入）n=185
全体平均　2. 5 階

問 43. あなたは予想外の出費が必要になった場合、どの程度心配ですか。（○は１つ）

7.4 まったく心配ない　49.6 少し心配　29.0 かなり心配　14.0 非常に心配

問 44. 趣味やささやかな贅沢を楽しむための経済的な余裕はありますか。（○は１つ）

7.2 十分にある　56.8 多少ならある　28.0 あまりない　8.0 まったくない

本アンケートにご協力いただき誠にありがとうございました。
大変恐れ入りますが、最後にもう一度記入漏れがないかをご確認願います。
回答した調査票をそれぞれ封筒に入れて、調査員にお渡しください。

執筆分担

松田茂樹（第一生命経済研究所主任研究員）

1章、3章、7章

汐見和恵（東京文化短期大学准教授）

4章

品田知美（立教大学講師）

2章

末盛慶（日本福祉大学准教授）

5章

下開千春（第一生命経済研究所副主任研究員）

1章、6章

乳幼児の育児と生活に関する実態調査

発　行　　平成20年3月

発行者　　社団法人全国私立保育園連盟

〒111-0051　東京都台東区蔵前4-11-10全国保育会館
電話：03-3865-3880（代）
FAX：03-3865-3879
HP　：http://www.zenshihoren.or.jp